

牧羊者

教師の方々へ

教会学校に来ている子どもたちは、大別して2種類に分けられます。クリスチャンホームの子とたちと、未信者家庭の子ともたちです。一般的には、歴史の長い教会には前者が多く、開拓期の教会には後者が多いものです。でも、公園伝道や分校活動などで、未信者家庭の子ともたちへの伝道に励んでいる教会もありますから、一概に言えません。

現在の多くの教会では、クリスマスホームの子ともたちが多数をしめるようになっていいると思われます。ひと昔前までは、未信者家庭の子ともたちが多かったことを考えると、残念なことす。しかし、考え方によっては、これは大きなチャンスとも言えます。

第一に、彼らは教会の「固定票」です。今まで親の祈りの中で育てられてきているわけですから、今後の導きによっては教会の大きな力になります。

第二に、人数がそれほど多くないので、すから、より深く人格的な交わりをすることができます。特に、現在の学校教育で欠けがちなっている「何が正しいことか」の教育を、聖書の権威をもってすることができます。

第三に、これが一番大切なことですが、教会全体で子どもたちを育てることができます。若い教師は、彼らの良いお兄さ

ん、お姉さんになってあげることができます。また子どもだけでなく、子育てに困難を感じている若い両親には、経験ある年輩の方々が助言をしてあげることができましよう。それでこそ、教会は「神の家」「神の家族」と言つことができます。

日本イエス・キリスト教団『式文』の「教会学校教師任命式」の項には、「教会学校は救霊と教会教育のための重要な務めであり、教会全体が果たすべき使命であります」と明記されています。教会学校の教師以外の兄弟姉妹にも、ぜひこのことを知っていただきたいのです。教会全体で、次の世代に教会を担う子どもたちを育てていくときにこそ、「教会教育」という言葉が本当の意味をもってくるでしよう。

『牧羊者』は、教会教育に視点を置いて編集されています。教会全体で子どもたちを育てていき、さらにまた、大人も共に育っていくために役立つものでありたいと願つています。聖書講解や研究資料はそのために用意されています。「内容がかなり難しい」というご意見を聞きますが、この意図をご理解いただければ幸いです。

しかし、未信者家庭の子どもたちをほつておいていいはずがありません。何と

か彼らにも福音を伝えたいと願つています。そのために、公園伝道や、分校活動がなされています。

公園伝道は、公園で遊んでいる子どもにお話をする方法です。外に出ていつて伝道することはすばらしいことです。でもオウム真理教の事件以来、多くの人は宗教を危険視するようになりました。教会に行くことはもちろん、公園での話を聞くことさえ許さない親もいます。

その点、教会員の家庭を用いて行なう分校は、大きな働きをする場合が多いものです。特にその教会員が地域の人々の信頼を受けているなら、親は安心して子どもたちが出席することを許してくれるでしよう。

しかし、なによりも大切なのは、現在来ている子どもたちが仲の良い友人を連れてくることです。そのためには、教会学校を楽しい内容にすることが非常に大切です。今回の特集記事である、キッズゲームなどの働きは、大いに参考になると思われます。

教会学校の働きは、未来の教会造りです。すぐに結果が出なくても、忍耐をもつて祈りつつ奉仕をしましよう。大きな犠牲を払って奉仕してくださっている教師の方々、決してその労苦はむだにはなりません。

(鎌野善三)

目次

インタビュー 藤田桂子師に聞く.....2

本書を用いる方々のために.....4

教案とワークブックの用い方.....5

年間カリキュラム.....6

10月教案.....8

11月教案.....24

12月教案.....40

1月教案.....60

2月教案.....76

3月教案.....92

編集後記.....112

10月

11月

12月

1月

2月

3月

●インタビュー● 藤田桂子師に聞く

藤田桂子先生は、長くCEF（日本児童福音伝道協会）のスタッフをしておられましたが、このたび、新しい時代の教会教育を考え、実行するためにJCM（ジャパン・クリエティブ・ミニストリーズ）を創設されました。先生の教会教育に対する考えとその活動を伺いました。

質問 まず、先生が教会教育に関心をもちようになられた経緯を話していただけますか。

私は友人にさそわれて、教会に行き、20歳のときに明確にイエス様を救い主として信じることができました。イエス様は、幼な子たちをはじめとして、社会の中の弱い立場の人々に関心をもち、救いに導くことで終わるのではなく、子どもも主の弟子となるように訓練することが大切であることを教えられました。そのためには教師の訓練が重要です。それゆえ、教会教育は子どもだけではなく、大人も含めた教会全体の働きと考えています。また、知恵遅れや身体障害児などの教育にも関わってきました。

質問 教会教育のために、何か特別な学びをされたのでしょうか。

神学については、カナダのバンクーバーにあるバプテスト・セオロジカル・カレッジで学びました。また、児童伝道については、日本CEFで、その後、CEFヨーロッパ本部で訓練を受け、またアメリカのCEF国際本部において青少年伝道

のためのコースをいくつか修めました。

「ゴール2002」の伝道活動のひとつであったキッズゲームについては、4月にコロラドスプリングスでのカンファレンスにも参加できました。今後のスポーツ子ども伝道に役立てたいと考えています。エジプトやインドでは、キッズゲームは大きな影響力をもち、教会に出席する子どもたちの数が激増したという報告もありました。時間に余裕のない子どもたちの多い日本と同列にはおけません。大きな可能性のある伝道法だと思っています。

この春のCEF国際カンファレンスには、世界の150カ国からの参加者と一緒にみこばを学び、飛込みの失敗で運動機能を失ったジョニー・エルクソン・タダさんのすばらしいチャレンジ・メッセージも聞くことができました。

質問 先生にとっては、教会教育は、色々な方法によって、福音宣教と弟子訓練をすることと云っているのでしょうか。

はい、その方法の一つは体験学習ゲームです。例えば「わたしは強い者は、強くない者たちの弱さにならなければならない、自分だけを喜ばせる

質問 なぜ体験学習ゲームは効果的なのでしょうか。

— 今の子どもたちは、話を聞いても、自分で考えることが少なくなっています。ゲームは、そういう子どもたちに考えさせるのです。つまり、体験して学習していくのです。特に、みんなと一緒に考えてきたときには、みんな大喜びします。その経験は強く心に残るのです。また、他者を理解することができたり、思いやりを持てるようになったりします。

質問 体験学習ゲームを取り入れた活動によって生じるマイナス面というのはあるのでしょうか。

— 体験学習ゲームは、楽しく真理を学ぶ方法ですが、それができたか否かで、人を評価することは危険です。例えば、二人でペアになり、一人が後向きに倒れて、他の一人がその人を受けとめるゲームがあります。人を信頼しているなら、後向きに倒れることを教えるためのものですが、それができない人を、「あの人はだめだ」と決めつけてしまつてはなりません。

質問 中学生に、個人伝道について教えられるとお聞きしましたが、どんな内容ですか。

— 「ゴスペル・キーホルダー」を子どもの個人伝道の方法として利用しています。サッカーボールの形をした、まず目のあるキーホルダーで、6色の色から福音の真理を話し進めていくのです。約20分で救いにまで導きます。

質問 中学生には、むずかしすぎるのではないのでしょうか。

— そういうことはありません。中学生は学ぶことになれているので、大人より早く学べます。また、多くの中学生はこの学びを通して自分自身の救いに対して確信をもちようになります。

「子どもから大人に至るまで、すべての人が救いの確信を持ち、クリスチャンとして成長し、彼らが日々主に仕えることの喜びをもって生きること、クリストのからだなる教会が建てあげられるよう、創造的なプログラムをもって教会に仕えること」。これがJCMの基本的な姿勢です。

質問 現在、このようなプログラムはどこで行われていますか。

— 個人伝道の方法は、単独でも、また、エリミヤ・チャレンジの中でも教えています。この春から私は沖縄に導かれ、いろんな教会でこのプログラムを紹介しています。また、幾つかの神学校で、将来、教会の児童伝道のために働きたい人々に対しても行っています。来年1月には、日本イエス・キリスト教団関東教区のCS教師研修会でも、ごく短い時間ですが、紹介させていただきます。

質問 先程ふれられたエリミヤ・チャレンジとは、どういう働きでしょうか。

— 「あなたはただ若者にすぎない」と言っているのではない。だれにでも、すべてわたしがつかわす人へ行き、あなたに命じることがみな語らなければ

ことをしてはならない（ローマ15:1）ということばを学ぶとき、次のようなゲームをします。

子どもたちにおしりを付けてすわってもらいます。そしてまず2人で手をつないで立ち上がらせるのです。さらに、手をつなぐ人の数を増やして10人、20人します。そこでどうすればみんな一緒に立ち上がるかを考えさせるのです。そうすると、動かないものにつかまることが秘訣であることに気がつきます。私たちの人生の動かない真理は何か。それがみこばであり、イエス様であること。を、このようなゲームによって学ぶのです。そして、動かないイエス様につながることにによって、強い人も弱い人も一緒に立ち上がることができることを知ります。神様の動きは、強い人のワンマンショーではなく、イエス様にある協力によってできるのです。

質問 障害をもつ子どもたちとは、どのように接するべきでしょうか。

— 身体的障害や知的障害など、障害の差異によって対応は変わりますが、基本的には障害があってもなくても、しつけの面では同じ一人の人格として自立できるよう、規律を重視します。特に、祈りを静かに真剣にすべきことは、厳しく教えます。神様を敬う態度をしっかりと身につける必要があるからです。

また、健常者の子どもが、目の不自由な子どもを理解するために、目隠しをしてゲームをするにと、一つの方法として挙げられます。

ならない（エリミヤ17）から名づけた、中学生の9日間にわたる訓練プログラムです。ゴスペル・キーホルダーを使った個人伝道、暗唱聖句の教え方、聖書レッスンを語る、カウンセリングの仕方、子ども会の計画などを学びます。中学生を訓練した上で、子ども会を開き、彼らと一緒に子ども伝道をするのです。中学生だけでなく、教会学校教師も参加します。そして、多くの参加者が伝道の喜びに燃やされています。

この夏のエリミヤ・チャレンジに参加した牧師先生は、次のような感想を述べてくれました。

「今回参加した私以外の高校生3人の、聖書を学ぶ姿、必死に伝道法をマスターしようとする朝方まで奮闘するその姿、公園や会堂での個人伝道や子ども会、カウンセリング等、学んだ事柄を必死に伝えようとするその一所懸命な姿に、わきめもふらずに伝道する昔の自分の姿を見ました。」

今日はお忙しい中、貴重なお話を聞かせていただき、本当にありがとうございました。

藤田桂子師の連絡先 〒901-2413
沖縄県中頭郡中城村津覇5 グリーンサイドマンション303 電話098-8895-8015

本誌を用いる方々のために

皆様の祈りの中で、『牧羊者』二〇〇二年度の下巻が発行できることを感謝します。上巻は、日本イエス・キリスト教団以外の教会からも多くの注文をいただき、感謝しています。より良い内容になるよう、祈りつつ努力しています。

五月に、執筆していただいている先生方と各教区の教会学校部員の先生方に集まっていただき、話し合う時をもちました。そこでの結果もふまえて、再度、『牧羊者』の編集方針や用い方を説明させていただきます。

基本的な編集方針

本誌は、人格的な交わりに強調点をいだいた編集がされています。まず生徒と教師との間に信頼関係が生まれ、それをもとにして、生徒の人格が目覚めて、神の前に立つことのできる者となることを、大きな目標にしているのです。

この人格的な交わりは、一朝一夕でできるものではありません。積み重ねが必要です。毎週のクラスのために、かなりの準備が必要です。日曜日の朝、ちょっと見るだけですませるわけにはいきません。教師の方々は大変ですが、ぜひ時間をかけて準備していただきたいと思います。

対象にしている子どもたちも、毎週続けて来ることを前提にしています。ですから、開拓教会などで、毎週来る子どもが違ふ場合は、用いにくいと思います。しかしその場合は、伝道的な内容の週のメッセージを繰り返して用いていただければ

幸いです（例えば、9月22日、10月20日、1月19日、3月2日など）。

また、聖書講解やメッセージ例に書かれていることのすべてを話す必要はありません。出席している子どもたちの年齢や経歴に応じて、必要な点だけを話していただければ結構です。『牧羊者』を手にもって生徒の前に立つことは決してなさらないでください。その日に話すことをまとめたノートかメモを前もって用意していただくことが、最善の方法かと思えます。

カリキュラムの修正

今年度も、上巻で発表したカリキュラムを、下巻では少し修正しました。前後関係に配慮して、より良い内容にするために変更したことです。ご了承ください。聖書箇所を変えたところが2箇所、順序を変えたところが2箇所あります。また週題を内容に即したものに替えたり、中心聖句を変えたところもかなりあります。詳しくは本書の6～7頁をご覧ください。この下巻のみを用いていた際に何の問題もありません。また、いつものように一覧表を付録としてはさみこんでいますので、机の前などにはってご利用ください。

中心聖句

今年度から、暗唱聖句ではなく、中心聖句という表現を用いています。しかし、暗唱に用いてい

ただいても何の問題もありません。ただ、長い聖句が選ばれている場合がありますのでご注意ください。一覧表では、最も重要な部分を太字にしています。この部分だけなら暗唱しやすいかと思えます。あるいは、各教会で別の適切な箇所を選んでくださっても結構です。

カリキュラムの解説

下巻は、第Ⅱ期「神の前に立つ備え」の中の、「神の国の価値観」から始まっています。9月前半までに学んだ十戒をもとにして、それを主イエスの再臨の日まで、忠実に守ることの大切さを教えます。

その後、6週間かけて、有名な「愛の章」を詳しく学びます。すべての戒めは、神と人を愛することに帰着することを示してください。本当の愛は、イエス・キリストの生涯において現わされました。このお方を模範にして歩みましょう。

12月からは、第Ⅲ期「主イエスとの関係」にはいります。まず降誕節で、主を心に迎え入れることを学んだ後、12月最終の週から、「イエスに出会った人々」6人の姿を見ます。ただし、最初の2週は、主イエスがどういうお方かの紹介です。

3月には、主イエスが「わたしはきたのは」と言われたらつこの箇所を開き、主がこの地上においてになった目的を学びます。神であるのに人となられたのは、罪人である私たちが、このお方に会ったためだと気づくように教えてください。

ワークブックの種類と使用法

本誌には、A・B・C・Dの四種類のワークブックが用意されています。Aは未就学児用、Bは小学1～2年用、Cは3～4年用、Dはそれ以上用と、一応分けられていますが、実際には、それにこだわらずに、自由に用いてください。

特に今年度からは、その週の生徒の出席数に応じて、必要なだけコピーをとってもいいようにしました。ですから、ある週はBを、別の週はCを用いることもできます。コピーをとる手間が必要ですが、分級の運営のためにも、経済的にも、楽になったのではないかと思います。ただ、ワークAは、工作などに用いますので、厚手の紙にコピーしてください。近所に取り扱っている店がない場合は、通信販売会社バイキングを用いられると便利です。〇二〇一八四五一四六四に電話して申し込むと、翌日には送ってくれます。

教会の事情により、日付と違う週に用いる場合があることをお聞きしました。その場合には、日付を修正してコピーしてください。また、「とじるための穴がほしい」との意見もありましたが、上でも横でも、ふさわしい所にパンチ穴をあければ、問題なくとじられると思います。

フラッシュカードは、今回も各教会に一部つつ無料でお送りすることにしました。拡大して、紙芝居のように用いてください。「メッセージ例がむすかしい」と感じておられる教会では、このフラ

ッシュカードを用いてお話くだされば、ある程度、わかりやすくなることでしょう。この場合も6枚全部を用いる必要はありません。

他教団で、ワークブックやフラッシュカードを必要とされる方がおられましたら、発行所までご連絡ください。実費でおわけします。

最後に、初めて用いられる方のために、各ワークブックの特徴と使用法を簡単に説明します。本誌に毎週載せられているコメントを十分理解した上で、まず先生方がワークをなさってみてくださるなら、良い備えになるでしょう。

ワークブックA

切ったり、貼ったり、塗ったりすることが多いワークです。その日のメッセージに直接関係する内容はかなりではないのですが、一番大切なことを子どもが覚えておくことができるように、準備されています。クラスに、はさみ・のり・クレヨンなどを常備しておいてください。教師は、少なくとも前日にはワークに目を通して、紙コップや紙皿等、用意すべきものがないかをチェックしておいてください。分級の時間には、子どもたちと一緒に作業しながら、その日の目標が理解できるように話してください。

ワークブックB

このワークでは字を書くことも多くなります。多少時間がかかっても、子どもが自分で考え、自

分で書き込むまで、忍耐をもって待ちましょう。

本誌の説明のページに、毎週、その日の内容にふさわしい子ども用賛美歌を選んで載せていますので、参考になさってください。これらの曲を吹き込んだテープがありますので、必要な方は発行所まで申し込んでください。実費でお送りします。

ワークブックC

最初に中心聖句を確認して、中心テーマをとらえます。それから、中心テーマが意味していることが何かを考え、最後に適用質問に移ります。中心テーマに対して、適用は無限にあります。ここで、この1週間をどのように過ごすべきかを考えるのです。次の週に反省することも大切です。

ワークブックD

このワークは、10月20日から、適用質問を重視して作成しています。子どもたちが実際に直面する問題をあげて、自分ならどうするかを書いてもらうのです。聖書に書かれていることの確認は、「中高科へのヒント」などで補ってください。

中高科へのヒント

これは、ワークを用いることに抵抗感のある中高生のために用意されています。教会の実情に応じて、ワークDを用いるか、それともこのような質問でクラスを運営するか、自由に決めてください。質問も全部する必要はありません。大切なのは、教師と生徒が話し合うことです。

教案とワークブックの使い方

神に会う備え

中心聖句・アモス4:12

イスラエルよ、

あなたの神に会う備えをせよ。



第Ⅰ期

神の救いの計画

2002年		テーマ	聖書	中心聖句
4月7日	進級式	神の良い計画（摂理）	創世記37:1～50:26	同上
4月14日	モーセの備え	召命を受けたモーセ	出エジプト記23:4～17	フル11:24～25
5月5日	全能の主による救い	主の過越	出エジプト記12:1～13:10	同上
5月12日	イスラエルを守られる主	父母を敬う	出エジプト記17:1～14:31	同上
5月19日	荒野での試み	真理の御霊	出エジプト記15:22～16:36	同上
6月2日	父の日	十戒の意義	出エジプト記19:1～20:17	同上
6月9日	父の日	破れ口を立てて	出エジプト記32:1～33:23	詩篇106:23
6月16日	父の日	ヨシユアとカレブ	民数記13:17～14:25	同上
6月23日	父の日	ヨシユアの備え	ヨシユア1:1～9	同上
7月7日	父の日	ヨルダン川を渡る	ヨシユア3:1～17	同上
7月14日	父の日	エリコとアイ	ヨシユア6:1～8:29	同上
7月30日	父の日	ギデオン	士師6:1～7:25	同上
7月31日	父の日	サムソン	士師13:1～16:31	同上

第Ⅱ期

神の前に立つ備え

●十戒		テーマ	聖書	中心聖句
7月21日	唯一の神を礼拝せよ	みくに主の名を唱えるな	出エジプト記20:1～6	同上
7月28日	安息日を守れ	両親を敬え	出エジプト記20:7～11	同上
8月4日	殺してはならない	殺してはならない	出エジプト記20:12	同上
8月11日	姦淫してはならない	姦淫してはならない	出エジプト記20:13	同上
8月18日	盗んではならない	盗んではならない	出エジプト記20:14	同上
8月25日	偽証してはならない	偽証してはならない	出エジプト記20:15	同上
9月1日	振起日	振起日	出エジプト記20:16	同上
9月8日	振起日	振起日	出エジプト記20:17	同上
9月15日	振起日	振起日	出エジプト記20:18	同上

●神の国の価値観		テーマ	聖書	中心聖句
9月22日	1匹の羊の大切さ	神の国の労働	マタイ18:12～14	同上
9月29日	神の国の労働	神の国の労働	マタイ20:1～16	同上
10月6日	10人のおとめ	タラントを用いる	マタイ25:1～13	同上
10月13日	タラントを用いる	タラントを用いる	マタイ25:14～30	同上

●見えないものに目をおく		テーマ	聖書	中心聖句
10月20日	愛は寛容である	愛は寛容である	1コリ3:4	同上
10月27日	愛は情け深い	愛は情け深い	1コリ3:4	同上
11月3日	愛はねたまず誇らない	愛はねたまず誇らない	1コリ3:4	同上
11月10日	愛は不作法をしない	愛は不作法をしない	1コリ3:5	同上
11月17日	愛は自分の利益を求めない	愛は自分の利益を求めない	1コリ3:5	同上
11月24日	愛はすべてをおおふ	愛はすべてをおおふ	1コリ3:7	同上

第Ⅲ期

主イエスとの関係

●降誕節		テーマ	聖書	中心聖句
12月1日	アドベント	ひとり静まって祈る	マタイ6:1～13	同上
12月8日	マリアへの告知	マリアへの告知	ルカ1:26～38	同上
12月15日	マリアの賛歌	マリアの賛歌	ルカ1:39～56	同上
12月22日	クリスマス	羊飼いの訪問	ルカ2:1～20	同上

●イエスに出会った人々		テーマ	聖書	中心聖句
12月29日	年末感謝	荒野の試み	マタイ4:1～11	同上
1月5日	新年	ヨハネの証言	ヨハネ1:19～34	同上
1月12日	新年	最初の弟子たち	ヨハネ1:35～51	同上
1月19日	新年	ニコデモ	ヨハネ3:1～17	同上
1月26日	新年	サマリヤの女	ヨハネ4:1～26	同上
2月2日	新年	ベテスダの池の病人	ヨハネ5:1～9	同上
2月9日	新年	カナンの女	マタイ15:21～28	同上
2月16日	新年	バルテマイ	マルコ10:46～52	同上
2月23日	新年	足を洗われた弟子	ヨハネ13:1～15	同上

●わたしが来たのは		テーマ	聖書	中心聖句
3月2日	上からきたかた	上からきたかた	ヨハネ8:21～30	同上
3月9日	罪人を招くため	罪人を招くため	ルカ5:27～32	同上
3月16日	律法を成就するため	律法を成就するため	マタイ5:17～20	同上
3月23日	剣を投げ込むため	剣を投げ込むため	マタイ10:34～39	同上
3月30日	人々に仕えるため	人々に仕えるため	マタイ20:20～28	同上

聖書 マタイ25・1～13

テーマ 10人のおとめ

序論

マタイ25章には、再臨にいかにも備えるべきが、3つの話によって教えられている。10人のおとめ、タラントを預かった僕、審判の時に報われる最も小さな者に仕えた者の話である。そのどれもが、神の国の価値観を明確にしている。最初の譬え話は今週、二番目は来週に学ぶ。

一、あかりが必要

この譬え話で、△花婿▽は主イエス、△花嫁▽は教会、△10人のおとめ▽は信徒をさしている。主は再び地上においでになるが、△その日その時▽がいつであるのか、私たちにわからない。では、どのようにその日に備えるべきか。当時の習慣によれば、花婿は夕方に花嫁の家へ行き、そこで婚宴が開かれていた。夜に花婿が来るのなら、あかりが必要なのは言うまでもない。では、あかりとは何を意味しているのか。主イエスは、△あなたがたは、世の光である。…あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい▽と言われた(マタイ5・14、16)。私たちは、この地上において、光を輝かさなければならぬ。私たち自身が世の光で、その光を出すあたりは、よいおこないである。10人のおとめたちはみな、花婿を迎えるために、あかりが必要であることを知っていた。

二、油が必要

では油は何を意味するのか。聖書の中では油が聖霊の象徴とされる場合も多い。しかし今週の場合は、油が聖霊であかりが信仰だと解釈するならば、信仰が消えかかってよいことになる。でも信仰がなければ神の国にはいることはできない。またこの譬え話では、油は買えるもののように描かれているが、聖霊様はそのようなお方ではない。聖霊様は、人の状態の如何によらず、信仰ある者に臨在される助け主である。聖霊様が主人で私たちは僕なのだ。僕に主人が左右されることはない。だから、ここでの油は、信仰のことだと解釈するほうが良いだろう。よいおこないを生み出すのは、信仰にほかならない。マタイ25章は、信仰のおこない、賜物を用いたおこない、最も小さい者に対するおこないと、再臨に備えるおこないについて述べていると考えられる。よいおこないがでず、あかりが消えかかっていても、信仰の油があるなら、光は再び輝き出すのである。

三、目を覚まして用意するもの

この譬え話で重要なのは、思慮の深い5人のおとめは△自分たちのあかりと一緒に、入れものの中に油を用意していた▽ことである。つまり、彼女らは、あかりをともし続けるために、油が必要であることを自覚していた。しかも、花婿の到着が遅れる場合があることも、十分考えにいれていたのだ。しかし思慮の浅い5人のおとめは、あかりさえ用意すればそれで十分だと考えていた。彼女らが、△あなたがたの油をわたしたちにわたしてください▽と言っているのは、信仰がどういものかを理解していない証拠である。

主イエスは、2千年たった現在も、まだこの地上に再臨されてはいない。自分の力だけで良いおこないをしようと努力する律法主義者は、途中で力尽きてしまった。しかし、主の再臨の約束を信じる者は、その信仰をまっとうする。よいおこないをするにも倦むことがない。

結論

預言者ハバククは、△もしおそれれば待つておれ。それは必ず臨む。滞りはしない。見よ。その魂の正しくない者は衰える。しかし義人はその信仰によって生きる▽ (2・3、4) と記した。主の再臨を待つ私たちに必要なのは、居眠りをしてしまう弱さを持ちながらも、主イエスを信じる信仰を失わないことである。目を覚まして用意しておくべき第一のものは信仰の油だ。その油によってよいおこないを輝かせられるからである。

研究資料

(足立)

マタイの福音書には、イエスが語った5大説教が記されている(5～7章、10章、13章、18章、24～25章)。その中で24～25章は終末に関するメッセージであり、時期としてはキリストの十字架架直前の説教となる。25・1～13は10人のおとめのとたとえと称されるが、この箇所を理解する鍵は24章の45～51節にある。特に、「主人がその家の僕たちの上に立てて、時に應じて食物をそなえさせる忠実な思慮深い僕は、いったい、だれであろう」(24・45)とあるが、10人のおとめのとたとえは、イエスの再臨を思慮深く待つ姿勢を教えている。24・45の思慮深い(フロニモス)ということばは、25・2、4、8、9でも使われている。

テキスト

1 たとえの主旨を理解するためには、当時のユダヤ人の結婚式を知る必要がある。結婚式は夜、盛大に行われた。花婿は友人たちと花嫁を迎えに行き、おとめたちの持つあかりで花嫁の家から花婿の家まで行進することになっていた。このおとめたちが、たとえの中心人物である。

2 おとめたちは2つのグループに分かれていた。5人という数字に特別な意味はない。重要なことは、思慮が浅い者と思慮深い者がいたということ。思慮が浅い(モウロス)ということばは、新約聖書中12回使用されており、本福音書では6回出てくる(5・22、7・26、23・17、25・2、3、

8)。一方、思慮深い(フロニモス)ということばは、新約聖書中14回使われており、本福音書では7回出てくる(7・24、10・16、24・45、25・2、4、8、9)。

3 4 10人のおとめたちは全員があかりを持っていた。しかし思慮深いおとめたちが油を用意していたのに対して、思慮が浅いおとめたちは油の備えがなかった。花婿を迎えるには、あかりをともすことが絶対必要であった。あかりをともし続けるには油の備えが重要になってくる。花婿がいつ来るかわからないので、入れものの中に油を用意し、きわめて慎重な準備をしたおとめたちが思慮深いといわれている。

5 花婿の到着が遅れるとは、キリストの再臨が遅いと思われるような状況があるということである。花婿の遅延によっておとめたち全員が睡眠に陥った。しかしこのことをイエスは非難していない。信仰者も疲れて睡眠に襲われることがある。6 花婿の到着は夜中であつた。厳密に言うところ、実際に着いてはいないが、花婿が目撃されており、到着を示唆する声が聞こえた。

7 10人のおとめたちはみな飛び起きて、即座に各自あかりを用意した。

8 ここで2つのグループにある違いがあらわれ始める。思慮の浅いおとめたちはこの時点で自分たちが困難の中にあることに気づいた。彼女たちのあかりは消えかかっている。しかし即座にパニックに陥ったのではないようである。彼女たちは思慮深いおとめたちに油の分与を頼んでいる。

9 油を分けてくださいという要求を断るのは非情な感じがする。しかし行列の途中で油が切れてあかりがすべて切れてしまうのはよくない。思慮深いおとめたちの主張はしかたない。また祝いの日には真夜中でも店を開けてくれるので、自分の油を自分自身で買っていくのは可能である。イエスはここで思慮深いおとめたちの応答の中に、油断のない終末への備えの姿を教えておられる。

10 花婿の遅れは、思慮が浅いおとめたちにとって致命的であつた。彼女たちが油を買いに出ている間に、花婿が到着した。そして一行は花婿の家に向かい、婚禮の祝宴が始まった。花婿の到着に対して用意ができていたおとめたちは、喜びの祝宴を共有している。戸が閉められたのは、妨害者の侵入を防ぐためである。イエスが求める思慮深さとは、主の再臨が遅くなってもいように備えることにある。

11 思慮が浅いおとめたちが油を手に入れて(あるいは手に入れられないで)祝宴の場に戻ってきて、戸を開けてくれるよう嘆願した。ご主人様、ご主人様という呼びかけは、マタイ7・21～23を想起させる。

12 しかしという一語が極めて重い。思慮が浅いおとめたちの要求が、主人によって断固拒否されている。声は届いているが、場所を共にすることができない、非常に厳しい現実。再臨の主イエスを待ち望んでいるかのように見える人々の中にも、神の国の祝福に与れない人がいる。

13 参照 24・36、42、43、44、50。

聖書 マタイ25・1～13

タイトル よい行いに疲れないために

中心聖句 目をさましていないさい。その日その時が、あなたがたにはわからないからである。 マタイ25・13

目標 再臨を待つ信仰が、よい行いに倦ませないことを発見する。

導入

イエス様は、2千年前に昇天されましたが、もう一度この地上に來られることを約束されました。それ以来、イエス様を信じる人々は、その日をずっと待っています。でもまだその時は来ていません。そんな人々に対して、イエス様は次のようにして待ちなさいと、教えられたのです。

(起) ストーリーを語る

イエス様は、自分が世の終わりに再びこの地上に來られるときに、目を覚まして用意している思慮深い僕とはどういう人かを教えるために、弟子たちに譬え話をされました。

ユダヤの国の結婚式はたいへん華やかです。花婿さんは、夕方、親戚の人や友人たちと一緒に、花嫁の家に行列を作って歩いていくのです。花嫁さんの家では、花婿さんの来るのを今か今かと待っています。そしてみんなそろった後に、こちらそうがいっぱい出るパーティーが開かれます。

この時も、花嫁さんの友だちのおとめ10人が、花婿さんが来るのを待っていました。夜になるこ

とはわかっていましたから、油のはいった灯を、一人一人が手に持って、いつ来てもよいように準備していました。

しかしどういうわけか、待っても待っても、花婿さんの一行はやってきません。その内、一人の人が居眠りを始めました。いえ、一人だけではありませんが、10人みんなが居眠りを始めたのです。その間にも、ランプのあかりは、いつ来てもよいようにつけたままです。そうするうちに、だんだん油が少なくなってきました。

かなり夜もふけた頃、遠くから歩いてくる花婿さんの一行を見つけた人が叫びました。10人の乙女にも「花婿さんですよ。迎えに出て下さい」という声が聞こえました。寝ていたおとめたちは、みんなとび起きました。すると、あかりが消えかかっているではありませんか。10人の内の5人は思慮深く、別の器に予備の油を用意していました。だから、それをランプに入れました。でも他の5人は油を用意していません。「分けてください」と頼みましたが、「それでは私のも足りなくなってしまうます。お店で買ってきたほうがよいでしょう」と言われ、あわてて買いに行ったのです。

5人が買物にいつている間に花婿さんの一行が到着してしまいました。そしてみんなが家には入り、入口の扉は閉められました。買物から帰ってきた5人のおとめたちは、「開けてください」と頼みましたが、「あなたたちのことは知りません」と断られてしまいました。

(承) 学ぶべき真理

この譬え話では、花婿はイエス様、花嫁は教会、

花嫁の友人のおとめが私たちです。思慮深いおとめは遅くなることがあることを知った上で、油を用意していました。必要なのは灯と油です。灯は、イエス様が來られるのを待っている人が現すよい行い、油は、よい行いをさせる信仰です。よい行いだけを備えている人は、遅くなると、あきて、疲れて、よい行いをやめてしまつ可能性がります。

しかし、たとい一生懸命でなくなることはあっても、再び火を燃やし続けることができるのは、信仰という油が用意されているからです。

(転) 生活への適用

さて、皆さんは、自分がこの10人のおとめの中の、賢い5人か、愚かな5人か、どちらになると思いますか。皆さんは、どんなことで灯を照らしていますか。「毎週の礼拝、献金、毎日お祈りして」「それもいいね。」「弟のめんどろを見てる。お使いに行く。」「うんそれもいいね。」「毎日学校へ行く。勉強を頑張る。」「それもいいね。」「じゃあ、それに疲れたこと、サボっちゃったことはないかな。」

結論

イエス様が來るのがいつかわからないからといって、いい加減にはしていけません。いつ來れるかわからないから、いつ來てこられてもよいように備えておかないといけないのです。この信仰が油です。よい行いに倦み疲れさせない油とは、いつ來られてもよいように備えておこうとする信仰なのです。その信仰があるなら、よい行いに、倦み疲れることはなくなります。

ワーク A

●暗唱聖句(10月6日～13日)

●良い忠実な僕よ、よくやった。(マタイ25・21)

●導入のヒント

留守番をしているとき、急にお母さんが帰ってきて、びっくりしたことはありませんか。イエス様は私たちを迎えに來ると約束してくださいます。でも、イエス様が來てくださったとき、私たちがつまみぐいしたり、けんかをしたりしていたらどうでしょうか。そんな姿を見て、イエスさまが悲しまれたら大変です。罪を赦して頂いて、イエス様に喜ばれるように準備をしましょう。

●ワークについて

油を用意していた女の人のランプに色を塗って、あかりをとしましょう。

ワーク B

●質問1 準備して待つことの大切さを強調して話して下さい。お話を思い出して答えましょう。

●質問2 どうして準備する必要があるのかに気づくための質問です。子どもたちはイエス様が來られた時、天国に行けるでしょうか。

●質問3 イエス様がいつ來られてもいいように備えましょう。

●讃美歌 「ひかりひかり」

(こどもさんびか52番)

●今日のお祈り 「神様、イエス様は必ず來られると信じます。いつもひかりの子として歩み、その時に備えることができるように助けて下さい。」

ワーク C

●第1問 聖句は、中心聖句を全部書いてください。聖句そのものに注目させるためです。

●第2問 目を覚まして備えていた思慮深いおとめと、備えていなかった思慮の浅いおとめの、持っていた物の違いに目を留めさせます。「あかり」と「あぶら」の意味をメッセージ例にしながら説明し、次の質問につなげます。

●第3問は、いろいろなところに印がつくでしょう。ワークのイラスト以外にも、「よい行い」があれば、取り上げてください。

●第4問では、ありのままの自分の姿をふりかえります。そして、新たなあぶらを持って歩みだせるように祈りましょう。

ワーク D

●分級では礼拝でお話を聞いた子どもたちの心、気持ちを聞いて、受けとめてあげてください。そして心を合わせて祈ることが大切です。

●「聖書に学ぶ」の部分の質問を通して、お話を反復し、整理できます。

●「あなたはこう思いますか」の質問で、子どもたちの気持や考えを聞いてあげてください。たとえ、不適当と思われる答えでも、「あなたはそう感じるのですね」とまず受けとめてください。質問は、子どもたちの決心や願いを言葉にあらわすために作られています。

中高校へのヒント

●考えてみよう

- 1 花婿が來るとは何を意味していますか。10人のおとめたちとは誰のことですか。
- 2 思慮深いおとめと思慮の浅いおとめの共通点は何ですか。また、相違点は何ですか。
- 3 思慮深いおとめたちも居眠りをしていたのに、どうして「思慮深い」と言われたのでしょうか。
- 4 キリスト再臨の日時についてどう言われていますか。

●自分にあてはめてみよう

- 1 あなたは、再臨のキリストをいつでも迎えに出る準備ができていますか。
- 2 もし準備ができていないとすれば、どこに問題があるのでしょうか。その問題にどう対処したらよいでしょうか。
- 3 あなたは天国に入れると思いますか。そう思うのはなぜですか。どのような人が天国に入れると思いますか(マタイ7・21も参照)。

●話し合ってみよう

- 1 思慮深いおとめたちは、どうして油を分けることを拒んだのでしょうか。
- 2 油は何を意味していますか。それは分けることができるものでしょうか。
- 3 キリストの再臨が遅れているように見えるのはどうしてですか(Ⅱペテロ3・9)。
- 4 突然訪れるキリスト再臨の日に備えて、私たちはどうしたらよいでしょうか。

聖書 マタイ25・14～30
テーマ タラントを用いる

序論

「10人のおとめ」の譬え話は思慮深く備えることを教えていたが、今週の場合は忠実に備えることに重点が置かれている。二つをあわせると「忠実な思慮深い僕」(マタイ24・45)となる。目を覚まして用意すべきものの第二は、賜物に忠実な働きである。しかし働きといっても、この世の価値観で評価されるものとは根本的に違っている。

一、預けられた才能による働き

△タラントとは、貴金属を計る時の単位で、1タラントは6千デナリであり、当時の労働者の6千日(約17年)分の報酬だ。現在の日当が1万円とするなら、6千万円にもなる。主人がこのような高額なものを僕たちに預けて旅に出たところから、この譬え話は始まる。ここでは、主人が神様、僕が私たち信じる者、タラントが才能の譬えである。聖書は、どのような才能も神から預かったものだと言明する。このタラントは、地上に生きている間は使用できるが、決してその人の所有物ではない。預けた方のために用いるべきものだ。あなたに預けられているタラントは、何だろうか。勉強ができること、運動ができること、音楽や絵画などの芸術的才能など、いろいろな才能がある。しかしそれらを、自分のためにしか用いていないのではないか。それは持ち主のために用いるべき預かりもののなのである。

研究資料

(足立)

主イエスは終末(キリスト再臨)に備えるキリスト者の態度について、25章で3つの説教を用いて詳しく語っている。24・45に「忠実な思慮深い僕」とあるが、前回の25・1～13では思慮深さについて焦点が当てられている。そして25・14～30は「タラントのたとえ」と呼ばれる箇所であるが、ここは思慮深い僕の忠実さについて教えている。この箇所も、よい忠実な僕と悪い怠惰な僕の登場によって、「忠実さ」が浮き彫りにされている。この「忠実な(ヒストス)」ということばは、マタイ福音書には5回だけ出てくる(24・45、25・21「2回」、25・23「2回」)。このことから、このたとえが終末における信仰者の忠実さを教えていることがわかる。

テキスト

14 天国(神の国)とは、神の支配を意味するが、ここでは終末における神の支配を生き生きと描写している。それはある人(主)とその僕ども(信者たち)との関係であり、財産に象徴される賜物の管理を意味する。

15 主人は僕たちにかんがりの額をそれぞれの能力に応じて託した。1タラントは6千デナリで、当時の労働者の6千日分の給料であった。つまり約20年分の給料に匹敵する。5タラントはかなりの額であり、2タラントも少なからぬものであり、1タラントも決して軽視される額ではない。これ

二、タラントの差は不平等ではない

△それぞれの能力に応じて△と記されているように、主人はあえて、5タラント、2タラント、1タラントと、預ける金額を変えていた。私たちの才能は、確かに人によって大きな違いがある。しかしタラントの違いは、この世の評価である。今の時代は、頭の高さが5タラントで、見てくれがいいのが2タラント、性格がいいのが1タラントかもしれない。しかし、そんな評価は時代によって移り変わる。戦国時代なら戦争が上手なことが、原始時代なら猟が上手なことが5タラントだったろう。その時代に何タラントと評価されるかは、重要ではない。5タラントの人と2タラントの人は、△わすかなものに忠実であったから△(21、23節)と褒められている。5タラントも2タラントも、神からすれば同じ位わすかなものだ。だから、あなたは「自分には才能がない」と思っているのではない。その時代に評価されないだけであり、神様の前ではみんな等しく、わすかなものなのだ。悲しむ友人を励ますのも才能、きれいに掃除ができるのも才能である。それらを生かし、神と人のために用いることを主は喜ばれる。

三、神の評価は忠実かどうか

5タラントと2タラントとを預かった僕は、どちらも忠実に主人の金を用いて商売をした。そして主人が帰ってきたとき、全く同じように△良い忠実な僕よ、よくやった△とほめられたのである。1タラントの人も同じように働いて、もう1タラントもつけたなら、同じようにほめられたはずだ。

でも彼は6千万円もの大金を△地の中に隠して△おいた。自分のものにならない主人の金を、危険を犯してまで増やそうとはしなかった。だから主人から叱られたのである。

5タラントと2タラントをもうけた僕らに対して、主人は、△良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわすかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう△と、全く同じ言葉で評価した。先々週も学んだように、神の国の報いは、地上の働きの大小とは無関係で、全ての人に平等である。どんな時代であっても、神は忠実に働く人を評価してくださる。自分の賜物を卑下して用いないようではない。人と比べるのではなく、任されたものに忠実であろう。

結論

主イエスの再臨を待つ間、目を覚まして用意しなければならぬものは、第一に信仰による良い行いであり、第二に任されたタラントをしっかりと用いた奉仕だ。任された才能を自分のものと勘違いしてはならない。任せられた方のために用いよう。任されたものに不平を言うてはならない。人の評価、時代の評価によって少なく見えることがあっても、神様の前では、みんな同じわすかなものだ。自分のタラントがどんなものであっても、隠して用いないようではない。忠実にそれを用いよう。そうするなら、神は、△良い忠実な僕よ、よくやった。主人と一緒に喜んでくれ△と、ほめてくださるのである。

らはすべて活用するために託されたのであるが、具体的な指示は出されておらず、各人の裁量に任されている。

16△17 5タラント託された者はそれを活用して10タラントにし、2タラントの者は4タラントにした。結果的に2人とも本来の資本を倍にした活動となった。並々ならぬ苦勞があったと思われる。

18 1タラント託された者は他の2人と全く別の生き方をした。彼は地を掘り、その金を隠しておいた。彼は自覚していないようであるが、隠しておいたものは主人の金であった。地に隠すと、失う可能性もないが、生み出す可能性もない。

19 主人が帰ってくるまでにはかなりの時間があった。2人の者が資本を倍にするためには長い時間が必要であった。だいたい時がたつてからとあるから、主の再臨まで時間がかかりあることがわかる。主人は委託した者たちと清算を始める。

20 5タラント託された者は、もう5タラントを生み出したことを喜んで報告している。

21 主人はこの僕をほめている。よくやったとは賞賛のしるしである。良い忠実なとは、彼の人物と勤勉さを評価する表現である。また僕は、わすかなものに忠実であったからと言われている。5タラントとは、人間的に言えばかなりの額である。しかし主人のことばから、主はいかに富んだお方であるかがわかる。多くのものを管理させようとは、忠実な僕には更に豊かなものを管理する立場が報酬として与えられることを意味している。主人と一緒に喜んでくれとは、主が与えて下さる喜

びを共有することであり、御国の至福の喜びに關するユニークな表現である。この僕は主人の暖かい賞賛を受けた。彼の未来は突出した喜びと結びついている。

22△23 2タラントを託された僕の場合にも、まったく同じことばが繰り返される。主は賜物の大きさや力量で信仰者を評価されない。問題は、忠実に託されたものを活用したかという点にある。

24 この人は1タラントの重みを自覚していないかった。彼は主人を過酷な方だと勝手に思い込んでいた。また1タラントを託されたことに感謝することもなく、無駄に長い時を過ごしてきた。不信仰ゆえに視点がゆがみ、託されたものを活用しなかった事実だけが残る。

25 あなたのタラント、あなたのお金と、この人は明言している。彼は主人から委託されたものが何を意味するか、全く受けとめていない。

26△27 主人は僕を彼自身のことばに基づいて責めている。もし主人が酷な存在なら、それなりの対処の仕方があったはずである。主人はこの人に悪い怠惰な僕よといって、タラントを活用しなかった責任を問っている。おそらく主人は、1タラントの者にも、5タラントや2タラントの者にかけた祝福のことばを用意して来たであろうに。

28△30 清算の結果、忠実な者はさらに与えられるが、不忠実な者は託されたものを失い、神の前から遠ざけられて後悔する。このたとえは、再臨までの時に意味があり、委託された賜物を活かすことが大切であると教えている。

聖書 マタイ25・14～30

タイトル 才能を生かそう

中心聖句 良い忠実な僕よ、よくやった。あ

なたはわずかなものに忠実であつたから、多くのものを管理させよう。

マタイ25・21、23

目標 自分の才能を人と比べて卑下せず、神様のために忠実に用いることが、神様に喜ばれることを発見する。

導入

今日のお話も、イエス様が再び来られるのを待つ間に、忠実に、目を覚まして用意しておくことを教えています。実は、皆さんには神様からすごい宝物が預けられていて、それをどのように用いるかを、神様は見えておられるのです。

(起) ストーリーを語る

イエス様は、再び来られる日待つ人のために、もう一つの譬え話をされました。それは、ものすごい大金が、3人の僕に預けられた譬え話です。ある大金持ちがいました。この人が旅に出なくてはならなくなったので、家で働いている3人の僕に、自分の財産を預けたのです。そこで、3人の能力に応じて、違った金額を預けました。一人の人には5タラント、今のお金では3億円程を預けました。次の人には1億2千万円、もう一人には6千万円を預けたのです。

3億円預かった人は、すぐに行って、「預けられたお金だから、ちゃんと用いなければ主人に申し訳ない」と考えて、そのお金を用いて商売をして、もう3億円の利益を得ることができました。1億2千万円預かった人も、そのお金を用いて、もう1億2千万円儲けました。

ところが6千万円預かった人は、「なんだ。俺はちよっとしか預けられなかった。うちの主人は厳しいケチな人だから、へたに商売をして、損をしたら大変だ。預かったまま、土の中に埋めておこう。そうすれば減ることはない」と考えて、土の中に隠しました。

かなり時間がたった後に、主人が帰ってきました。最初の2人は、すぐに自分がしたことを主人に報告しました。主人は非常に喜んで、その2人には全く同じように、「良い忠実な僕よ、よくやった。あなたは、わずかなものに忠実だったから多くのものを任せよう」、「主人の喜びとともに喜んでくれ」とほめました。

ところが最後の人は、主人の前に出て、「あなたは、替かないところから刈り取るひどい方だとかかっていました。ですから預かったものは土のなかに隠しておきました」と言ったのです。主人は大変怒りました。そして、「悪いなまけ者だ。わたしがケチで強欲だというのか。それなら、わたしのお金を銀行にでも預けておくべきだった。そして、利子がついたのに」と言いました。そして、「そのタラントを取り上げて、5タラント預けた人に渡しなさい。そして役に立たなかった僕を外の暗闇に追い出さない」と命じたのです。

(承) 学ぶべき真理

この譬え話の主人は神様、僕は私たち、タラントは預けられた才能を意味しています。さて、預かったものは、誰ののですか。預けた人のものですよね。私たちの才能も神様から預かったもので、決して自分のものではないのです。ですから、私たちも預かった才能を用いないで隠しているようではいけません。終わりの時代、イエス様の再臨を待つ間に必要なこと、それは預かった才能を預けた神様のために忠実に用いることです。神様にとっては、人が何タラント持っているかは重要ではありません。それは人間の評価です。神様からすれば、どんな才能も「わずかなもの」です。神様が見ておられるのは、忠実かどうかです。5タラントの人が5タラントもつけるのと、2タラントの人が2タラントもつけるのは、全く完全に同じ評価だったのです。

(転) 生活への適用

あなたは自分の才能が何だと思いますか。勉強ができること、運動ができること、絵が上手なこと、料理が上手なこと、いろんな才能があります。勉強ができる子と比べて、自分には才能がないって思っていないけませんよ。

結論

神様から預かっている才能だから、それを神様のために用いましょう。イエス様がいつ再びこられるかわからないのですから、目を覚まし、いつ来られてもよいように、預かっている才能を忠実に神様のために用いましょう。

ワーク A

●導入のヒント

神様は私たちを愛して、いろいろな良い物を与えてくださいました。元気なからだ、やさしい両親、住む家、それにお友だちも。でも病気の友達だちは、神様がいじわるしたのでしょうか。そうではありません。きつと他に良いことがあるはずです。それを、神様のために用いるなら、神様はたいへん喜んでくださいます。

●ワークについて

タラントの袋を切り抜き、左のかごには主人から預かった分を、右のかごには増やした分を貼りつけましょう。

ワーク B

●質問1 主人にほめられた僕と放り出された僕の違いに気づきましょう。

●質問2・3 お話の中の僕とは子どもたち一人一人のことです。3番で子どもたちに与えられているタラントに気づかせ、「あなたはA・B・C・どの僕かな」と考えさせてみてください。神様に与えられたタラントを神様のために使うことをしっかりと伝えましょう。

●讃美歌 「すべてはイエスさまのもの」

(ふくいんこどもさんびか68番)

●今日のお祈り 「神様、私にもタラントを与えてくださってありがとうございます。神様のために使えるように教えてください。」

ワーク C

●第2問 忠実な僕とは、たくさん儲ける僕ではなく、タラントを与えてくださった主人のため感謝しつつ心を尽くして働き、その実りをもって主人の栄光を現す僕です。タラントそのものの多さや、種類が大切なのではない事に気づくように導いてください。

●第3問では、自分に与えられているタラントがなんであるかを、考えてみましょう。分級教師や、分級のお友だちから見るとタラントと思うものも書いてみてください。一人一人に、神様は必ずタラントを与えておられることを示してください。大切なのは、そのタラントを用いて生活することが、神様の栄光を現すことだと気づくことです。

●第4問で具体的なことを決心して、お祈りしましょう。

ワーク D

●タラントの数の違いに不平等を感じる子どももいるかも知れません。分級では本心が語り合えるという豊かな環境に思いますが、生徒の気持ち、感じていることをしっかりと聞いてあげるようにつとめましょう。

●「あなたはどう思いますか」の質問1は、人を意識して言えない場合や、あまり自覚がない場合もあるかも知れません。

先生が気づいていることがあれば、「～さんはこんなところがステキだね」とさりげなく言ってあげることも、時には勇気づけになるでしょう。

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 主人、僕、タラントは、それぞれ何を意味していますか。また、主人の帰宅と清算は何を意味していますか。

2 タラントは誰のもので、誰のために用いるのですか。

3 悪い怠惰な僕がタラントを生かして用いることができなかったのはなぜですか。

4 主人の評価の基準はどこにありましたか。

●自分にあてはめてみよう

1 あなたに預けられているタラントは何でしょう。それらをどのように用いていますか。

2 自分のタラントを挙げてみて、5タラント預けられた人、2タラントの人、1タラントの人のうち、あなたはどの人だと思いますか。

3 あなたは、自分のタラントを人と比べて誇ったり、不平を言ったりしてはいませんか。そのように考えるのは正しいことでしょうか。

4 あなたがタラントを生かして用いることができるのは、どこに原因があると思いますか。

●話し合ってみよう

1 預けられているタラントに差があることをどう思いますか。どうして差があるのでしょうか。

2 タラントを最大限に生かして用いるためにはどうしたらよいでしょうか。

3 キリスト再臨の日までの間、私たちはどのように生きるべきでしょうか。

聖書 Iコリント13・4

テーマ 愛は寛容である

序論

今週から6週にわたり、有名な愛の章から学ぶ。子どもたちが、愛という「目に見えないもの」に目を置くようになり、自分の愛の無さを知り、愛を求めるようになって、神に出会ってくれたら幸いである。特に、終わりの時代には、△不法がはびこるので、多くの人の愛が冷えるであろう(マタイ24・12)と主は仰せられた。そんな時代だからこそ、子どもらに、愛とは何かを明確に知らせなければならぬ。本当の愛は、まず神が私たちを示してくださった。そして聖書は、△神がこのようにわたしたちを愛して下さったのであるから、わたしたちも互に愛し合うべきである(Ⅰヨハネ4・11)と教えている。

一、「寛容」の意味

寛容は、マクロスメオーという原語で、「遠い」という語と「怒り」という語の合成語であり、長く忍耐し、怒りを遅くすることを意味する(セイヤー『ギリシャ語辞典』)。

似た言葉に、柔和がある。これは、いらだたない、偉そうにしないという意味である。柔和という言葉と同時に寛容がもちいられている箇所(Ⅱコリ10・1、エペソ4・2、コロサイ3・12)では、寛容は長い忍耐、または猶予という意味に用いられている。そして、忍耐という言葉と同時に使われている箇所(ローマ2・4、9・22、コロ

サイ1・11)では、怒りを遅くして受容することを意味している。

二、神の長い忍耐

神は、長く忍耐される方だ。Ⅰペテロ3・20には、△むかしノアの箱舟が造られていた間、神が寛容をもって待っておられたとある。その思い計ること全て悪かった人類をも、神は寛容をもって忍耐された。ノアが箱舟を造っている期間、それは神が人類への警告をして、悔い改めるのを待っておられた期間なのだ。新改訳では、この箇所は△忍耐して△と訳されている。

ローマ2・4には、△神の慈愛があなたを悔改めに導くことも知らないで、その慈愛と忍耐と寛容との富を軽んじるのか△と記されている。人を悔い改めに導くのは、知恵や知識ではない。力や奇跡でもない。それは、神の慈愛と忍耐と寛容なのだ。神が怒しみ、忍耐しておられる。それが、人を悔い改めに導くのである。

△神がこのようにわたしたちを愛して下さったのであるから、わたしたちも互に愛し合うべきである△。愛は寛容である。それは、長く忍耐することである。人が自分の罪に気づき、悔い改めるのを、神が長く待って下さっているように、私たちもまた、人の罪に対しても長く忍耐して、悔い改めに導くべきなのだ。

三、神の怒りを遅らせる受容

自分で気づき、自分でやってみて、そして自立するには、失敗が許される安全な環境が必要であ

る。安全な環境で人格は育つ。安全な環境とは、自分があるのままで受け入れられている世界のことだ。△したら、△してあげよう△という世界は安全ではない。自分がそのようにできないと受け入れられないからだ。そこには、取引、取り繕い、裁き、ねだみがある。寛容とは、他の人をありのまま受け入れることである。赤ちゃんに、「勉強したら、ミルクをあげよう」などという親はないだろう。しかし、「△点以上でなかったら、お小遣いなしよ」とはよく聞く。これが寛容でない環境だ。神は、私たちを無条件で受け入れて下さった。罪を犯さなくなったら、受け入れよう」と言われたのではない。主イエスは△わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである△(マルコ2・17)とおっしゃっている。主はありのまま受け入れて、罪を取り除かれるのだ。お医者さんが、「病気がなおってから病院に来なさい」と言ったらおかしいだろう。医者は、病気のまま病人を受け入れて、病気を取り除く。主イエスも、罪人を罪あるまま受け入れて、罪を取り除かれるのだ。これが、寛容である。

結論

神の愛は目に見えない。けれども、その愛に感動するなら、必ず目に見える行動になっていく。あなたの周囲にも、嫌なことをする人々がいるかもしれない。しかし、それらの人々に対して寛容の限りを尽くそう。神に背く人々に、神が「怒りを遅く」されたように。愛は寛容である。それは長く忍耐し、怒らずに受け入れることなのだ。

研究資料

(長田)

テキスト

13・4 Iコリント13章は、「愛の章」として知られている。1〜3節で、愛の重要性、不可欠性を訴え、4〜7節で、愛の性質を説明し、8〜13節で、愛の永遠性を教えている。

愛の性質を説明する4〜7節の中で、最初の二つは、肯定的な表現、続いて、8つの否定的な表現、最後に、5つの肯定的な表現が続く。特に、最初の二つの性質は、愛の性質の中でも、根幹的なものであって、「寛容」は、愛の広さ、長さを、「情け深さ」は、愛の高さ、深さを表現したものである。

愛と訳されうるいくつかのギリシャ語の中でも、ここで用いられている「アガペー」は、新約聖書において特別な使用法がされている。すなわち、神的爱、意志的、自己犠牲的、他者中心的な愛を表現するものである。このような愛は、まず神の中に見出されるものであり(Ⅰヨハネ4・8、16)、次に、神が私たちに求めておられるものである(マタイ22・39、ヨハネ15・12)。罪深い私たちの内には、本来、この愛は見出され得ない。しかし、神がまず私たちにそのような愛を示して下さい(Ⅰヨハネ4・10、19)ゆえに、肉の性質が十字架につけられ、内に聖霊が働いて下さることによって、私たちの内にも愛の実が結ばれてくるのである(ガラテヤ5・22、24)。

寛容であり、「寛容であり」と訳されているギリシャ語「マクロスメオー」は、他に、「忍耐強い」(新共同訳)、「辛抱強い」(岩隈新訳ギリシャ語辞典)とも訳されている。長く忍耐し、広く受け入れることである。

神の寛容

神の愛は、「悪い者の上にも良い者の上にも、太陽をのぼらせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らして下さる」(マタイ5・45)ほどの「広い愛」であり、罪に満ちた世をすぐに滅ぼしてしまわれないで、すべての者の悔い改めを待ち望むほどの「長い愛」である(Ⅱペテロ3・9)。神の内には寛容が満ちている。

キリストの寛容

キリストのもとには、富んだ者、貧しい者、健康な者、病人、高齢者、幼な子、人格的に優れた者、罪深い生活を送っている者など、あらゆる種類の人々がやってきた。キリストは、そのすべての者を、愛をもって迎え入れられた。人々からの信頼や愛を受けられなかったサマリヤの女性(ヨハネ4・1〜26)やザアカイ(ルカ19・1〜10)のような人間も、キリストのもとに來た時、真実な愛の言葉に触れて、生涯が変えられた。

キリストの愛は、広ばかりでなく、長く忍耐する愛でもある。キリストの弟子たちは、3年半もの間、寝食を共にし、キリストの教えを聞いていたにもかかわらず、高慢(マタイ26・33、35)

や野心(マタイ20・20〜24)、怒りやすい性質(ルカ9・54)等が見いだされた。十字架に進もうとするキリストの使命を悟ろうとせず(マタイ16・21〜23、ルカ18・31〜34)、キリストがユダヤ人指導者たちの手によって捕えられ、不当な裁判にかけられた時には、弟子たちはキリストを置いて逃げ去り、ある者は裏切りの言葉さえ語った。そのすべてを△承知の上で(マタイ26・31、34)、キリストは彼らを愛し、赦し、なお弟子として生きるよう励まされた(ヨハネ21・15、19)。

キリストの内には、寛容が満ち満ちている。

寛容の教え

キリストは、私たちの愛が、すべての人を包含するほど広く(マタイ5・43〜48)、無限に赦し続けるほど長く(マタイ18・21)なるように教えておられる。

人間本来の愛は、自分の好む者だけを愛する狭い愛であり、どこかで辛抱できなくなるような変わりやすい愛であるが、神△自身の無限の愛と赦しを頂くことにより、神に似た者となっていく。私たちが無限に赦すべきであるのは、神が私たちに無限に赦して下さい下さったからである(マタイ18・33、エペソ4・32)。

この愛の召しに応えることは、生来の人間には不可能である。肉の働きを十字架につけ、御霊のご支配の内に生きることによってのみ、寛容の実が結ばれるのである(ガラテヤ5・22〜24)。

聖書 コリント13・4
タイトル 限界で、もう一回がまんする
中心聖句 愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない。
目 標 愛は寛容であることを知り、自分が寛容でないことを発見し、主イエスを求める者となる。
コリント13・4

導入

皆さんは、目に見えないものが存在することを知っていますか。例えば、空気は目に見えますか。見えませんか。でも存在しませんか。いえ、存在しますね。空気がなかったら、呼吸ができずに、死んでしまいます。

では愛は目に見えますか。見えません。じゃあ、存在しませんか。必ず存在します。例えば、赤ちゃんなら、お母さんに愛がなかったら、どうなるでしょうか。たぶん、すぐに死んでしまうでしょうね。何にもできない赤ちゃんが育っていくのは、お母さんの愛があるからです。

(起) ストーリーを語る

では、その愛はどういうものでしょうか。聖書には、愛は寛容だと教えられています。寛容というのは、長く忍耐すること、すぐに怒らずに受け入れて正していくことです。では、聖書から神様が寛容である姿を見てゆきましょう。

ノアの時代のことです。人類はその思い計ること全て悪かったと書かれるくらい墮落しきっていました。神様はその姿を見て、大洪水によって、全ての生き物を滅ぼすとおっしゃいました。しかし、今一度ノアに箱舟を造らせて、人類に警告をされました。神様は、ノアが箱舟を造っている期間、人類が悔い改めるのを待たれたのです。これが寛容です。神様は、がまんがまんを重ねて、限界までがまんして、裁きを決定されましたが、それでも、もう一度がまんして、悔い改めるのを待たれました。この長い忍耐が、寛容です。それは、がまんできない限界までがまんして、そこで、もう一度がまんすることです。

今度は、イエス様におきたことをみてみましょう。イエス様が取税人マタイを弟子にされたとき、マタイは、お別れパーティーを開きました。そこには、取税人仲間や遊女、異邦人、罪人が集まってきました。それを見た律法主義者たちは、イエス様に、「何故こんな連中と食事をともにするのか」と責めました。するとイエス様は、「丈夫な人には医者はいりません。いるのは病人です。私は罪人を招いて悔い改めさせるために来たのです」とおっしゃいました。

お医者さんが、「病気が治ってから来なさい」と言ったら変ですね。病気のまま病人を受け入れて、病気を取り除くのがお医者さんの仕事です。それと同じで、「罪を取り除いてから、イエス様のもとに来なさい」と言うのはおかしいのです。罪あるままで罪人を受け入れて、罪を取り除くのがイエス様の仕事です。そしてこれが寛容です。すぐに怒らずに、ありのまま受け入れて、そこから正しい

ていくのが寛容なのです。

(承) 学ぶべき真理

愛の第一番目の特徴、それは寛容です。神様がどれだけ寛容であるか、皆さんもわかったでしょう。ノアの時代、すぐに裁いてしまわないで、今一度忍耐されました。寛容とは、すぐに裁いてしまわないで、長く忍耐することです。またイエス様の寛容も知りました。罪人を罪あるままで受け入れて、悔い改めに導かれるのです。愛は寛容です。寛容とは、ありのまま受け入れて、そこから正しいことです。

(転) 生活への適用

私たちの周りには、平気で人をいじめたり、裏切ったり、優しい言葉で話しても冷たい言葉で返したりする人がいます。そんな人とは、つきあわなければいいのでしょうか。仕返しすればいいのでしょうか。違いますね。長く忍耐し、ありのままを受け入れてから、正していくべきです。

結論

「わたしはあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」と、イエス様はおっしゃっています。あなたは、寛容ですか。人に長く忍耐し、人をありのまま受け入れていますか。自分が寛容でないことに気づいたら、イエス様を信じて、寛容な人になりましょう。イエス様を信じることによって、聖霊様が心に住み、神の愛が注がれるのです。すると、あなたも寛容な人になってゆけることができます。

ワーク A

● 路加福音 10月20日～11月24日
愛は寛容であり、愛は情(け)深い。

(コリント13・4)

● 導入のヒント

悪口を言ったり、意地悪したりするお友だちは嫌われますね。でもイエス様は、どんな人でも受け入れて、愛されました。悪い心の私たちでも愛して、十字架で命を捨ててくださいました。私たちもそんなイエス様のようにになりたいですね。

● ワークについて

トイレットペーパーの芯に、色を塗った「あい、がまん」の紙をはり、飾りましょう。

ワーク B

● 質問1 子どもたちには「ありのまま受け入れる」という表現が難しいので、「友だちと思う」という表現に変えています。

● 質問2 イエス様の行動から寛容について学びます。ザアカイの話を知らない子どもには、簡単に話してあげてください。

● 質問3 子どもたち自身が痛い目にあったときこそ、寛容な心が必要です。寛容な心にならないときは、祈って寛容な心をいただきましょう。

● 讃美歌 「神のお子の子イエスさま」

(ふくいんこどもさんびか74番)

● 今日のお祈り 「神様、イエスさまのように寛容な心を私にも与えてください。」

ワーク C

● 第2問は、今日の聖言の「寛容」の意味について、子どもたちが生きている現実の世界の中で起こっている事柄に当てはめて考えます。ワークの例以外にも、寛容の具体例が出ましたら、聖言の意味合いに照らして、一緒に取り上げて話し合ってください。

● 第3問 自分ごととして「寛容」について考えます。寛容になれなかった時の自分の顔と、それを見ておられるイエス様の表情を絵で表現し、イエス様の愛の御心について思いを馳せます。

● 第4問 具体的に寛容にすべき事が示されたら記入して、共に祈りましょう。

ワーク D

● 今回から、ワークDでは、知識的な学びよりも、実際の生活に適用できるように心がけて、作成することになります。今までは形式が多少異なっていますが、分級を楽しくできる様に工夫をこらしました。ワークをしながら、教師が教えるだけでなく、教師も生徒とともに、「自分はどうなのか」と考えていくクラスになればと願っています。そうするならば、お互いに向上できるのではないのでしょうか。

● 今週は、「がまん度チェック」の表に、正直な気持ちを書き入れます。がまんできる限界が、一人一人違っているはずですが、がまんできる人は、なぜがまんできるか、話してみてください。

中高校へのヒント

● 考えてみよう

- 1 「寛容」とはどういう意味ですか。具体的にどうすることですか。
- 2 聖書は赦しについてどう教えていますか(マタイ18・21～35、コロサイ3・12～13他参照)。
- 3 主イエスや聖書人物が寛容を示した具体例をいくつか挙げてみましょう。

● 自分にあてはめてみよう

- 1 あなたは寛容な人ですか。
- 2 寛容な人に接するとき、あなたはどんな感じですか。逆の人の場合はどうですか。
- 3 寛容な態度を取れずに失敗したことがありませんか。その原因はどこにあったのでしょうか。
- 4 主の寛容と人々の寛容がなければ、今頃あなたはどんなになっていたのでしょうか。

● 話し合ってみよう

- 1 愛の特徴の最初に「寛容」が挙げられているのはなぜでしょうか。コリント教会の現状から考えてみましょう。
- 2 人間関係の上でトラブルが生じるのは、どのような場合が多いのでしょうか。
- 3 寛容な人になるには、どうしたらよいのでしょうか。
- 4 寛容に振舞って祝福された例、逆に寛容になれずに失敗した例、あるいは人から寛容に接してもらった体験があれば、分かち合いましょう。

聖書 1コリント13・4
テーマ 愛は情け深い

序論

愛とは寛容なこと、すなわち長く忍耐し、怒らずに受け入れることである。また、第2の特徴として、人情深いことである。「親切」と訳されること(新改訳)も、「慈愛」と訳されることもある。今日は、「情け深い」とはどのようなことか、また、どのような心で、そうなるのかを学ぶ。

一、「情け深い」の意味

ここで人情深いと訳されるギリシア語フリーステュオマイという動詞は、聖書中この箇所しかない。その名詞型は、先週学んだ「寛容」と並んで、ガラテヤ5・22に御霊の実の第5番目に挙げられ、「慈愛」と訳されている。『新約聖書ギリシア語小辞典』は、「親切にする、情け深い、思いやりがある(他人のことを自分のことのように感じる)」という訳語を記している。すなわち、この語は、他人のことを自分のことのように感じる慈愛、情け深さ、親切、思いやりのことを意味するのである。

二、神の情け深さ

主イエスは、人々と高き者は、恩を知らぬ者にも悪人にも、なさけ深いからである(ルカ6・35)とおっしゃっている。神は、罪を犯している者たちに寛容であるばかりか、そんな者たちを救

研究資料

(長田)

テキスト

13・4 文脈等については、前週の「研究資料」を参照。

情け深い 愛の性質を説明する4〜7節の中で、最初の二つ(寛容と情け深さ)は、肯定的な言葉で表現されており、愛の性質の中でも、根幹的なものであると言える。寛容は、愛の受動的な働きを表わし、敵対する者をも赦し受け入れ、忍耐深く愛し続けて行くことである。それに対して、情け深さは、愛の能動的な働きを表わし、積極的に相手に手を差し伸べて行くこととする。寛容が愛の広さ、長さを表わすのであれば、情け深さは、愛の高さ、深さを表現したものと見えよう(エペソ3・18)。

「情け深い」と訳されているギリシア語「フリーステュオマイ」は、「親切です」(新改訳)、「慈悲あり」(文語訳)とも訳され、他者の窮状に心を寄せ、そこに近づき、助けようとする性質を表わす言葉である。

神とキリストの情け深さ

「いと高き者は、恩を知らぬ者にも悪人にも、なさけ深いからである」(ルカ6・35)。

神は、「ご自身の恵みを知ろうとせず、罪深い生活の中に歩む人々を見て、単に忍耐深くあらわれるだけでなく、彼らの孤独や虚しさ、滅びに向か

うために、御子イエスを遣わしてくださいました。この情け深さが、神の愛の行為である。神は、迷い出た羊を見つけたすまで捜す情け深い方である。マタイ11・30の「わたしのくびきは負いやすく、の「負いやすく」が、この「情け深い」である。この語は、「元来、使用に耐える、役に立つこと」を意味している(『新約聖書ギリシア語小辞典』)。情け深いとは、相手の立場に立ち、自分のこととして感じることであり、さらに役にたつてあげることなのだ。そして主イエスも、その情け深さをそのまま持っておられるからこそ、人々には負いやすいとおっしゃる。主は、私たちの苦しみを見て、ほっておかれる方ではない。その苦しみを共に背負ってくださいるのである。

愛は情け深い。情け深いとは、相手の立場に立つて、自分のこととして感じ、役にたつてあげる

三、私たちが情け深くするために

神の情け深さにとどまるなら、私たちも情け深い者となることができる。主は、人々がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる(ヨハネ15・5)。「慈愛」は、御霊の実の一つである。

主イエスは、神であるにもかかわらず人間と同じ立場になられた。また主は、人何事でも人々か

うとする窮状に心を寄せ、尊い御子を世に遣わし、十字架につけて下さった(ヨハネ3・16)。

御子イエスもまた、神のもとを離れて傷つき倒れている人々をあわれまれ(マタイ9・36、18・12、14、ルカ19・10)、天の栄光の姿を捨てて人となり、十字架にかかって、私たちの罪を贖って下さった(ペリピ2・6〜8)。

どんな罪深い生活をしている者にも届く神の愛の深さ、人々を滅びから救うために最大の自己犠牲をも惜しまぬ神の愛の崇高さ、すなわち、神の情け深い御心は、御子の十字架の中に明確に表わされている。

情け深くあることの勧め

この点について、最も印象深く教えられるのは、「よきサマリヤ人」の譬え話である(ルカ10・25〜37)。愛は、知識ではなく、行動である(28節)。助けを必要としている人を見る時に、遠ざかってしまふのではなく(31、32節)、心を動かして(33節)、近寄り(34節)、喜んで必要な助けを与えていく(34、35節)サマリヤ人こそは、真に情け深い人のモデルと言える。

「互(い)に情(け)深く」(エペソ4・32)、「慈愛(クレステュオマイの名詞形)フリーストニス」を身につけなさい(『ロサイ3・12』)と繰り返し教えられているが、このことは、肉の働きによつてはなし得ないことであり、御霊が結ばせてくださる実である(ガラテヤ5・22の「慈愛」)。

らしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりになせよとおっしゃった(マタイ7・12)。「情け深さ」とは、相手と同じ立場に立つて自分のこととして感じ、役にたつてあげることである。

例を挙げてみよう。友だちが消しゴムを忘れて困っていたらかしてあげる、いじめられていたらかばってあげる、いや、時によっては身代わりとなって、自分が痛い目にあうこともあるだろう。「そんなことしたら損だ」という気持ちは自己中心であり、愛のない行為である。

しかし、何でもしてあげたら良いというわけではない。例えば、たくさんゲームソフトを持っていてのに「もっとゲームソフトがほしい」とむさぼっている友だちに、自分のものをあげるのはいくはない。聖書は人隣り人の徳を高めるために、その益を図って彼らを喜ばすべきである(『ロサイ3・12』)と命じている(ローマ15・2)。徳を高めることは、その人が自己中心から神中心になるようにすることだ。その人に、「ゲームよりもっと大切なことがある」と教えてあげるのが「情け深い」ことである。

結論

人々に情深く、あわれみ深い者となり、神がキリストにあってあなたがたをゆるして下さったように、あなたがたも互にゆるし合いなさい(エペソ4・32)。主イエスがしてくださいましたことをいつも思うなら、私たちも情け深い行動ができるようになる。私たちは、主がしてくださいましたように、相手と同じ立場に立つて、相手の痛みや弱さを自分のこととして感じ、役にたつてあげよう。

例話

ハワイにモロカイという島があります。この一隅にハンセン病の療養所がありました。ここには数百名の人たちがアメリカ本土より送られて生活していましたが、その状態は全く地獄のようであったと言われていました。長い間病気で苦しむ者があつても、誰も看護する者がなく、本当に悲惨な状態でした。

ここにベルギーの宣教師タミエンが来たのです。彼はまだ二十六歳でしたが、この島の人々を少しでも慰め助けたいと願っていました。そして、遂に自分もハンセン病になりましたが、四十九歳で死ぬ日まで、この人々の看護に当たり、千百人余りの世話をし、五百人の墓まで作ったのです。彼は島の人々の苦しみ悩みを見ることができなかつたのです。もちろん、彼は神の愛に励まされてきたのですが、そのように、神は、私たちを救うために、神のひとり子イエス・キリストを私たちの罪よりの救い主としてこの世界に送り、十字架に掛けてくれたのです。

(本田弘慈『あなたを愛する愛』より)



聖書 Iコリント13:4
タイトル 相手の身になって

中心聖句 愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない。

目標 愛は情け深いことを知り、自分が情け深くないことを発見し、主イエスを求める者となる。

導入

愛は目に見えませんが、必ず存在し、目に見えるものよりはるかに大切です。そして、その愛とはいったいどういうものなのか、それは、情け深いことだと聖書は教えています。ではいったい情け深いってどういうことなのでしょう。

(起) ストーリーを語る

情け深いってというのは、わかりやすく言うと、親切とか、思いやりがあるということです。それでも分かりにくいなら、他人のことを自分のことのように感じることです。

イエス様は、情け深いということ羊飼いの譬えで話されたことがあります。羊飼いが99匹の羊を残して、迷子になった1匹の羊を探しに行きました。羊飼いは1匹の羊をとっても大切に思っています。羊がどんなに心細いか、どんな辛いめにあっているか思いやって、谷底まで降りて、藪の中にわけ入って、見つけ出すまで探すのです。

それと同じように、神様は、自分勝手に歩き出して道に迷っている私たちのために、イエス様を送ってくださいました。イエス様は、情け深い方です。道に迷っている私たちを、神様のもとに連れて行くため、その弱さを知り執り成すため、私たちと同じ人間になられたのです。情け深いとは、相手の立場に立って思いやることです。

そして、イエス様はくびきをいっしょにする牛に譬えても話されました。「すべて重荷を負って苦しんでいる者は、わたしのものとかなさい。」「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」「とくびきとは、首にはめて牛を2頭だてにして、1頭ではできない働きをさせる道具です。この負いやすいという言葉は、情け深いという言葉と同じです。ここでの情け深さは、役にたつてあげることを意味します。イエス様は、私たちに、坂道はこう上ってこう下る、でこぼこ道、狭い道、険しい道はこれに注意する、分かれ道はこのように選ぶと、いっしょに歩んで教えてくださるのです。すると、私たちも負うべき重荷を負いきることができるようになります。そう、情け深いとは、相手の役にたつてあげることなのです。

さらにイエス様は、人間とならただでなく十字架にかかってくださいました。それは、私たちに最も役にたつため、私たちの罪を取り除くためでした。イエス様こそ情け深い方です。私たちをあわれみ、思いやり、私たちの役に立ってあげようと、自分から十字架の上で、私たちの罪を自分の身に負われました。それは私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。

(承) 学ぶべき真理

情け深いとは、人のことを自分のことのように感じて、役にたつてあげることです。それが、慈愛、親切、思いやりの本質です。イエス様は、情け深い方でした。神である方が人になられたのも、罪がないのに十字架につかれたのも、人のことを自分のことのように感じて、役にたつてあげられたためでした。

(転) 生活への適用

例えば、あなたが遊園地で楽しく遊んでいるとき、迷子になって泣いている小さい子に出会ったとします。あなたはどのように感じますか。どうしてあげますか。自分の遊びのほうが大切だから、ほっておきますか。それとも相手の立場に立って、心細いだろうなと思い、相手の役にたつてあげようと、一緒にお母さんを捜してあげますか。

結論

「互いに情け深く、あわれみ深い者となり、神がキリストにあってあなたがたをゆるしてくださったように、あなたがたも互いにゆるし合いなさい」と、聖書は教えています。あなたは、情け深いでしょうか。親切で、思いやりがあるでしょうか。そうでないことに気づいたら、イエス様を信じて、情け深い人になりましょう。イエス様を信じることによって、聖霊様があなたの心に住み、神の愛が注がれるのです。すると、あなたも情け深い人になってゆくことができます。

ワーク A

●導入のヒント

転んで泣いているお友だちを見たとき、どうしますか。クレヨンを忘れたお友だちにはどうしてあげますか。イエス様は決して知らん振りされませんでした。イエス様はいつも自分ではなく、相手のことを一番に思っておられました。私たちはどうでしょうか。イエス様のようにになりたいですね。イエス様を信じて求めていきましよう。必ず愛の人に造り変えてくださいます。

●ワークについて

子どもの手形をとり、彩色・記名してから切り抜きます。それらを大きな模造紙に円形にはりましよう。

ワーク B

●質問1 ただ優しいだけでなく、相手の気持ちを思いやるのが情け深いということです。

●質問2 イエス様も私たちが思いやって私たちのために一番良いことをしてくださいました。

●質問3 イエス様のように相手を思いやる気持ちが子どもたちの内にあるでしょうか。自分が病気になるるとき、何をしてほしいかという所から考えてみてはどうでしょうか。

●讃美歌 「ほくの心の中が」

(ブレイズワールド4番)

●今日のお祈り 「神様、私にも情け深い心、お友だちを思いやる心を与えてください。」

ワーク C

●愛の特徴についての学びが続いていますが、これは愛の律法を伝えるだけではありません。まずイエス様が私たちにこの愛を示してくださいましたことを知り、そのイエス様の愛を受け入れ、愛に満たされて、愛の実際の行いが現されてくる事を思いつつ分級を進めてください。行いのある・なしが、子どもたちの愛のある・なしを計るものとならないように、配慮が必要です。問題の中の、「相手の身になって考えましよう」では、できるだけ具体的に記入しましょう。最後の「ゲームソフト」の時には、どんなことを情け深い態度として子どもたちが考えるのか、興味深いところです。一般的な情け深いことについてではなく、聖言から考えるように導いてください。

ワーク D

●「情け深い」という事は、日本人にとっては、大切な倫理の1つでしたが、現代は忘れさられる傾向にあるようです。

しかしクリスチャンなら、頭や知識では良くわかっていて、そのことについて論文が書けるかもしれない。でも実際にその様に生きているかというところ、どうでしょうか(筆者自身、問われます)。今回の「こんな時キミならどうする?」の質問では、2つの場面を設定してみました。満員電車に乗ったとき、サッカーの試合で負けたとき、どうするでしょうか。じっくり考え、話し合ってみてください。

中高校へのヒント

●考えてみよう

- 1 「情け深い」とはどういう意味ですか。具体的にどうすることですか。
- 2 良いサマリヤ人の譬え話を聞き(ルカ10:25、37)、サマリヤ人が取った行動と、祭司やレビ人が取った行動とを比較してみましよう。
- 3 主がどんなに情け深いお方であるかがよくあらわされている具体的な例を、幾つか挙げてみましよう。
- 4 聖書人物が情け深い行動を示した具体例を幾つか挙げてみましよう。

●自分にあてはめてみよう

- 1 あなたは情け深い人ですか。
- 2 情け深い人に接するとき、あなたはどのように感じますか。逆の人の場合はどうですか。
- 3 情け深い態度を取れずに失敗したことがありますか。その原因はどこにあったでしょうか。
- 4 主の情け深さと人々の情け深さがなければ、今頃あなたはこうなっていたでしょうか。

●話し合ってみよう

- 1 情け深い人になるには、どうしたらよいでしょうか。
- 2 学校生活の中で、どのように情け深い愛を実践していったらよいでしょうか。
- 3 情け深く振舞って祝福された例、逆に情け深くなれずに失敗した例、あるいは人から情け深く接してもらった体験があれば、分かち合いましよう。

聖書 1コリント13・4

テーマ 愛はねたまず誇らない

序論

愛の特徴の3番目から5番目には、共通点がある。ねたむ、高ぶる、誇るは、すべて、自分を他人と比較しておきることである。これら3つの点について、掘り下げて学んでみよう。

一、ねたまない

「ねたむ」という言葉は「熱心」とも訳される。「執着、執心」と訳したらわかりやすいだろう。△更に大いなる賜物▽や△預言すること▽を求めるのはいいことだが、自分の賜物を他の人と比較してねたんで求めているのではない。それは、△肉の働き▽だと、ガラテヤ5・20に言及されている(この箇所では、△そねみ▽と訳されている)。

タラントの譬えを例にすると、1タラント預かった人が、5タラントの人や2タラントの人と自分を比べ、自分のタラントが少ないからと言って彼らをうらやむのがねたみだ。人と比較して自分が劣る場合には、どうしてもできる人をねたんでしまう。しかし主人は、5タラントの人も、2タラントの人も、全く同じ△わすかなものに忠実だ△だから△と言っている。神の目から見ると、勉強ができることも、運動ができることも全く同じわすかなものなのだ。そして、5タラントの人が5タラントもつけたのと、2タラントの人が2タラントもつけたのとの評価は、全くいっしょだった。これを絶対評価という。反対に、人と比べて

どれだけ優れているかを見るのを、相対評価という。神の国は絶対評価の世界なのだ。どんな才能を持っているかは評価の対象ではない。また他の人と比べて評価されるのではない。任されたものに忠実であったかどうかで評価されるのだ。

神の国は絶対評価だということを徹底して教えたい。そして、絶対評価ならねたむことはない。神が見ておられるのは、忠実かどうかなのだから。

二、高ぶらない

「高ぶり」とは自慢することである。ねたみと対照的に、他の人と比較して、自分がより多くの賜物をもっていることや、成果をあげていることに価値があると考えることが、高ぶりを生む。タラントの譬えなら、5タラント預かった人が、2タラントや1タラントの人を「あいつらは能力がない。成果も少ない」と見下すことが、高ぶりだ。本当は、その5タラントも、自分のものではない。それは、この地上に生きている間、神から預かったものにすぎない。もし5タラントの人が4タラントしかもうけず、2タラントの人が2タラントもつければ、2タラントの人が2タラントもつければ、5タラントの人が2タラントもつければ、5タラントの人は不忠実だからだ。このような価値観をもつなら、預かったものが少ない人々を見下して、高ぶることはなくなる。

三、誇らない

「誇り」とは、高ぶりの結果がふくらんで、慢心し、高慢になることである。この語は、新約聖書の中で6回使われているが、そのうち5回が1

コリントの中にある(4・6、18、19、5・2、8・1)。8・1には、△知識は人を誇らせ、愛は人の徳を高める▽とある。コリント教会で問題を起してきた人々は、自分たちは神をよく知っていると言っていた。しかし、どんな知識も神から授けられたものだ。それを認めず、知識を自分のものだと思えるなら、自分を神とする偶像礼拝と同じである。愛は、それと正反対だ。自分を誇るのではなく、かえって、△人の徳を建て△(新改訳)△造り上げる▽(新共同訳)のだ。この言葉は、建築用語で、壁や屋根などに違った部材が組み合わされて家ができた様子を表す。人々が持っている違った賜物を互いに生かし、全体を一つに造り上げるのが、愛である。人と比べ、人と競って自らを誇るの、愛ではない。

結論

神の国の価値観で生きるなら、自分と他人を比較して優劣を論じることはない。他人と比較しないなら、ねたむことも、高ぶることも、誇ることもない。あなたは、成績や、運動能力、容姿などで、ねたんだり、誇ったりしていないか。

神は、それぞれにふさわしい賜物を預けておられる。そして神の評価は絶対評価だ。どれだけ持っているか、どれだけ成果があったかではなく、忠実かどうか量られる。人と比較して、多かろうと少なかりょうと、ねたんでも、誇ってもならない。愛は、人と比較しないことである。あなたもこの神の国の価値観を持つと、ねたまず、高ぶらず、誇らない者になれる。

研究資料

(長田)

テキスト

13・4 文脈等については、前週「研究資料」を参照のこと。

ねたむことをしない。ねたむとは、自分よりすぐれているものを持つ人を見て、そのことを喜ばないことである。聖書中には、サウルのダビデに対するねたみ(サムエル上18・8)、祭司長、律法学者たちのキリストに対するねたみが、どんなに恐ろしい働きをしたかが記されている。ねたみは、肉の働きの一つに挙げられており(ガラテヤ5・20、21)、十字架に釘づけられるべきものである。1コリント13章は、12章から14章にかけての霊の賜物についての教えの中に挿入されている。当時、コリント教会では、各人に与えられている賜物について、比較することがあった。「もし足が、わたしは手ではないから、からだに属していないと言っても、それで、からだに属さないわけではない」(12・15)。ある賜物を持つ人を見て、その賜物を持たない人が、自己卑下をする必要はないことを教えている。主は、各人に異なった賜物を与えておられるからである。愛は、自分ない賜物を持つ人を見たとしても、心から喜ぶことができる(12・26)。

高ぶらない、誇らない。「高ぶる」と「誇る」とはどちらも、自分と他人とを比べて、自分を高く思い、またそのように見せていくことである。

口語訳聖書で「高ぶる」と訳されているギリシア語「ペルペルオマイ」は、「自慢する」(新改訳、新共同訳)、「誇る」(文語訳)とも訳され、「ほらを吹く」(古語訳『新訳ギリシア語辞典』)との意もある。自分自身のすぐれたことを、時には実際以上にでも誇示し、他の人々の注目を得ようとすることである。

口語訳聖書で「誇る」と訳されているギリシア語「フシオマイ」は、「高慢になる」(新改訳)、「高ぶる」(新共同訳)とも訳されている。1コリントにおいては、この箇所以外にも5回(4・6、18、19、5・2、8・1)用いられている。自分の真の姿に気づかないで、偉い者のように思い、自分の知識や立場、周囲からの評価を誇る人々の姿が指摘されている。

愛は、自らの欠点や無力、小ささを、そのまま認めることができ、どんな人の中にも自分よりすぐれた点、偉大な点を発見して喜びのことである(ピリピ2・3)。

例話その1「仲間づくり」

神戸に住む独身のA子さんはダイエットに挑戦しているが、いまだ成功したことがない。それでも、友人から「これがいい」などと紹介されると、すぐにそのダイエット法にお金をかけて、またまた失望する。

彼女がある日買ってきた金魚が、みるみるうちに太って大きくなった。家族のものが不審に思っ

起こっていた。「金魚ちゃん、ダイエットしようとしてもダメよ」といいながら、A子さんが毎日たづねると餌を与えていたのだ。

(藤井康男『キリスト教例話事典』Ver.4 CD-ROM版より)

例話その2「謙遜が悔い改めさせる」

ひとりのインテリ青年が牧師のところへきて、科学的、文学的にキリスト教に対して難解な質問をあげせかけ、牧師を困らせた。ついに牧師は答えにつまづいて、沈黙してしまった。すっかり得意になってしまった青年は、牧師に別れをつけて意気揚々と帰ろうとした。その時、牧師は静かにいった。「あなたにも謙遜があったなら」。

このひとことが青年の胸を打った。自分はさまざまな知識を持ち、立派な人間だと思っていたが、謙遜のなかったことに気がついた。そして心から悔い改め、その夜、救われたのであった。

この青年こそ、のちに伝道者となった河辺貞吉(カワベテイチ 一八六四―一九五三)であった。彼は日本自由メソジスト教会の創立者となり、説教家として活躍した。(前掲CD-ROMより)



聖書 Iコリント13・4

タイトル 愛は人と比べないこと
中心聖句 (愛は)ねたむことをしない。高ぶらない。誇らない。

目標 愛は、人と自分を比較しないことであることを発見する。

導入

皆さんの中には、足が速い人、絵がうまい人、サッカーが得意な人、将棋が強い人、料理が上手な人、勉強ができる人など、いろんな得意なことをもった人がいますね。人には、それぞれの得意なことがあります。それは神様が、それぞれの人に、それぞれの才能を与えておられるからです。でも、それをねたんだり、それで人を見下げてはいけません。

(起) ストーリーを語る

今日の言葉は、まず、「愛はねたまない」と教えます。ねたむというのは、いいなあ、うらやましいなあと思ひ、その人に優しくできなくなることです。

次に、愛は「高ぶらない」です。高ぶるとは、ねたむの反対で、自分ができていることを自慢して見せびらかし、人にうらやましがることです。

その次は、愛は「誇らない」です。誇るとは、自分ができていることを自慢する人が、できない人をだめな人間だと見下すことです。

ワーク A

導入のヒント

自分より絵が上手な人、走るのが速いお友だちを、うらやましく思ったことがあるでしょうか。そんなときは、自分が一番になりたいと思う、自分中心の心になっています。イエス様を信じているお友だちは、そんな心でいたくはないと思うでしょう。イエス様は、私たちの汚い心をきよめてくださる方です。信じて求めていきましょう。

ワークについて

割りばしを用意してください。ちようちよに色を塗って切り取り、点線で折って割りばしにつけ、上下に動かして遊びましょう。

ワーク B

- 質問1 みこばを思い出して答えましょう。
- 質問2 自分より優れた友だちを思い浮かべ、自分の得意なことを実際に考えながら、自分の心に愛があるか、ないかに気づきましょう。
- 質問3 自分の心が神様に喜ばれていないと気づいたら、神様の前に悔い改めましょう。先生が祈りを導いてあげてください。
- 讃美歌 「このままの姿で」

(ブレイスワールド3番)

●今日のお祈り 「神様、私のねたみの心、たかぶりの心を取り除いて、お友だちを尊敬し、教えてあげる愛の心に変えてください。」

実は、この三つに共通点があります。それは、人と比べるということです。ですから、できなくてもねたまず、できても自慢しないようにするには、人と比べなければいけません。

思い出してください。イエス様がされたタラントの譬えを。そこでは、5タラントを主人から預かった人が5タラントもつけたのと、2タラント預かった人が2タラントもつけたのが、全く同じ評価でした。神様は、何タラント持っているか、何タラントもつけたかを人と比べたりされません。神様は、預かった才能をちゃんと用いたかどうかをみられるのです。ですから私たちも人と比べる必要はないのです。みんなそれぞれが、異なる才能を神様から預かっています。それを、神様と人々のためにちゃんと用いて役立てているかどうか問題なのです。

(承) 学ぶべき真理

神様が私たちひとりひとりに下さった能力は、みんな違います。それは、神様の知恵で、それぞれにふさわしく与えられたものです。ですから、だれも自分の能力を自慢したり、できない人を見下したり、できる人をねたんではいけません。神様から預かっていただけなのです。

また神様は、どれだけできるかで評価したり、だれかと比べて点数をつけられることもありません。ですから、自分の能力を自慢したり、できない人を見下したり、できる人をねたむ必要はないんです。だれも自分の分を果たしさえすればいいのですから。

ワーク C

●小学校3、4年生では「ねたむ」「高ぶる」「誇る」といったことはかなり難しいと思います。分級の導入の時に、わかりやすいことばに言い換えると良いでしょう。メッセージで、「ねたむ」「高ぶる」「誇る」が、人と比べることによって出てくると語られているので、第2問で、実際の場面を思いつつ、人と比べないときの心のあり方を話し合ってみてください。ワークにあるイラストの例のほかにも、子どもたちが人と比べてしまった経験があったら、取り上げて話し合ってみてください。

●第3問では、人と比べなくてもいい理由は、神様が、私もお友だちも愛し、大切に思っていてくださるからであることを確認しましょう。

ワーク D

●今回のテーマは、「愛は人と自分を比較しないこと」です。しかし現実には、私たちは他者との比較の中で生きていると言っているでしょう。神様と出会うことがなかったら、良い評価などしてもらえないような私たちです。ソフトボール部のコーチになってみると、ちょっと偉い人になってみることは、生徒にはあまり身近でないかも知れませんが、でも、先生の方からこのシチュエーションをわかりやすく解説していただいた上で、取り組ませてみてください。実話コーナーは、先に読まないで、最後に皆で読んでください。

(転) 生活への適用

愛は人と比べないことです。人と比べないなら、ねたみません。自分の方ができないことがあっても、自分には自分の才能があって、それを果たしたら良いのです。できる子をねたまず、「がんばって」と、応援すれば良いのです。

また人と比べないなら、自慢しません。自分の方がよくできても、その才能は自分のものではなく、神様からの預かりものなので、自慢することはできません。

また人と比べないなら、人を見下しません。自分の方がよくできても、神様から預かった多くの才能を、十分に果たさないといけないのです。だから、人を見下したりせずに心を引き締めます。あなたはチームのレギュラーでしたが、新しく入ってきた子がかっと上手なので、レギュラーをはずされました。あなたなら、その子を応援できますか。それとも、ねたんで意地悪しますか。努力してレギュラーを取り戻しますか。他のポジションで、才能を試してみますか。

結論

私たちは、ねたんだり、自慢したり、人を見下したりしてしまう者です。そんなとき、愛は人と比べないことだと思ひ出しましょう。人と比べなければ、ねたまない、高ぶらない、誇らないのです。ねたんで意地悪したり、高ぶって人をばかにしたことがあったら、悔い改めましょう。そしてイエス様を信じて、心に住んでいただいたなら、あなたも神様の愛をいただいて、他の人々を心から愛する人になれます。

中高校へのヒント

考えてみよう

- 1 「ねたむ」「高ぶる」「誇る」とはどういう意味ですか。具体的にどうすることですか。
- 2 ねたんだり、高ぶったり、誇ったりするのはどうしてでしょうか。
- 3 主イエスがねたまず、高ぶらず、誇らなかった具体例をいくつか挙げてみましょう。

自分にあてはめてみよう

- 1 あなたのタラントや能力、容姿等は誰のものですか。
- 2 あなたは、それらを人と比べてねたんだり、高ぶったり、誇ったりしていますか。
- 3 そうすることによって、どのような結果を招きましたか。
- 4 ねたむ人、高ぶる人、誇る人に接するとき、あなたはどのように感じますか。逆の人の場合はどうですか。

話し合ってみよう

- 1 キリストのからだなる教会には、どのような特徴がありますか(前章参照)。
- 2 ねたみ、高ぶり、誇りからはどのようなものが生まれ、どのような結果をもたらすでしょうか。コリント教会の現状も見てみましょう。
- 3 主は、私たちがどのような生き方をすることを望んでおられるでしょうか。
- 4 ねたまず、高ぶらず、誇らない人になるには、どうしたらよいでしょうか。

聖書 1コリント13・5
テーマ 愛は不法をしない

序論

愛の第6番目の特徴は、△不法をしない△とである。△不法△という言葉は、今まで学んできたものより、社会的・文化的な意味をかなり強く含んでいる。新改訳では、△礼儀に反することをせず△と、社会で敬われる生き方を表すように訳している。当時のユダヤ社会では、招待客に足を洗う水を出さないのは不法であった（ルカ7・36〜50）。しかし、今の日本では、水を出さなくても何の問題もない。だが、招待しておきながら長時間待たせるなら、それは不法である。時代や地域、文化を超えて語りかける△愛は不法をしない△とはどういうことか。

一、不法の意味

△不法をする△という語は、この書の7・36にも用いられている。これは、新改訳聖書では（娘に対しての）△扱い方が正しくない△と訳されている。この部分の解釈は諸説あるのだが、父親が自分の娘を嫁に出さない状態が想定されているようだ。この語は、新約聖書ギリシア語小辞典では、「養父が養女を嫁に出さないで、体裁が悪い様を表す」と記されている。養父には、その子を養女にした責任があり、その責任を果たさないでいるのは正しくないし、愛のない行いである。養女だから、本当の娘のように扱わないのは、不法である。ここで、人に正式な扱いをしないことが不

作法であることがわかる。これは、どんな時代や地域、文化でも共通だ。

二、主イエスは正式に扱われた

人々が幼な子たちを主のもとに連れてきたとき、弟子たちがそれをだした事件が、マルコ10・13〜16に記されている。しかし主は、かえって弟子の方をだしたため、幼な子らを呼び寄せ、抱き上げて、手を置いて祝福された。それは、主が彼らを大人と同じ人格として扱われたことにはかならない。当時、女性と子どもは人数にも数えられず、人格として扱われていなかった。しかし主は、子どもを正式に扱い、不法をされなかった。

その他、主は、取税人、罪人、遊女と食事をもにされていた。また、異邦人の病を癒された。さらに、遊女や長血の女に触れられることを拒まなかった。そして、当時はまだ接触感染すると誤解されていたハンセン病にかかっている人に、手をおいて癒された。このように、当時イスラエルでは疎外され、人として扱われていなかった人々を、主イエスは正式に扱われた。△愛は不法をしない△とは、人を正式に扱うことなのだ。

三、神のかたち

人は、神のかたちに造られている。それは、一人一人に霊（人格）があることを意味している。例えば、女性を情欲をもって見ていけないのは、その人の人格を認めていないからであり、かたがた元を傷めることになるからだ。まず人を人格として見る人間観が求められる。

そして、一人の人には、キリストが身代わりに死んでくださったほどの価値がある（ローマ14・15）。一人の人の人格には、主イエスの命がかかっているのだ。だからこそ、△何をしても、人に對してではなく、主に対してするように、心から働きなさい△（コロサイ3・23）と聖書は教えている。人を神のかたちである人格として、キリストが代わりに死んでくださったほどの人格として、観る人間観が求められる。この人間観をもって、主に対してするように、心から人々に仕えていくとき、不法をしないようになる。

結論

不法をしないとは、相手を一人の人格として正式に扱うことである。礼儀作法に厳しく育てることではない。礼儀作法は時代や地域、文化によって異なるが、どんな時代、地域、文化でも、人を人格として正式に扱うことは、愛の働きである。子どもは、自分が正式に扱われているか、そんなに扱われているかを敏感に感じ取る。教師は、ちゃんと備えて、生徒を迎えることが肝要だ。そうして、子どもたちに、どうすることが不法をしないことか、身をもって教えねばならない。

子どもたちにも、他の人を正式に扱っているかどうか、問いかけてよう。異性の容姿を見て得点をついたり、容姿や能力をからかったりしてないか、反省しよう。そこで、不法をしていることに気づいたら悔い改め、イエス様を信じよう。そうするなら、心に聖霊が住まれ、神の愛が心に注がれて、不法をしない人になれる。

研究資料

(長田)

テキスト

13・5 無作法をしない 愛は、自然にその時々

にふさわしい態度を生み出す。
用いられているギリシア語「アスケーモネオー」は、名詞「スケーマ」の否定形から派生した言葉である。スケーマは、「外形、形、姿、態度、挙動」(岩隈直「新約ギリシア語辞典」)と訳されるから、「アスケーモネオー」は、ふさわしい形、態度から外れた言動を意味すると考えられる。

聖書を見ると、その時々にかにもふさわしい言葉や態度というものが賞賛されているのを見いだすことができる(箴言25・11、列王上10・5)。これらは、決して外側の形だけを追い求めてできることではない。内側のものが、自然とふさわしい態度を生み出すのである。

パリサイ人は外側の美しさを求めたが、内側には汚れたものだけがあった(マタイ23・27、28)。食前に手を洗うことはしても(マタイ15・2)、どんな人をも公平に扱うこと、また、苦しむ者に対するあわれみ深い言葉は、彼らの中から出てこなかった(マタイ23・23)。お互いに善れを与え合うことはしても(ヨハネ5・44)、評価の低い人物に對しては平気で不法を行った。その人が神から遣わされたお方であっても(ルカ7・44〜46)。

それに対して、主イエスは、「めぐみとまことに満ちて」(ヨハネ1・14)おられたので、周囲に

いた者は、自然と「その満ち満ちているものの中」から受けて、めぐみにめぐみを加えられた」(ヨハネ1・16)。当時蔑視されていた取税人、遊女、あるいは、子どもであっても、キリストのもとでは大切な人格として扱われ、受け入れられた。キリストから出て来るものは、常に愛である。愛はどんな人にも不法を行わない。

コリントの教会では、ある種の賜物を持つ者が、持たない者を見下し、失礼な態度を取るようなことがあったようである(12・21)。また、集会や晩餐の時には、種々の混乱があった(11章)が、その背後には、分をわきまえない自己主張や、他を顧みない愛のない態度があった。愛のないところに、不法なことが生まれ、愛のあるところには、いかにもふさわしい思いやりで満ちた言葉と振る舞いが生まれる。

愛に満ちた、その時々にかにもふさわしい振る舞いは、ただ私たちが、日々聖霊のご支配のもとに生きるときに生まれてくるものである(ガラテヤ5・13〜16)。

例話

エリザベス二世(1926―)が一九八一年国内旅行で田舎へ行ったときのことだ。

立ち寄った家で紅茶の接待を受けた。婦人は大きなカップになみなみと紅茶をついで出した。女王と話しこみながら彼女は、自分用になみなみとついた紅茶を、受け皿にそそいで冷やしてからもう一度カップに戻し、飲み始めた。それを興味深

く見ていた女王は、婦人に見習って同じようにして紅茶を飲んだ。

婦人は、あとで新聞記者からそのことで取材を受けた。「ええ、息子たちから、その飲み方は都会では行儀が悪いんだから、と止められていたんです。女王様を前につい緊張しちまって、ここでの習慣通りに紅茶を飲んでしまいました。でも、息子たちの考えは間違っていることがわかりましたよ。宮殿でも同じ飲み方をなさっていることがわかりましたからね。」

(藤井康男『キリスト教例話事典』Ver.4 CD-R OM版より)



聖書 1コリント13・5
タイトル 人を正式にあつかう
中心聖句 (愛は) 不作法をしない。
1コリント13・5
目標 愛は、人を正式に扱うことである
ことを発見する。

導入

今日は、愛についての学びの4回目、愛は「不作法をしない」です。不作法っていうのは、礼儀に反することです。皆さんも、朝、先生と会ったら、「おはようございます」って言うよね。もし挨拶をちゃんとしないなら、礼儀に反します。なぜ、挨拶しないといけないのか、なぜ不作法がいけないのかを考えてみましょう。

(起) ストーリーを語る

ある日、イエス様は、たくさんの人に取り囲まれ、病気を癒したり、悪霊を追い出したり、お話しをしたりしてたいへん忙しかっておられました。そこにお母さんに連れられて、子どもたちがやってきました。お母さんは、子どもたちの祝福を祈ってもらいたいようです。しかし、イエス様にはなかなか近寄れません。ところが、子どもたちはイエス様のそばに行きたくてしかたがなく、とうとう駆け寄って行きました。すると、弟子たちが、子どもたちを追い払おうとしたのです。でもイエス様は、弟子たちをお叱りになりました。それど

ころか、幼い子を呼び寄せて抱き上げ、手を置いて祝福されたのです。そして、「幼な子らがわたしに来るのをとめてはならない」「だれでも幼な子のようにならない」神の国に入ることはできない」とおっしゃいました。当時のイスラエルでは、女性や子どもは軽視されていました。イエス様は幼な子を人として正式に扱われ、また弟子たちにもそうせよと命じられたのです。

その他にも、イエス様は取税人や罪人と食事をなさり、触ったらうつると誤解されていた病気の人が手を置いて癒されました。イエス様は、だれをも、人として正式に扱われたのです。

ギリシャ語の「不作法をする」という言葉は、「正式に扱わない」との意味で、養子にもらった子を正式な子として扱わず、結婚させないことを意味していました。イエス様と正反對ですね。イエス様は、全ての人を正式に扱われました。

(承) 学ぶべき真理

先生の教会の駐車場にはバスケットリンクがあります。リンクができたころ、中学生が無断で入りこんで、バスケットをし始めました。そのうち、おかしの袋やジュースの缶を散らかし、中には煙草を吸っている子もいました。そのつど注意すると、先生の車がないときに入ってきて、先生が車で帰ってくると、蜘蛛の子を散らすように逃げ去るようになりました。そこで先生は、バスケットリンク貸出ノートを作り、入ってきた子どもたちと言いました。よその敷地に入るには、先ずチャームをならして、インターホンで、「かして下さい

とお願ひすること。ノートに借りた人の名前を記入すること、終わったら「ミを残さないように」、チャームならして「ありがと」を言いました」と言うことを約束させたのです。ふてくされて、唾を吐いて帰っていくんじゃないかと様子を見てみると、帰り際にちゃんと「ミ」を拾い、嬉しそうに「ありがと」を言いました。と挨拶して帰っていくではありませんか。彼らはこそそしたいわけでなく、どうしていいかわからなかっただけなのです。愛は人を正式に扱うことなんだ、という聖書の言葉の意味がよくわかりました。

(転) 生活への適用

朝会ったら、まず挨拶するのはどうしてでしょうか。それは相手を正式に扱うためです。知らない人なら挨拶しないけど、相手を正式に扱うなら、先生には「おはようございます」、友だちには「おはよう」と挨拶します。相手をどう扱っているかは、その挨拶に表れます。挨拶するのは、相手を正式に扱っているというしるしなんです。

結論

作法とか礼儀は、国や地域、文化や時代によって、違います。でも、どんな時代もどんな国でも、人を正式に扱うことは、礼儀にかかっています。愛は、人を正式に扱うことです。今までだれかに不作法をしていたのに気づいたら悔い改めましょう。そして、イエス様を信じて、聖霊様に心に住んでいただき、神様の愛を注いでいただいて、あなたも愛する人になりましょう。

ワーク A

導入のヒント

● 導入のヒント
あの子は嫌い。だから無視する。この子は意地悪。だから知らん振りして良い。皆さんはそう思っていますか。神様は、どんな人も愛してください。イエス様は十字架にかかってくださいました。イエス様に喜ばれるように、人にも伝えましょう。

● ワークについて
紙皿を用意します。子馬に色を塗って切り取り、半円に折った紙皿に貼って、遊びましょう。

ワーク B

● 質問1 女性や子どもが軽視されている時代に、イエス様はどのような場合でも、すべての人を同じように大切にされました。弟子たちとイエス様の違いは何だったのでしょうか。

● 質問2 小さい子どもであっても、「この人は偉くて、この人は偉くない」と区別して、態度を変える子がいます。どの人に対しても同じように気持ちよく接することが愛だと伝えましょう。

● 質問3 人によって態度を変えたことがないか、失礼な態度をとったことはないか、子どもたちに聞いてみてください。

● 讃美歌 「愛・あい・アイ」
(ノアCD)「レクシオン」Vol.1 ©
● 今日のお祈り 「神様、どの人も区別することなく、大切に愛の心を私に与えてください。」

ワーク C

● 愛は、愛する相手があつて成り立ちます。自分を愛する事も大切ですが、「自分のようにあなたの隣人を愛せよ」と、聖書は命じています。その愛は「不作法をしないこと」です。表面的な作法ではなく、真実な信仰を反映する作法となるように考えましょう。問いの答えを確認する時に、○か×かではなく、なぜそう思うのかを話すことが大切です。

● 第2問 「不作法をしない」といわれる神様の御心を考えましょう。

● 第3問 日ごろ先生が気になっている事や、子どもたち自身が不作法だと思う事例も取り上げてください。礼儀の内容は、国や地方によっても多少は違つてしょう。しかし、神様の御心を思いつつ人と接していくなら、主の導かれる愛が礼儀として現されていきます。

ワーク D

● 「不作法をしないとは、相手を一人の人格として正式に扱うこと」です。しかし、私たちは相手によって態度を変える場合があります。丁寧に扱ったり、へつらったり、見下げたり、無視したり。ワークではいろいろな人が出てきます。その相手に対して、どういう態度をとるべきか、吟味してみしましょう。教師の方で、もっといろいろな人を挙げてみてよいと思います。「相手によって自分はいかに不作法をしていたんだ」ということに気づけば、まずは成功でしょう。

中高校へのヒント

● 考えてみよう

- 1 「不作法をしない」とはどういう意味ですか。
- 2 聖書は、人間をどのような存在として見ていますか。
- 3 そのような人間に対して「不作法をしない」とは、具体的にどうすることですか。
- 4 主イエスが不作法をされなかった具体例を幾つか挙げてみましょう。

● 自分にあてはめてみよう

- 1 あなたは、教会や学校、家庭等で不作法をしていますか。不作法をしている原因はどこにありますか。
 - 2 あなたは、周囲の人々をどのように見ていますか。
 - 3 不作法な人に接するとき、あなたはどんな感じがしますか。逆の人の場合はどうですか。
 - 4 あなたが、不作法という点で悔い改めなければならぬこと、また今日から実践しようと決断したことは何ですか。
- 話し合ってみよう
- 1 不作法をしないということ、日本的に礼儀作法を重んじるということとは、どのような違いがありますか。
 - 2 いじめや差別をすることは、なぜ悪いのでしょうか。
 - 3 不作法をしない人になるには、どうしたらよいでしょうか。

聖書 1コリント13・5、6
テーマ 愛は自分の利益を求めない

序論

愛の第7番目の特徴は、△自分の利益を求めない△であり、次に△いらだたない△、△恨みをいだかない△、△不義を喜ばないで真理を喜ぶ△という特徴が続く。これら4つが連続しているのは、「自己中心であってはならない」という共通点があるからだ。

一、自分の利益を求めない

一般の経済活動は、相手を豊かにして自分も豊かになる働きである。製造業なら、その製品で人々の生活を豊かにして、その代価で自分も豊かになるのだ。この経済活動に、愛がないのではない。自分の利益を求めていけないなら、人間の経済活動は全て罪なのかというと、そうではない。聖書が教えているのは、△わだちた強い者は、強くない者たちの弱さになうべきであって、自分だけを喜ばせることをしてはならない△(ローマ15・1)と書かれているように、自分だけを喜ばせてはならないということだ。

世の中には、自分しか喜ばせないことがある。典型的なのが、ギャンブルだ。他の多くの人に損をさせて、自分だけが得をする。だからである。自分は大穴を当て喜んでいても、その背後で多くの人が損をしている。

このように、自己中心で自分の都合を相手におしつけることが、愛のない行為である。自分の都合ばかりを考えているなら、学校を休んだ友だち

にその日の勉強を教えてあげることで、好きなテレビを見ないでお手伝いすることなどできない。しかし愛があるなら、自分の利益を求めないで、他の人を助けてあげられるのだ。

二、いらだたない

「いらだたない」という語は、新改訳では「怒らず」と訳されている。エペソ4・26では、△憤ったままで、日が暮れるようであってはならない△と、「憤り」と訳されている。これは、一時的な怒りのことを表している。誰でも憤ることはあるだろうが、怒りを相手にぶつけるのは、自分の溜飲を下げるためであって、相手のためではない。叱るのとは違う。怒りとは、自分のいらだった感情を相手に押しつけることである。これも自己中心で、自分の都合を相手におしつけることだ。

いらだつことも愛ではない。愛はいらだたない。冷静になって、相手のことを考えて行動できるまで、感情的に動いてはならない。

三、恨みをいだかない

この部分を原語から直訳すると、「悪を数えない」となる。神様は、悔い改めた者の悪を数えたりされない。△わだちたは、あなたの罪を心にとめない△(イザヤ43・25)と仰せられる。パウロはこの語をローマ人への手紙の4章で、何度も用いている。義と「認める」と訳されているのがこの語である。神は私たちの罪を記録されず、かえって義人だと記録してくださるのだ。

自分は、義人と記録されたのに、他の人の悪を記録しているなら、それは自己中心である。「あん

た、この間もしたやろ」と言うのは、自分の都合で、赦したり赦さなかったりする自己中心のゆえだ。愛は恨みをいだかない。愛は、悪を数えないで赦し、忘れることだ。自分の都合で赦したり赦さなかったりしてはならない。

四、不義を喜ばないで真理を喜ぶ

自分に都合がよければ、たとえ不正でもやってしまい、さらにそれを喜ぶ人がいる。これも自分の都合を優先する自己中心のゆえだ。しかし、自己中心をやめて、自分の利益を求めないなら、不義を退け、真理を喜ぶことができる。

人がいじめられているのを見て、喜んでいてはいけない。あるいは、仲間はずれにされるのを恐れて黙っているはならない。それは不義を喜ぶ自己中心だ。本当の愛があるなら、注意しよう。その人が悪かったことに気づいて、やめてくれるときこそ、本当の喜びが生まれてくる。

結論

主イエスは、自分の利益を求められなかった。自分を犠牲にして、かえって仕えられた。愛は、自分しか喜ばないことをせず、人に怒りをぶつけない、人のした悪を赦し、不義を喜ばないで真理を喜ぶことである。それは、自己中心をやめて、自分の都合を相手におしつけないことなのだ。

私たちも、主イエスを信じ、主イエスを心の王座に座っていただくとき、自己中心から解放され、人を愛する者になれる。

研究資料

(長田)

テキスト

13・5 自分の利益を求めない 愛は、自分の利益を求めることよりも、むしろ、他者に与えることを考える。

パウロは、「おのおの、自分のことばかりでなく、他人のことでも考えなさい」(ピリピ2・4)と勧めた後、「汝らキリスト・イエスの心を心とせよ」(ピリピ2・5、文語訳)と語った。キリストの生涯を見るたびに、それは自己放棄の生涯であり(ピリピ2・6～8)、人々に仕える生涯、多くの人々の罪の贖いのため、十字架上で自分の命を差し出す生涯であった(マルコ10・45)。キリストの心の中には、自分の利益を求めることなく、与えることだけがあった。

私たちは、「まず自分」という自己中心の中に生きてきた者であるが、惜しみなく与えて下さったキリストのご愛を知り、罪赦されて生かされた者として、与える愛に生きるように召されている(1コハネ3・16)。

いらだたない「怒らず」(新改訳)「憤ほらず」(文語訳)とも訳される。しかし、「怒ることがあっても、罪を犯してはならない。憤ったままで、日が暮れるようであったはならない」(エペソ4・26)とも教えられている。怒りが制御できずに、人への憎しみに変わっていくとき、怒りは罪になる。キリストも、弟子たちの間違った行動に対して

憤られた(マルコ10・14)。しかし、それは自分のための怒りではなかった。ご自分を十字架につけ、あざけりののしる者たちのためにも、主は彼らの赦しを祈り求められた。われらの贖いの土台は、「十字架における主イエスのいらだたない霊によるのである」(ベンゲル)と言われるように、十字架の理不尽な苦しみの中で、瞬間たりとも、いらだちがキリストの心を支配することはなかった。もしそうであったなら、十字架は贖いの力を失ったであろう。

恨みをいだかない「人のした悪を思わす」(新改訳)とも訳される。もともと、「計算する、勘定に入れる」という意味をもった言葉(ギリシア語「ロギスマイ」が使われている。人がした悪を心のノートに書き付けて、忘れないようにすることをするな。かえって赦して、少しの心のわだかまりも残さないようにせよとの意味である。

また、「ロギスマイ」は、パウロが信仰義認の恵みを語った時に用いられた言葉でもある(ローマ4・5)。神は、罪深い私たちを、キリストの身代わりの十字架の故に赦して下さった。すなわち、私たちの罪を数え上げ、記録し、裁くことを放棄して下さった。逆に、義と認められるはずのない私たちを、ただ御子を信じる信仰のゆえに、「義人の内に数え上げて下さった。神のそのような恵みを覚え、私たちもまた、人が私たちにした悪を赦すべきである。キリストは、そのことを無限に徹底して行つべきことを教えておられる(マタイ18・21～35)。

13・6 不義を喜ばないで、真理を喜ぶ 愛の性質のリスト(4～7節)は、この節で、再び否定的言葉から肯定的言葉に転換する。

愛は、真理をあいまいにしたり、悪を許容したりすることではない。むしろ、自分の利益に反するときでさえ、真理に立ち、真理を掲げ、真理を守ろうとする。また、人の不義を見て、それを喜ぶことをしない。心を痛め、悲しみ、人が不義を離れ、真理に立ち返ることを願う求める。それは、まさに神ご自身の愛である(エゼキエル33・11)。

例話 「愛は打算をこえて」

よく、子どもがお母さんに何かを頼まれたりすると、「お駄賃はいくらくれる？」などと言ったりします。そこであるとき、「じゃあ、ママの方からあなたに請求書を出すわね」とお母さんが子どもに言ったという話を聞いたことがあります。

○生まれてからずっと、おっぱいをあげ続けてきた代金…タダ。

○何度も何度も、おしめを取り替えてあげた代金…タダ。

○ずっととお食事を作ってあげたり、お弁当を作ったあげた代金…タダ。

○夜中にあなたが何度か熱を出したり、病気になるたびに、そのたびに「一晩寝ないで看病してあげた代金…タダ。合計、全部タダ。

…子どもはギャフンとなったということです。(PBA発行『恵みゆたかに』62頁)

聖書 Iコリント13・5、6

タイトル 愛は自己中心じゃない

中心聖句(愛は)自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。不義を喜ばないで真理を喜ぶ。

Iコリント13・5、6

目標 愛は自己中心でないことを発見し、キリスト中心になる。

導入

今日は愛の特徴の7番目から10番目です。この4つにも共通点があって、ここにならんでいます。それは、愛は自己中心でないということです。

本論

まず、愛は、「自分の利益を求めない」のです。たとえば、学校で掃除時間、先生の目のとかないう校庭掃除の当番になりました。みんなは掃除をせずに遊んでいます。あなたならどうしますか。自分だけ掃除したら損だから、しないっていうのが、自分の利益を求めている姿です。自分だけ得することや自分しか喜ばないことをするのは、愛ではありません。皆さんの中には、自分のおもちゃは、人に絶対貸さない。おやつは全部自分で食べてしまう。分けるのなんて大嫌い、なんて言う人はいませんか。こういう人をジコチュウって言いますね。自己中心のことです。いつも自分が得しないと気がすまないのは、愛がないことなの

です。愛は、自己中心でなく、自分の利益を求めないことです。さっきの掃除の場合なら、まず自分が掃除をして、サボっている友だちの分まですることです。そのとき、「サボっていないでいっしょに掃除しよう」と誘ってあげるということです。

次に、愛は、「いらだたない」のです。いっしょに遊ぶのに、足の遅い妹や弟を待ってあげることができないで、イライラしておこったことがありませんか。鬼ごっこで、自分が鬼になるとふくれ、鬼をしなかつた子はいませんか。自分のいらだった感情を相手におしつけることは、自己中心で、愛ではありません。自分が正しいので怒ることあるでしょうが、それでも相手を正すには、怒ってはいけません。それは自分の感情をぶつけ、スツとするためにしていることになってしまっからです。冷静になって、正してあげましょう。愛はいらだたないことです。自己中心になって、自分の感情を相手におしつけてはいけません。

3番目に、愛は、「恨みをいだかない」のです。あなたは、以前に意地悪をされたことや、おもちやを壊されたことなどをいつまでも覚えていて、赦さないでいることはありませんか。あやまってきた人を赦さず恨んでいるのは、愛がないからです。皆さんが悪いことをしたとしましょう。先生が昨日は赦して、今日は赦さなかつたらどう思いますか。ある時は赦して、ある時は赦さなかつたりするのも自己中心で、自分の都合を相手におしつけています。愛は恨みをいだきません、あやまるなら赦し、二度と悪い出さないのです。決して、「あの人は、昔こんなことしたのだよ」と噂をし

たりしてはいけません。

4番目に、愛は、「不義を喜ばないで真理を喜ぶ」のです。不義とは、正しくないことです。叱られるのがいやで、本当は自分がしたことの、「してない」って嘘をついたことがありませんか。自分の利益のために嘘をつくことは、不義を喜ぶことです。人にいたずらをして喜ぶこと、陰口を言って面白がることなども、これにあたります。自分の得のために間違ったことでもするのは、明らかに自己中心で、自分の都合しか考えていません。愛は不義を喜ばないで真理を喜ぶことです。私たちは、神様からいつも祝福されているのですから、不義を行って得する必要はありません。真理がなされることを喜びましょう。

結論

イエス様は、自分を喜ばせることよりも、父なる神が喜ばれることをなさいました。イエス様には自己中心なところは全然ありませんでした。かえって神であるのに人になられ、十字架にまでつかれて、人類に仕えられました。愛は、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない、不義を喜ばないで真理を喜ぶことです。これらは、愛は自己中心にならないことだと教えています。しかし、私たちは、いつも自己中心になりやすい者です。そんな私たちも、自分が自己中心なことについて悔い改め、イエス様を信じて心にお迎えするなら、イエス様に自分の心の主になっていただくことができます。すると、自己中心でなくなるのです。

ワーク A

導入のヒント

●皆さんが母さんのお手伝いをするのは、おこづかいがもらえるからでしょうか。何かおこづひがあるからでしょうか。イエス様は、何の見返りも求められず、ただ神様に喜ばれるように、歩まれました。私たちの本当のおこづひは、天国で神様から頂く、すばらしいものです。

ワークについて

●マカロニを用意します。ハートに色を塗って切り取り、マカロニとハートにひもをとおして、ネットレスを作りましょう。

ワーク B

●質問1 今はきょうだいの数が少なく、豊かな生活ですので、分ける機会がほとんどない子どもが増えていきます。自分で独り占めして分けないことは、神様が悲しまれることだと気づきましょう。

●質問2 相手があやまっているのに、いつまでもゆるさないで、ずっと覚えていることが、「うらみを抱く」ことです。

●質問3 具体的に神様を悲しませたことがあったら、書き出して、悔い改めの祈りをしましょう。神様は祈りに答えて愛の心をくださいます。

讃美歌

(ブレイズワールド56番)

●今日のお祈り 「神様、私は神様を悲しませていました。ゆるしてください。お友だちをゆるし、思いやる心を与えてください。」

ワーク C

第1問 愛の心の空白の箇所に、みことばを入れてください。自己中心の心の空白の箇所には、その反対のことばを入れてください。(例)利益を求めない→利益を求める

●第2問 間にはいる前に、「みんなは、愛の心と自己中心の心とどっちがほしい?」と尋ねると、第2問につながりやすいです。神様に教えられた愛の心をもって、具体的に話し合ってください。項目が多いので、全部を話さなくても良いです。いくつかに絞って話し合えば十分です。

●第3問 愛の心を与えてくださるイエス様を信頼して、祈りましょう。

ワーク D

●今回の中心聖句は少し長いので、「愛は何であって何でないコーナー」を通して、分類して味わってみるのも良いかと思えます。

●「誰々はコーナー」は、「愛は」というところに特定の人の名前を入れることによって、このみことばにふさわしい方を発見するためのものです。イエス様がどんなにステキで魅力あるお方であるかを知って、イエス様を心にお迎えできればいいですね。

中高校へのヒント

●考えてみよう

- 1 「自分の利益を求めない。…真理を喜ぶ」とは、それぞれどういう意味ですか。
- 2 主イエスの生涯から、これら四つの具体例をいくつか挙げてみましょう。
- 3 不正や不義に対する憤りは、「愛は…いらだたない」に反することでしょうか(マルコ3:5、使徒17・16他)。

●自分にあてはめてみよう

- 1 あなたは、「自分の利益を求めない。…真理を喜ぶ」人ですか。逆のことをしていますか。
- 2 このような人に接するとき、あなたはどのように感じますか。逆の人の場合はどうですか。
- 3 あなたは、どのような場合に自分の利益だけを求めて行動しますか。
- 4 あなたは、どのような場合にいらだちますか。
- 5 あなたは、人から傷つけられたり、理不尽な仕打ちを受けたとき、どうしますか。赦し、忘れることができますか。
- 6 あなたは、不正や不義を目撃したとき、どうしますか。

●話し合ってみよう

- 1 自分のことしか考えない自己中心からどのようなものが生まれ、どのような結果をもたらすでしょうか。
- 2 「自分の利益を求めない…真理を喜ぶ」ような人になるには、どうしたらよいでしょうか。

聖書 Ⅰコリント13・7
テーマ 愛はすべてをおおふ

序論

愛の特徴の最後に挙げられているのは、**△すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える**のことである。ここでも最初の**△忍び**という言葉に大きな意義がある。

一、すべてを忍ぶ

この語は、新約聖書の中でもう3回使われ、Ⅰコリント9・12では「忍び」、Ⅰテサロニケ3・1、5では「耐える」と訳されている。ところが、この節の最後に△すべてを耐える△という句がある。この節のこの語には別の意味があると思われる。キッテルの『新約聖書神学辞典』は、「おおふ」とか「抑制する」とかの訳を提案している(7巻387頁)。この語の名詞形は「屋根」という意味だから、「おおふ」という訳が、よりふさわしい。モルガンは、「それは雨傘のようなもので、それをひるげて、だれかをその下に招き入れて、雨に打たれないようにしてやることである」(Ⅰコリント人への手紙289頁)と説明する。現代なら、「カバーする」と訳したらわかりやすいだろう。

主イエスは私たちを愛し、私たちに下されるべき神の怒りを、身代わりに受けて下さった。まさに私たちを覆って下さったのだ。ちょうどへめんどりが翼の下にそのひなを集めるように(マタイ23・37)。詩篇91・4には△主はその羽をもって、あなたをおおわれる△とあり、詩篇85・2は△あなたはその民の不義をゆるし、彼らの罪を△と

とくおおわれました△と宣言する。△愛は多くの罪をおおふものである(Ⅰペテロ4・8)。子どもが、親や教師に、勉強できないことを嘲笑われ、公表され、恥をかかされたら、決して健全には育たない。愛は、今はできなくてもできる日までカバーしてあげることなのである。

二、すべてを信じる

罪を赦された人でも、すぐに聖い歩みができるわけではない。裏切ることだってあるだろう。しかし、その人を信頼し続けることが必要である。弟子たちも、主を裏切ったことがあったが、主はそんな弟子たちを愛し、信頼し、そして遣わされた。その後も弟子たちに失敗がなかった訳ではないが、主は、いすれできる△と信じておられた。もし子どもが親や教師に、「いすれできる△」と信じてもらえなかったら、決して健全に育つことはない。愛は、今はできなくても、いすれできると信じてあげることなのである。

三、すべてを望む

この語は、新改訳聖書では△期待し△と訳されている。主イエスは、すべての人が救われ(Ⅰテモテ2・4)、清くなり(Ⅰテサロニケ4・3)、神の子となる(エペソ1・5)ことを望んでおられる。将来、このことが実現するように、期待しておられるのだ。また主は、△もし人がわたしにつながっており、またわたしはその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる△(ヨハネ15・5)と約束された。主は、信仰者が御霊の実を結ぶのを期待しておられる。

もし子どもが、親や教師に期待されていないなら、決して健全に育つことはない。愛は、今はできなくてもいすれできるようになると、期待してあげることなのである。

四、すべてを耐える

主は、過去2千年間、△すべての者が悔改めに至ることを望み、あなたがたに対してながく忍耐して△こられた(Ⅱペテロ3・9)。人が悔い改めに至るのも、神様の△慈愛と忍耐と寛容との富(ローマ2・4)が積み上げられているからである。主は人類に忍耐してくださっている。

人の成長を待つには忍耐がいる。しかし、もし子どもが、親や教師に、いすれできると、待ってもらえなかったら、決して健全に成長することはできない。愛は、今はできなくても、いすれできると忍耐してあげることなのである。

結論

愛は、「今できなくてもいすれできる」と、カバーし、信じ、望み、忍耐することである。愛は、人格教育なのだ。子どもは、親や教師から、このように愛されなければ健全に成長しない。

本章の「愛」のところに「キリスト」と入れて読むなら、そのとおりだと思う。しかし、自分の名を入れて読むならどうだろうか。まず、自分に愛がないことに気づき、悔い改めよう。そして、イエス・キリスト信じて、聖霊に心に住んでいただき、神の愛を注がれ、人を愛する者になろう。

研究資料

(長田)

テキスト

13・7 愛の性質のリストの最後である。4つの肯定的な動詞で結ばれており、しかも、「すべてを」との目的語が繰り返されている。愛は、ひ弱なものでなく、どんな環境のもとでも耐え抜き、将来に向かって神の恵みによる勝利をつかみ取っていく力を持っている。

すべてを忍び 「忍び」と訳されているギリシア語「ステゴー」は、元来、「おおふ」との意味を持っている。「何よりもまず、互の愛を熱く保ちなさい。愛は多くの罪をおおふものである」(Ⅰペテロ4・8)とあるように、愛は、人の罪をむやみに言いふらしたりせず、痛みをもって取り扱う。必要以上に人の目に触れることのないように覆いつつ、その人のためにとりなしていく。(創世記9・20、マタイ1・19、ヨハネ8・1、11)。愛は、人のした不当と思える取り扱いに対しても、赦しつつ、いたずらに動かないで、黙していることができる(サムエル上10・27、イザヤ53・7)。

すべてを信じ 愛は、人の良い面を見ようとする。良いようにも悪いようにも解釈できる言動に対しては、良い方を選び取るうとする。たとい、信頼するに値しない人間だと判断される時でさえ、どんな人を見捨てずに悔い改めを待ち望まれる神のご愛を覚えつつ、主の恵みが彼に及ぶことを期待して、主の最善のみわざを信じ続ける。

究極的な意味で人を信頼することは、愚かである(イザヤ2・22)。でも、どのような人にも及ぶ神の恵みのみわざを信頼し続けるのである。

すべてを望み 愛は、どんな人に対しても望みを失わない。なぜなら、神が、すべての人を愛をもって招き、その悔い改めを期待し、望んでおられるからである(Ⅱペテロ3・9)。また、どんな人をも神は新しく、育て、造り変える力を持っておられる(Ⅱコリント5・17、Ⅰコリント3・6)。愛は、どんな人の中にも、無限の可能性を見出す。

キリストは、無学で粗野な漁師たちや取税人をも弟子とし、多くの薫陶を持って養育された。裏切られ、見捨てられた後も、彼らを赦し、愛し、「自身の尊いみわざのために用いよう」とされた(ヨハネ21・15、17)。キリストの期待は、最後には裏切られることがなかった。弟子たちは、自らの無力と愚かさを覚えつつも、聖霊の力により、主のご期待に見事に応えていった。

すべてを耐える 愛は、忍耐をもって待つことができる。赦し続け、愛し続け、耐え続けることができる。愛は、不屈の力をもってあらゆる状況の中で立ち続けることができる。そして、やがて主の恵みの勝利を明らかにすることができるのである。

詩 『カルバリの愛を知っていますか』より

(エミール・カームイクル著、いのちのことば社発行、15、26、27、29頁)

もし誰かの欠点や過ちを、軽はずみな思いで話

題にしたりするならば、それがたとえ子どもの失敗であろうとも、おもしろがってそのことを人に語るならば、その時わたしはカルバリの愛をまったく知らない……

たとえわずかなきざしであろうとも、まわりの人たちがすべての中に、新しい出発の萌芽を見出し、希望と期待をもって彼らを見ることを、もししななならば、自分たちのうち誰がいちばん偉いかと争っていた弟子たちを叱りつけた主がなお、「あなたがたこそ、わたしのさまざまな試練の時に、わたしについて来てくれた人たち」とやさしいことばをかけたことを、もし忘れるならば、その時わたしはカルバリの愛をまったく知らない。

誰かのために失望を味わうようなことがあった時に、なお信頼し続けることをしないで、もし恐れに身を委ねてしまえば、また誰かが失敗した時に、「やはり心配していた通りだ」などと、もし言うならば、その時わたしはカルバリの愛をまったく知らない……

なかなか成長しない魂に対して、もし救い主の忍耐を持つことができないならば、彼らの中にキリストの光が創られるまでの辛苦(まことに厳しく、痛みに満ちた)についてほとんど知ることがないならば、その時わたしはカルバリの愛をまったく知らない。

聖書 1コリント13・7

タイトル 愛は期待する

中心聖句 (愛は)すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。 1コリント13・7

目標 愛は、今はできなくてもいつかはできると期待することだと発見する。

導入

愛って何かを学ぶ最後になります。ここに4つ連続する、すべてを忍び、信じ、望み、耐えるには、やはり共通点があります。それは、人を育てるということです。

本論

まず愛は、「すべてを忍ぶ」ことです。この「忍ぶ」という言葉は、「おおう」とか「カバーする」とかいう意味です。例えば、親鳥がひなを羽でおおうとか、野球だと、セカンドのエラーをショートがカバーするなどの意味です。人を育てるためには、失敗をおおい、カバーすることが必要です。例えば先生に、「誰々はテストでこんなところ間違った」と、みんなの前で言われたら、とっても嫌で、勉強も先生も嫌いになってしまいますね。解らないから学び、失敗するから練習しているのに、失敗をのしられたら、そこで学んでいる意味がありません。愛は、今はできないけど、いつ

かできるように、今の失敗をカバーしてあげることです。最初から完成している人はいません。すべての人に、知らないこと、未熟なことがあります。ですから、人が失敗したとき、すべてをカバーしてあげましょう。

次に、愛は「すべてを信じる」ことです。でも神様を信じるようにすべてを信じてしまったら、それは偶像礼拝です。ここで、「すべてを信じる」とは、人を育てる場合のことです。人は失敗します。弟子たちは、何度失敗し、何度イエス様を裏切ったでしょうか。けれどイエス様は赦し、知恵を与え、導きを与えて、回復させられました。イエス様は、神様を信じるように弟子たちを信じていたわけではありませんが、今はできなくても、いずれできるように信じておられたのです。皆さんも、親や先生に、いつかできると信じてもらえず、「おまえなんかでできっこない」と言われたら、やる気がなくなりますがね。愛は、すべてを信じてくれることです。今はできなくても、いずれできるよつになると信じてあげましょう。

次に、愛は「すべてを望む」です。この「望む」という語は、新改訳聖書では、「期待する」と訳されています。主イエスは弟子たちが全世界へ福音を宣べ伝えることを期待され、神様は全ての人が救われて真理を悟ることを期待されています。皆さんも親や先生からいつかできると期待されず、「おまえなんかでできっこない」と思われていたら、やる気がなくなりますがね。愛は、すべてを期待することです。今はできなくても、いずれできるよつになると期待してあげましょう。

そして最後に、愛は「すべてを耐える」という

ことです。この「耐える」は、待つてあげることです。弟や妹といっしょにどこかへ行くと、足が遅いので待つてあげないといけないでしょう。同じように神様は、イエス様が天にお帰りになってから2千年も、人々が救われるのを忍耐して待つておられます。神様の忍耐は、5年や10年のものではありません。私たちには気が遠くなるほどの忍耐です。皆さんも、親や先生に、「いつかできる」と忍耐して待つてもらえなかったら、何もかも今すぐにはできるわけではないので、できないことだらけのままです。愛は、すべてを耐えることです。今はできなくても、いずれできるように待つてあげましょう。

結論

愛は、「今はできなくてもいずれできるよつになる」と、カバーし、信じ、期待し、忍耐して待つてあげることです。皆さんも、今は子どもや生徒の立場で、これらのことをしてもらっています。が、だんだんお兄さんやお姉さんになって弟や妹に、先輩になって後輩に、してあげる立場になってゆきます。今できないことを責めたり、馬鹿にしているかもしれません。いずれできるようになると、カバーし、信じ、期待し、忍耐して待つてあげましょう。皆さんは自分に愛がないことに気づきましたか。気づいたらまず悔い改め、イエス様を信じましょう。そして、イエス様を心にお迎えし、心に住んでいただきましょう。すると、神様の愛があなたの心に注がれるようになり、あなたも人を愛する人になることができます。

ワーク A

導入のヒント

小さな雛鳥でも、親鳥の大きな翼の中にいるなら、どんなことから守られて安心ですね。イエス様は、そのような愛で私たちを愛してください。まだわからないことや、できないことがあっても、待つていてください。私たちもイエス様のような大きな愛の人になりたいですね。

ワークについて

紙皿か、色のついたボール紙を用意します。中央に丸いカード、その周囲にハート型のカードを貼って、壁掛けにしましょう。

ワーク B

●質問1 「もうだめだ」と見捨てず、最後まで見守ってあげることが、期待することです。

●質問2 子どもたちは、自分より小さい子どもたちに期待しているでしょうか。自由に答えさせ、その後に、神様はどうすることを喜ばれるかを話してあげてください。

●質問3 愛について学んできましたが、子どもたちの心の中は愛で満たされているでしょうか。イエス様だけが私たちの心を愛で満たしてください。

讃美歌 「ほくの心の中が」

(フレイズワールド4番)

●今日のお祈り 「神様、どんな時でも、イエス様の愛で私の心をいっぱいしてください。」

ワーク C

●まずワークの絵を見てください。イエス様は両手を広げて、私たちが苦手にしている事や、やろうと思ってもできない事、不安な事、臆病になっている事などを、いつかできると信じて、助け、待つていて下さる事を感じてください。イエス様の愛は「すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える」愛です。子どもたち自身が、イエス様に待つていただいていることに目を向けられるようにしましょう。次に、自分も主の期待に力しようと思つものについて考えます。さらに進んで、子どもたちが友達のために信じて、助け、待つていこうと思つものについて考えることができたなら、もっと良いと思います。

ワーク D

●今回のテーマは、教師も問われていることではないでしょうか。「とことん期待」を通して、ここまでダメだったらじぶんはどんな気持ちになるのか、ここまでダメでもこの様な励ましがあったらどんな気持ちになるのか、などと考えてみましょう。神様は、生徒に対しても教師に対しても、ここまで期待してくださっていることを心にとめたいものです。

中高校へのヒント

●考えてみよう

- 1 「すべてを忍び…耐える」とは、それぞれどういう意味ですか。
- 2 主イエスの生涯から、これら4つの具体例を幾つか挙げてみましょう。
- 3 13の愛の特徴を完全に備えているのは誰ですか。

●自分にあてはめてみよう

- 1 あなたは、「すべてを忍び…耐える」人ですか。逆のことをしていますか。
- 2 このような人に接するとき、あなたはどのように感じますか。逆の人の場合はどうですか。
- 3 主イエスは、あなたの罪や失敗、欠点等をどのように忍ばれたでしょうか。
- 4 あなたは、どのような場合にも人を信じ、可能性に期待し続けることができますか。「お人好し」とはどう違うのでしょうか。
- 5 あなたは、どのような境遇に置かれても耐えることができますか。
- 6 13章の愛の特徴を、他人に当てはめる(そうすると、さばきになります)のではなく、自分に当てはめて省みましょう。

●話し合ってみよう

- 1 「すべてを忍び…耐える」人になるには、どうしたらよいでしょうか。
- 2 13章の愛の特徴を備えた人になるには、どうしたらよいでしょうか(ローマ5・5他)。

聖書 マタイ6・1～13
テーマ ひとの静まって祈る

序論

今週からアドベントにはいる。クリスマスが近くなると、飾り付けや劇の練習などで、心が浮き浮きする。しかし単なるお祭り気分です。クリスマスを迎えるのはよくない。祈り心をもって迎えるためにも、まず最初に祈りについて学ぶ。年に一度扱う祈りシリーズの第2回でもある(第1回は、昨年11月の最終週を参照のこと)。

今日のテキストは山上の垂訓の一部で、パリサイ人の義にまざる義(5・20)とはどういうものか、3つの具体例によって教えられている。施し(2・4節)、祈り(5・8節)、断食(16・18節)という、ユダヤ人の宗教生活の基盤となる行動が偽善的にならないためには、人に見られるために人の前で行わないことが重要であると、主イエスは諭された。「私も偽善から救うのは『御前の生活』、『臨在信仰』である」(『小島伊助全集』6巻273頁)。この原則は、祈りにおいてそのままあてはまる。

一、一人で、退いて、静まって祈る

パリサイ人や律法学者など偽善者たちへは、人に見せようとして、会堂や大通りのつじに立つて祈ることを好む。そこには多くの人々が行き交っていたので、立って声を出して祈るとよく目立った。彼らは、人々から「何と信心深い方でしょう」と言われるのを期待していたのだ。しか

し、そのような称賛の言葉によって、人々はその報いを受けてしまっている。

しかし、祈りは人に聞かせるためにするのではない。人自身のへやにはいり、戸を閉じて、隠れた所においてになるあなたの父に祈りなさい。主イエスは教えられた。祈りは、人に見せて、良い評判を得るためではなく、神と親しく交わるためである。一人で、退いて、静まって祈るべきだ。それは、一人でないとプライヤーにかかわることまで話し合えないからである。また、静まらないと、深く掘り下げて取り扱われないからである。さらに、退いて時間をとらないと、複雑な問題を取り扱うことができないからである。だから、一人で、退いて、静まって祈るのだ。

二、祈りは回数によらない

人々が祈ることは、異教がしているように、同じ言葉を何度も繰り返して唱えることだ。人々は言葉が多ければ、聞きいれられるものと思っている。当時のユダヤ人は、申命記6・4～9等の言葉を何度も繰り返し唱えていた。たといそれが、どれほど重要な内容であったとしても、それが形式的習慣となっていたなら、本物の祈りではない。9節以降には、「主の祈り」が教えられているが、これさえも、ただ呪文のように唱えるだけなら、祈りとは言えない。

言葉数が多いと聞かれると考えるのは、祈りが行いになってしまつて、神が善い行いとひきかえにいうことを聞いて下さると思われている証拠だ。

研究資料

(足立)

マタイ6章は、イエスが語った山上の説教(5・7章)の一部である。山上の説教は主として弟子たちに語られたもので(5・1)、未信者が神の子となる条件ではない。むしろ恵みによって救われた者たちが天の父に似たものに変えられていく生き方の見本である。特に6章には、キリストの弟子が実践する敬虔について書かれている。1～4節は施しについて、5～15節は祈りに関して、16～18節は断食について言及している。施し、祈り、断食の三つは、当時のユダヤ人が重要視していた宗教的善行であった。

テキスト

5 偽善者たち 当時の律法学者やパリサイ人たちのことであるが、彼らはそのすることはすべて人に見せるためゆえ、偽善者(ヒュポクリテス)である(23・5)。会堂や大通りのつじに立つて祈る。当時敬虔なユダヤ人は、通常朝9時、昼0時、夕方3時に都エルサレムの神殿に向かって祈る習慣があった(使徒2・15、3・1、10・9、ダニエル6・10)。そこで律法学者やパリサイ人たちは、祈りの時間になると町の広場や街角にわざわざ出て、目に見える敬虔さを評価されたいためである。イエスはここで公の祈りを否定しているのではない。あくまで自分の敬虔さを人にわからせないようにすることを求めている。祈りは神に聞いてい

ただくもの。

6 人からの称賛を求める誘惑を避けるためには、人の目が届かない場所で祈ることが賢明。それは密室である。原語では2人称単数が強調され、「あなたは…、あなたの部屋に…、あなたの戸を…」あなたの父に…、あなたの父は…」となっている。このことから、祈りは神との個人的かつ人格的な関係(交わり)であることがわかる。自分のへやに入り、真の敬虔さではなく、敬虔さへの評価が気になる罪人の弱さを克服するためには、人が神と一対一になることが必要である。戸を開けて神と交わりを豊かに持つ人は、主と二人だけになり一切のものと隔たることが大切。隠れた所、隠れた事。二度同じ表現が繰り返されているのは、第三者が入ってこない状態を強調しているのである。親密な主との交わりは他者の介入を許さない。ここで日本の住宅事情を嘆く必要はない。密室の祈りの大切さをイエスが強調されたのは、あくまで人前で見せる祈りをするということである。天の父は見えておられ、確かに報いてくださる。イエス自身祈るために山に行き(14・23)、いつもオリブ山で祈っておられた(ルカ22・39～40)。

7 ここで批判されているのは偽善者ではなく、異邦人(異教徒)である。人々と祈る(パッタロケオー)とは、無意味なことを繰り返すこと。異教徒たちは、言葉数が多ければ祈りは聞かれると思い込んでいたようである。もちろん主イエスは天の父への時間をかけた祈りを否定されていない。イエス自身12弟子選択の為に徹夜の祈りを

私たちは神と何物も引き替えることはできない。全能の神が、私たちにしてもらわなければ困ることとは何一つない。何回祈ったからとか、これだけ熱心に祈ったから神が答えてくださったと考えるのは、自分の行いとひきかえに神を動かそうとする不適当な思いである。

三、全てをご存じの神への祈り

人あなたがたの父なる神は、求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じなのである。主は言われる。「それなら祈らなくてもいいのではないか」と言う人もいるだろう。昨年学んだピリ4・7には、人々をすれば、人知ではどうも測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いとを、キリスト・イエスにあって守る」と記されている。まず自分の心と意思が守られるために、何でもことごとく祈るべきなのだ。

しかし、祈りは、願いを申し上げることだけで終わってはならない。神と親しく交わり、そのみこころを知り、とりなす祈りに進んでいくのだ。主の祈りは、そのことを教えてくれる。

結論

祈りは、父なる神との親しい交わりである。ことごとく祈ることの次は、一人で、退いて、静まって祈ることに進む。そこで、神と親しく交わり、取り扱われ、その御心を知る人になっていく。そうして、さらに御心にそった祈りによって、人を執り成す人に成長していくのだ。あなたも、祈りの次のステップに進もう。

ささげられた(ルカ6・12)。ゲッセマネの園では同じ内容を3度繰り返して祈られた(マタイ26・44)。ここでイエスの主張は、祈りの量によって効果のあるなしが決まるのではないということ。

8 イエスは異教徒のまねをすると言われた。それは祈ることばや祈りの言葉数に思いを向けるのではなく、祈る対象がどのような方であるかを大切にすることである。祈りの対象とは父なる神。父なる神は私たちが祈る以前から、私たちの必要をすべてご存知であられる。不信仰者は、神が私たちの必要をご存知なら、祈る必要はないということかもしれない。しかしそれは逆で、私たちの必要をすべてご存知のお方だからこそ、その神に信頼して祈る中で、主が最善をなしてくださることを私たちは経験できるのである。

9 イエスは弟子たちに、どのように祈るべきか一つのモデルを提供した。父よ(パテル) イエスはまず呼びかけから教えている。父よという呼びかけはアラム語の「アバ」という幼児語で、全能なる神を「パパ」とか「お父ちゃん」と呼ぶことになる。このような子どもことばで聖なるお方に語りかけることはきわめてユニークである。われらの(私たちの) 主の祈りのすべては、「われらの(一人称複数)」である。信仰は確かに個人的な面が強いし密室の祈りも一人で祈ることで成り立つ。しかし一人で神の前に立つとき、私たちは一人でないことに気づかされる。自らが神の家族のメンバーであることを。天にいます 神は人間の知恵で量ることのできない絶対者である。

聖書 マタイ6・1～13
タイトル 神様と語り合う

中心聖句

自分のへやにはいり、戸を開けて、隠れた所において祈る。あなたに父に祈りなさい。マタイ6・6
目標 祈りは、一人で、退いて、静まって神様と語り合うことだと発見する。

導入

今日から12月です。もうすぐクリスマスですね。イエス様の誕生をお祝いするためには、まず、私たちの心を備えなければいけません。どうやって心を備えますか。お祈りしてですね。今日は、お祈りについて学びます。

(起) ストーリーを語る

皆さんはお祈りが得意ですか。イエス様の弟子たちはお祈りがうまくできなくて、どうしたらいいかイエス様に尋ねたのです。そこで、イエス様は、こういうふうにお祈りなさいと教えて下さいました。

その当時、パリサイ人と呼ばれたユダヤ教の人たちは、お祈りしてる姿を多くの人に見せて、熱心で立派な人だと思われようとしていました。ですから、人に見てもらうために、わざわざ会堂や大通りの辻に立って祈ることを好んでいました。イエス様は、このような人たちの見せかけだけの祈りを見破っておられました。そして、彼らは既

に人の評価という報いを受けているから、その祈りは報われないと、教えてくださったのです。お祈りは、人に見せるためにするのではないことがわかりますね。

そしてイエス様は、「あなたは祈る時、自分のへやにはいり、戸を開けて、隠れた所において祈る。あなたに父に祈りなさい。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いてくださるであらう」と教えられました。お祈りは、人に見せるためのものではなく、普段の生活から離れて、一人で、静かに、神様と語り合うことです。どんなに小さいことや人に言えないことでも、神様は聞いてくださいます。ですから、神様と一対一になつて、申し上げましょう。自分の言いたいことを言うとともに、時間をとって、冷静になつて神様のおっしゃることを聞きましょう。お祈りして、一人で、静かに、神様と語り合うことなのです。

そして、イエス様は「くどくどと祈るな」と教えられました。何度も同じ言葉を繰り返すことが祈りではありません。お経や呪文とちがうのです。言葉の数や祈りの回数が多かったら、祈りがきかれるものではありません。

そして、父なる神様は私たちが祈り求めるよりも先に、私たちの心の願いを知ってくださっていることを教えておられます。言いたいことが言葉にならないときもあります。しかし、神様は心の中までわかってくださっているのです。でもちよつと理屈っぽい人は、「神様が既に知っておられるのに、何でわざわざ祈るの」と言ってしまう。それは、あなたの心と願いが、キリスト・イエスにあって守られるためです。あなたの願いは全て神様が知

ってくださっていることをあなたが知り、「神様は私のことを全てご存じで、一番いいことをしてくださるから大丈夫だ」と確信するために祈るのです。

(承) 学ぶべき真理

人に良く思われるための祈りも、呪文のように同じ言葉を繰り返す祈りも、神様に喜ばれません。お祈りは、神様と話し合うことです。何でも願っているのですが、そこで終わってはいけません。神様のおっしゃることも聞きましょう。聖書を読み、その聖言を静かによく考えるなら、神様のおっしゃることがわかってくるはずです。

(転) 生活への適用

皆さんは、一方的に話すばかりの子と友だちでいられますか。無理ですね。相手の言うことも聞かないといけません。相手の言うことを良く聞くこと、納得いくまで話し合うこと、いろんなことを、何でも話せるのが、本当の仲よしでしょう。同じように、神様の言うことを良く聞き、納得いくまで話し合い、いろんなことを何でも話していること、神様と仲良しになれるのです。

結論

神様は天のお父さんですから、何でも話していいのです。でも、いつまでもこちらからお願するばかりで終わってはいけません。神様のおっしゃることもちゃんと聞きましょう。お祈りは、神様と私たちの会話です。普段の生活から離れて、一人で、静かに、神様と語りあいましょ。

ワーク A

●暗唱聖句 (12月1日～22日)

わたしは主のはしめです。お言葉とお祈りの身に成りますように。(ルカ1・38)

●導入のヒント

今日から、アドベントといって、クリスマスを楽しみに待つときが始まります。皆さんはどんな心で待ちますか。プレゼントを楽しみにしますか。クリスマス会が楽しみですか。それもいいですが、やっぱりイエス様が私たちの罪のために生まれてくださったことを感謝して祈って待ちましょう。もっとクリスマスがうれしくなりますよ。

●ワークについて

帯に色を塗って切り取ります。卵形には綿を貼りつけます。帯をつないで耳あてをつけ完成です。

ワーク B

●質問1 お話を思い出して答えましょう。

●質問2 子どもたちは普段の生活の中で祈っているでしょうか。神様は子どもたちそれぞれにどのように祈ることを求めておられるでしょうか。

●質問3 みことばによって、神様からの語りかけを聞けることに気づきましょう。

●讃美歌

「祈ってこらなわかるから」

●今日のお祈り 「神様、どんなことも神様にお話しし、神様からも聞くことができますように。」

ワーク C

●第2問 「一人で静まって祈る」ことの中身について考えます。選択肢以外にも、教師が思いつく具体例があれば、いっしょに尋ねてください。

●第3問は、子どもたちの実生活の中で、神様と何を話したり、お祈りしたり、質問したり、相談したりしたらよいのかを考えます。いろんな課題をもっている子どもたちもいるでしょうし、何を祈ったらよいのかわからないという子どもたちもいるでしょう。身近なところから、なんでも神様にお祈りできること、また今週、その祈りを一人静まって祈り続けることを指導してください。神様は、その祈りを必ず聞いてくださいます。

ワーク D

●「どちらがむずかしい」では、子どもは「人前で祈ることのほうがむずかしい」と言うかもしれません。人の評価があるところでは人間は結構がんばります。でもいざ一人で祈りはじめると、頭の中にいろんな考えが起ってきて、祈っているのかどうかわからなくなるという困難を経験したことはないでしょうか。

●「考えてみよう」④では、みことばが与えられたり、心に平安がくるなどについて、⑤では、自分の思い込みか否かをよく知るができるかなどを話し合います。周囲の人々が危険や不自然さを感じることは、思い込みを示すバロメーターかも知れません。●実話「コーナーでは、お祈りは、子どもでもできるものであり、祈りのベテランなどいないことや、神様の返事も聞けることなどを発見したいものです。」

中高校へのヒント

●考えてみよう

- 1 祈るときにはいけないこと、逆にいいこと、なさいと言われていることは何ですか。
- 2 偽善者たちが、「会堂や大通りのつじに立って祈る」のはなぜですか。
- 3 「自分のへやにはいり、戸を開けて」祈るのはどうしてですか。
- 4 「くどくどと祈る」とは、どういうことですか。そのように祈るなど言われたのはどうしてですか。

●自分にあてはめてみよう

- 1 あなたは、神とひとりのきりになって祈る時をもっていますか。
 - 2 あなたは、人前で祈るよう指名されたとき、どう思いますか。そう思うのはなぜですか。
 - 3 人前での祈りで、誇らしい記憶や苦しい記憶がありますか。どうしてそう感じたのでしょうか。
 - 4 あなたが祈ることができなくなるのは、どのような場合ですか。
- 話し合ってみよう
- 1 「父なる神は、求めない先から……ご存じ」なのに、どうして祈る必要があるのでしょうか。
 - 2 「主の祈り」の中に赦しの祈りがあり(12節、14～15節)にも赦しについての言及があるのはどうしてでしょうか。
 - 3 主イエスがどのように祈られたか、4つの福音書から見てください。

聖書 ルカ1・26～38
テーマ マリヤへの告知

序論

今週から3週間は、ルカ福音書から主イエスの誕生の記事を学ぶ。父親のヨセフに着目するマタイと対照的に、ルカは母親のマリヤに焦点をあてる。すでに神殿で祭司ザカリヤに現れてヨハネの誕生を知らせた御使いガブリエルは、今度は寒村ナザレのへ一処女を訪れ、「受胎告知」をするのだ。今日は、この告知の意義を見てゆこう。

一、救い主の誕生

ザカリヤの妻エリサベツが高齢で妊娠したことは奇跡的だが、それでも聖書中にはアブラハムの妻のサラなどの前例がある。しかしマリヤの場合は、ヨセフと婚姻していたがまだ結婚はしていなかった。処女が妊娠するとは、過去の歴史になかったことだ。マリヤが、へどうして、そんな事があり得ましようかと言ったのも当然である。

しかし、神の子であるお方が、人間として生まれなければ、人類の罪を贖う、贖いの供え物としてのしきも傷もない小羊は用意されない。神が人として生まれるこの奇跡が必要だったのだ。普通の妊娠なら、主イエスは人が神になった存在だと思われてしまう。しかし事実は、神が人になられたのだ。へ聖霊があなたに臨み、いと高き者の力があなたをおおうゆえに、この奇跡的な妊娠は実現した。だからこそ、その子はへ神の子と、となえられるのである。主イエスが救い主として

誕生するには、処女の妊娠が必要であった。

二、世界の王の誕生

御使いはマリヤに、へあなたはみごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい。…主なる神は彼に父ダビデの王座をお与えになり、彼はとこしえにヤコブの家を支配し、その支配は限りなく続くでしょうと告げた。イエスとはへブル語のヨシヤ（「主は救い」の意味）のギリシャ語形である。これは主イエスが、ヤコブの家を救う者となるというメシヤ告知である。しかし主イエスの使命は、さらにもっと大きなものであった。へダビデの王座より偉大な、父なる神の右に座し、世界をさばかれるのだ。このことは、へあなたの敵をあなたの足台とする時まで、わたしの右に座していなさい」という旧約預言によって示されている（ルカ20・43）。主イエスは世界を治める王である。天地万物の創造者は、被造物に責任をもち、被造物が悪ければ裁かなければならない。だから主イエスは世界を裁かれる。しかし同時に、創造者は創造した者が一人でも滅びることを望んではおられない。

主イエスは、世界の王として裁く方であるが、またそれゆえに救うこともできる。神が義と認めたい者をだれが罪に定めることができるか。全世界の王が罪を赦したのなら、その赦しは完全で、だれもその人を罪に定められないのだ。

三、信仰がもたらす誕生

マリヤは、御使いを見ては恐れ、告知を聞いて

研究資料

（足立）

テキスト

26 ハケ月目には、1・36にあるようにエリサベツの妊娠期間が6ヶ月目に入ったことへの言及。
27 この処女とあるが、ルカは後にもマリヤが処女であったことを強調している（1・34～35）。これはマタイ1・23と一致する。当時ユダヤ社会では、婚姻は法的に結婚と同じ拘束力を持っていた。そして約1年後、結婚式が執り行われ、夫婦としての生活が始められた。

28 おめでとつとは、字義的には「喜べ」となる。マリヤは神の恵みを受ける特別な対象であるが、彼女の敬虔さが主の恵みをもたらしたのではない。あくまでも主の選び。

29 マリヤの肉体的な困惑を示している。彼女は、み使いの突然の挨拶を思いめぐらしていた。「思いめぐらす（ティエロギセト）」という動詞は未完形時制であるので、マリヤが熟考し続けた事を意味している。この点は祭司ザカリヤとは対照的である（1・12）。

30 恐れるなどは、聖書全体に一貫して出てくる主なる神からの恵みのことばである（ルカ1・13、2・10、8・50、創世記15・1、士師6・23、ダニエル10・12、19等）。マリヤが神から恵みをいただいたのは、あくまで主の恵み深い選びによる。決してマリヤの敬虔さが神の目にとまったのではない。強調点は神の主権であり、人間の受容性には

あるのではない。

31 その子をイエスと名づけなさい イエス（ヨシヤ）という名は旧約時代からあり、1世紀に至っても人気ある名として受け継がれていた。マタイ1・21は、この名がもつ意味を説明している。

32 ここでルカはイエスが「誰」であるか、説明を始める。彼は大きな者となりとは、バプテスマのヨハネにも当てはめられたことばである（1・15）。イエスの場合は質的に異なる。いと高き者の子とは、神の御子であることを意味する（参照ルカ1・35、76、6・35、8・28、使徒7・48、16・17、マルコ5・7、へブル7・1）。ダビデの王座への言及は、サムエル下7・12～13を意識し、イスラエルのメシヤとしてのイエスの役割が考慮されている（参照ルカ1・69、2・4、11、使徒2・30）。

33 イエスはイスラエルの王（参照ルカ19・14、27、38、23・2、3、37、38、使徒17・7）。ヤコブの家とは、イスラエルを表現する伝統的な用語（出エジプト19・3、イザヤ2・5～6、8・17、48・1）。イエスは永遠を支配する究極の王でありメシヤ（イザヤ9・6、ダニエル7・13～14）。

34 マリヤは、性経験なしでどのようにしてその子が誕生するのかわかっている。私には夫がありませんのとは、直訳すると「わたしは男の人を知りませんの」となる。知る（ギノウスコウ）という動詞は、性的交渉のしるしとして使われている（マタイ1・25）。マリヤはそれまで、誰とも一度も性交渉を持ったことがないゆえに、妊娠を

も信じられないと言いつつ、ありふれた娘だった。しかし、御使いが親族エリサベツの例をもちだして、へ神には、なんでもできないことはありません」と語りかけたとき、彼女はへわたしは主のはしめです。お言葉どおりこの身に成りますように」と答えた。この信仰こそ、神が求めておられたものである。

このマリヤの態度を、彼女よりずっと成熟しているはずの祭司ザカリヤと比べてみよう。ザカリヤは、長く望んで祈っていたことが実現するとの告知だったが、信じられないでいた。マリヤは、これ以後、婚約者のヨセフをはじめとして、多くの人々からの誤解や非難が来ることを覚悟しながら、その告知を受け入れた。彼女の決断に、いかに信仰が必要だったかが思いやられる。

マリヤは、自分がへ主のはしめ（直訳すると「主の奴隷女」）であることを認め、主人である神の御旨に自分の身を委ねた。これこそ、私たちが学ぶべき「信仰」である。主イエスの誕生は、へお言葉どおりこの身に成りますように」という信仰がもたらしたのだ。

結論

神は、全人類を罪から救うために、御子イエスをこの地上に誕生させてくださった。神が人にならなければ、傷もしきもない贖いの供え物はないえなかったのだ。また、全世界を治め裁く方だから、人類を救うこともできる。しかしそのためには、マリヤの信仰がどうしても必要だった。神は、今もマリヤのような信仰を求めておられる。

期待できないと考えている。

35 聖霊があなたに臨み イエスは聖霊なる神の働きによって処女マリヤに宿る（参照ルカ1・17、4・14、24・49、使徒1・8、10・38）。ルカは、1・2章で聖霊についてしばしば言及する（1・15、41、67、80、2・25、26、27）。おおう（エビスキアソー）ということばは、神の聖なる力強い臨在の場面へと私たちを導く。それは神の栄光が満ちたとき、幕屋をおおった雲を表現するかのようである（出エジプト40・35、参照詩篇91・4）。このことばは山上の変貌において雲がおおった表現に用いられている（マタイ17・5、マルコ9・7、ルカ9・34）。その子どもいのは神の力によって生じ、その力は聖霊からのものである。したがって彼は、聖なるものと呼ばれる。

36 ガブリエルはエリサベツの実例を提示しながら、1・34のマリヤのことばに答えている。

37 神には、なんでもできないことはありません（参照創世記18・14、マタイ19・26、ヨブ42・2、ゼカリヤ8・6）。

38 わたしは主のはしめです。お言葉どおりこの身に成りますように 神のみこころゆえに信頼と服従をあらわすマリヤの告白である。そしてこれは、この一件に関するだけでなく、自分の生涯を主の奴隷女として位置づける献身の応答でもある（参照11・27～28）。御使は彼女から離れて行ったとあるが、これは新しい出発に伴う説明を結論づけている（参照1・23、2・20、5・25、8・39、24・12）。

聖書 ルカ1・39〜56
テーマ マリアの賛歌

序論

受胎告知の数日後、マリヤは早速エリサベツに会いに行った。エリサベツは、マリヤのあいさつを聞いたとき、その子が胎内でおどったことを感じて、すべてを理解した。彼女は聖霊に満たされて、「主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう」とマリヤを祝福する。彼女が言うとおり、マリヤは信じきった。だからこそ、その後様々な困難があることを予測しながらも、かえって神を賛美することができたのだ。そしてマリヤは、ラテン語でマグニフィカート（あがめるの意）と呼ばれる賛美で、主にある幸いを歌っている。今日は、この賛歌から、主にある幸いとは何かを学ぶ。

一、主をかしこむ者があわれまれる幸い
マリヤはまず、自分のようなへ卑しい女をさへ心にかけて、下さったから、へ主をあがめ、へ神をたたえます。と歌う。そして主は、へ心の思いのおこり高ぶる者を追い散らし、反対に、へ主をかしこみ恐れる者へをあわれまれる。「かしこみ恐れる」とは、「畏敬」と訳したい。これは、神を尊敬し信頼することだ。心の思いのおこり高ぶる者は神の前では退けられ、神を尊敬し信頼する者は神のあわれみを受けるのである。

主イエスの降誕は、神を尊敬し信じさせるためであった。彼を受け入れた者、すなわちその名を

信じた者が、永遠のいのちを持つためである。主にある幸いは、主をかしこみ恐れる者があわれまれることだ。高慢な人は神のいうことを聞かず自分の思ったようにする。そして、せっかく主が祝福しようとしてもそれを受け取らない。その結果、祝福を失い、導きを失い、ついには永遠の命まで失う。反対に、主を恐れかしこむ人は、主の御心に従う。その結果、神様の祝福を受け、導きを受け、ついに永遠の命を受けるのだ。

二、卑しい者が引き上げられる幸い

また主はへ権力ある者を王座から引きおろし、反対にへ卑しい者を引き上げられる。当時繁栄していたローマ帝国、ヘロデ王家、祭司長、律法学者は、イエスを十字架に追いやった。しかし最後には、イスラエルもローマもその権力者たちもみな崩壊してしまった。一方、当時卑しめられていた異邦人、収税人、遊女、病人、悪霊につかれた人などは、主イエスを受け入れ、主に受け入れられた。そして彼らの病は癒され、悪霊は追い出され、罪は赦され、そして彼らは神の子とされ、神の国に引き上げられたのである。

主にある幸いは、卑しい者が引き上げられることだ。権勢をふるい、民を支配する者は、主を退けようとする。自分の立場が危ぶまれるからである。しかし、卑しい者は主を受け入れる。真の主人を求めているからだ。そうして、主によって天にまで引き上げられる。

三、飢えている者が飽かせられる幸い
主はへ富んでいる者を空腹のまま帰らせ、反

対にへ飢えている者を良いもので飽かせられる。かつて主イエスは、永遠のいのちを求めてきた富める青年に、「あなたの持ち物をみんな売り払って貧しい人に施し、わたしについてきなさい」と命じられた。彼はそれができず、富を神としていることが露呈された。富にとらわれている人は、主から何も得ることができない。それは、富を神の位置に置いてしまつて、神を第一としないからだ。その結果、神の祝福を受け取れない。しかし主は、飢え渴いている人には、おしめすを与えられる。10人のライ病人が癒しを求めたら、10人とも癒された。たった一人しか帰ってこないとしても。

主にある幸いは、飢えている者を良いもので飽かせてくださる幸いだ。主を求めて飢え渴いている人は、神を第一としてその恵みをしっかりと受け取ることができる。

結論

マリヤの賛美は、実によく主イエスの降誕の意義を表している。彼女は、自分の胎に宿っている子が、イスラエルの救い主であることを知って、神が、自分を低くする者に大きな事をなしてくださり、神の働きのために用いてくださることを確信したのだ。マリヤは、自分の身におこった出来事を通して、この真理を悟ることができた。私たちも、このクリスマスに、主にある幸いをおぼえたい。主をかしこみ恐れる者があわれまれ、卑しい者が引き上げられ、飢えている者が良いもので飽かせられるために、主は地上に來られたのだ。

研究資料

(足立)

テキスト

39〜40 御使いから親族エリサベツの状況(1・36)を聞かされたマリヤは、すかさずユダの町に向かう。マリヤは天来のメッセジに積極的に応答する信仰者のモデルである。マリヤはザカリヤを訪ねてエリサベツに挨拶した。

41 エリサベツの胎内の子(バプテスマのヨハネ)は、イエスの先駆者であり、道備えとなる(1・17、76)。その子がマリヤ(イエスの母)の挨拶を聞いたとき、母の胎内でおどった。おどりによって、救い主の存在を告げ知らせたのであろう。

聖霊に満たされ ザカリヤへの約束がすでに実現している(1・15、参照1・67、2・27)。

42 声高く叫んで この表現は神の豊かな導きを述べる際にしばしば使われる(参照マルコ9・24、ヨハネ1・15、7・28、37、ローマ8・15、9・27、ガラテヤ4・6)。あなたは女の中で祝福されたかた これは最高の祝福を表すヘブル的表現比較(士師5・24)。マリヤがここで祝福されたのは彼女の信仰のゆえでなく、偉大な子を宿すことに全面的に依存したゆえ。あなたの胎の実 この時点ですでにマリヤが懐妊している事がわかる。

43 主の母上 直訳すると、わたしの主の母上。エリサベツは、マリヤよりもマリヤの子どもに焦点を当てている。主とは明らかにキリスト論的称号であり、イエスへの言及(1・76、2・11、3・

4、6・5、7・13、19、10・1、39、41、11・39、12・42、13・15、17・5〜6、18・6、19・8、31、34、20・42〜44、22・61「2回」、24・3、34)。

44 子どもが胎内で喜びおどりました これは1・14の部分的成就である。後にバプテスマのヨハネは、イエスの道備えに役立つ役割を喜びことになる(ヨハネ3・29)。

45 エリサベツはマリヤの信仰に関して究極の祝福をおくっている。主のお語りになったことが必ず成就すると信じた女 マリヤは一信仰者の見本である。一方、ザカリヤは祭司であるにもかかわらず、主のみことばへの信頼の欠如を叱責された(1・20)。神のことばへの信頼と服従というテーマが、他の箇所にも見受けられる(8・21、11・27〜28)。

46 ここからマリヤの賛歌(マグニフィカート)と呼ばれる主への賛美がさげられる。この賛歌は3つの部分に分けることができる(①マリヤのための神のみわざを賛美する1・46〜49、②すべての人への神の働きを賛美する1・50〜53、③イスラエルの民への神の働きを賛美する1・54〜55)。

47 わたしの魂(46節)とわたしの霊という表現に違いを認める必要はない。46節後半と47節は詩文であり、並行法が認められるから。つまり2行で一つのことを言おうとしている。マリヤは主自身を賛美している。救い主なる神 マリヤは自らの必要を認めている。すなわち彼女自身も他の人々と同様に罪人であるということ。

48 この卑しい女を 直訳すると、彼のはしための卑しさとなる。卑しさ(タペイノシス)ということばは、社会的には身分の低さを、精神的には謙遜さを意味する。心にかける(エペソ1・6)とは、神の慈愛の配慮を示している。低き者、部外者、収税人などを顧みる神は、ルカの神学的強調点でもある。マリヤは主に選ばれた幸いを深く感謝する。今からのち 神のご計画において重要な変化が起こるときに用いられるルカの表現(5・10、12・52、22・18、69、使徒18・6)。

49 力あるかた 全能なる神のこと。わたしに大きな事をしてくださった マリヤが救い主の母になるということ。その名はきよく 神のきよさとは、ここでは単に主の道徳的完全さを言うのではなく、貧しく低いものに契約的約束を成就する主の義の行為を意識させている(詩篇99・3、111・9、レビ記11・44〜45、イザヤ57・15)。

50 そのあわれみは マリヤは、主のきよさをほめたたえつつ、主のあわれみを思い巡らす。あわれみということばが1章に集中している(1・50、54、55、72、78)。主のあわれみ(参照詩篇103・2〜6、8〜11、13、特に17)は、代々限りなくそがれ、主をかしこみ恐れる者に及ぶ(申命記7・9、詩篇25・12、103・17、イザヤ55・3、6、57・15)。

51〜53 卑しい者(52)、飢えている者(53)が、権力ある者(52)、富んでいる者(53)と対比されている。これは、主をかしこみ恐れる者(50)と心の思いの高ぶる者(51)に对照している。

54〜55 過去へのあわれみ、将来への約束の成就。

聖書 ルカ1・39・56

タイトル マリヤの賛美

中心聖句 わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主なる神をたたえます。

ルカ1・46、47

目標 神様を尊敬する人、謙遜に求める人が、神様の祝福を受け取れることを発見する。

導入

アドベントの3週目に入りました。クリスマスが待ちどおしいですね。イエス様のお母さんのマリヤは、どんな気持ちで赤ちゃんの誕生を迎えようとしていたのでしょうか。不安でしょうか。喜びでしょうか。皆さんもうれしいとき、思わず歌をうたった経験がありませんか。今日は、マリヤの歌った賛美から、イエス様は何のために地上に誕生されたかを学びます。

(起) ストーリーを語る

マリヤは、イエス様を宿していることが分かって、親戚のエリサベツのところへ出かけました。年寄りのエリサベツも、神様のお働きで赤ちゃんを宿していることを、御使いが告げたからです。エリサベツがマリヤを出迎えたとき、救い主を宿したマリヤがそばにきたので、エリサベツの胎内の子どもが踊って喜びました。エリサベツは聖霊に満たされて、「主のお語りになったことが必ず成就すると信じた女は、なんとさいわいなことでは

よう」と呼びました。

これを聞いたマリヤは、神様に向かって歌い始めました。それはとても感謝に満ちた賛美です。

彼女は、自分が偉いからイエス様のお母さんになるんだとは思ってはいません。まず、「この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました」と、感謝をささげています。

次に「そのあわれみは、代々限りなく、主をかしこみ恐れる者に及びます」と、マリヤは歌いました。「かしこみ恐れる」とは、神様を尊敬することです。神様は、神様を尊敬する人をあわれんで下さるんだって歌っているのです。皆さんは神様を尊敬していますか。尊敬している人の教えてくださることは聞けますね。神様を尊敬している人は、神様の教えに耳を傾けて神様に従いますから、神様のあわれみをちゃんと受け取れるのです。そして、神様の最大のあわれみは、イエス様を人類に与えてくださったことです。

さらにマリヤは、「権力あるものを王座から引きおろし、卑しい者を引き上げ、飢えている者を良いもので飽かせ、富んでいる者を空腹のまま帰らせなさいます」と歌います。マリヤは、神様は、卑しい者、飢えている者を助けてくださると歌っているのです。そう、イエス様は、総督ピラト、ヘロデ王、祭司長、律法学者から迫害され十字架につけられましたね。しかし、彼らは最後に滅びてしまふのです。反対にイエス様を受け入れたのは、当時のけものにされていた罪人、異邦人、取税人、遊女、病人、悪霊につかれた人たちでした。彼らは、イエス様に受け入れられ、罪を赦され、病を癒され、悪霊を追い出してもらい、神の子と

るように、神様を敬い、信じ、賛美する心を与えてください。」

ワーク A

●導入のヒント

神様を信じて従ったら、どんな心になると思いますか。そう。嬉しくなります。従って良かった、信じて良かったって、必ず喜びで一杯になります。神様が与えてくださる喜びです。マリヤさんは、信じて従う者に神様がどんなにすばらしいことをしてくださるか知ったんですよ。

●ワークについて

みことばの帯を切りぬいて、紙コップに貼りまします。あいているところには、色を塗ったりシールを貼ったりしてください。底にひもを通して、クリスマスツリーなどに飾りましょう。

ワーク B

●質問1 マリヤの賛美を、あがめる→尊敬する、たたえる→賛美すると言葉を変えています。

●質問2 神様を敬って自らは謙り、神様を心から信じて賛美するマリヤからイエス様はお生まれになりました。イエス様はマリヤのような人の中に住んでくださいます。

●質問3 神様に喜ばれない心があるなら、悔い改め、イエス様が来てくださった日、クリスマスを迎える心の準備をしましょう。

●讃美歌 「すばらしい神様」

○プレイズワールド23番

●今日のお祈り 「神様、イエス様をお迎えでき

ワーク C

●第1問 聖言を書きます。魂で主をあがめ、霊で神をたたえることのすばらしさと恵みを、じっくり味わってください。

●第3問 絵の中には、いろんな状態の子どもたちが描かれています。神様は、みんなに祝福を与えたいと思っておられるのですが、その祝福を実際に受け取るためには、謙遜、求め、神様を敬う事などが必要です。自分には神様の助けなんかいらないと思っている子どもたちがいたら、その理由を尋ね、「神様はそんなあなたのことを愛して、十字架の愛を示してくださいただよ」と伝えましょう。

ワーク D

●先週に引き続き、クリスマスウォーミングアップ2のクイズをします。さらに、分からないところに分かるクイズです。

●最後の7番の質問は、先週に引き続き聖書箇所からのメッセージについての質問です。解答は、1↓b、2↓c、3↓e、4↓f、5↓c、6↓c。

されたのです。イエス様が来られたのは、彼らを招いて、救うためでした。

(承) 学ぶべき真理

マリヤの賛美は、イエス様の誕生の意味を良く表しています。イエス様は、全ての人を救うために地上に来てくださいました。しかしその救いを受け取ることが出来るのは、神様を尊敬する人、心のへりくだった人、飢えかわいて熱心に求める人なのです。いくら神様が人類をあわれみ、一番良いことをしてあげようとしても、神様を尊敬せず、言うことを聞かない人は、せっかくの祝福を受け取れません。また、偉そうに「自分は救ってもらわなければならない」と言って、求めない人も、せっかくの神様の祝福を受け取れないのです。

(転) 生活への適用

自分を振り返ってみてください。神様のおっしゃることをちゃんと聞いていますか。したいと思ったら何でもしてしまうのでなく、まず神様にお祈りして、神様がこのことを喜ばれるかどうかを謙遜に聞きましょう。

結論

イエス様がこの世に誕生して下さったのは、マリヤが賛美したように、神様を尊敬する心のへりくだった人が、神様の祝福をしっかりと受け取るようにするためです。私たちも、神様を敬い、へりくだって、来週のクリスマスにふさわしい心の備えをしましょう。

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 マリヤがこのような賛美を歌ったのはどうしてでしょうか。

2 マリヤが主の母として特別に選ばれたのはどうしてでしょうか。マリヤはそのことをどう思っていましたか。

3 マリヤの賛美の中で、主はどのようなお方であると言われていますか。主がそのようなくださった実例を幾つか挙げてみましょう。

●自分にあてはめてみよう

1 あなたは、「主のお語りになったことが必ず成就すると信じ」、聖言に従っていますか。

2 あなたが教会に導かれ、主を信じるようになったのはどうしてでしょうか(1コリント1・27・28他参照)。あなたはそのことをどう思っていますか。

3 あなたは「主をかしこみ恐れる者」ですか。それとも「おごり高ぶる者」ですか。

●話し合ってみよう

1 今まで主は私たちのことをどんなに心にかけ、どんなに大きな事をして下さったのでしょうか。この主の恵みに対して、私たちはどうお感えすべきでしょうか。

2 主をあがめるとは、具体的にどうするのでしょうか(ピリピ1・20他参照)。

3 主をほめたたえずにはいられなかった体験があれば、分かち合いましょう。

聖書 ルカ2・1～20
テーマ 羊飼いの訪問

序論

誕生直後の主イエスを訪問したのは、羊飼いたちだ。博士たちが会ったのは、主がかなり成長した後だった。神の御子の誕生を祝いに来たのは、この貧しい羊飼いたちだけだった。主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられた。それは、あなたがたが、彼の貧しさによって富む者になるためである。聖書は教えている(Ⅱコリント8・9)。なぜ、私たちが富むために、主は貧しくなられたのだろうか。クリスマスの出来事から、このことを学ぶ。

一、赤ちゃんとして生まれる

主イエスは、御使いのように大人の姿で登場することも、天から下ってくるところを大々的に全世界に見せることもできたであろうに、赤ちゃんとして誕生された。そこには、何の華々しいところも、何の功績もなかった。

特に、赤ちゃんには、人のために語ること、何かしてあげることもできない。赤ちゃんにできることは、両親をはじめ人々に受け入れてもらうことだけだ。主が赤ちゃんとして誕生されたことからわかるのは、全世界の主である方が、まず人々に受け入れられようとされたことだ。私たちも主を受け入れることから、神との関係が始まる。主はまさに、まず私たちに受け入れられるために、この世にいられたのである。

二、家畜小屋で生まれる

主イエスは、若く貧しい夫婦の間に、旅の途中、しかも宿ではなく、粗末な家畜小屋で誕生された。また、飼いやけがゆりかごだった。全世界の王なのだから、豪華な王宮で、貴族たちに見守られて誕生してもおかしくなかったはずである。しかし、主はそれ以上の貧しさがなく、どこで誕生された。これを見ると、どんな貧しい人も主を受け入れることができることがわかる。主は豊かなところにしか来られないのではない。どんな貧しい者のところにも来てくださるのだ。

また、家畜小屋は暗く、汚いところだった。主はきれいな明るいところにしか来てくださらないのではなく、暗く汚れたところに来てくださるのだ。暗いところに光を照らして明るくし、汚れたところではその汚れを取り除いて、聖くしてくださるのだ。

また、家畜小屋は人の住むところではなかった。私たち人間の社会は、神のかたちを失い、いがみ合い、殺し合うもののような現状である。主はそのようなところに来てくださり、そこに平和を与え、神のかたちをとりもどさせてくださる。

三、羊飼いに祝われる

かたくなな心をもつヘロデや祭司長、律法学者は、救い主の降誕を知りながら祝わなかった。宿屋の主人たちも、救い主がそこで生まれるという光栄を断った。彼らは主の降誕を拒絶したのだ。ヘロデは自分の地位を脅かされることを恐れ、主を殺そうとつけねらう。祭司長たちは主の降誕の

地を知りながら、ヘロデの顔色をうかがって出向かない。宿屋の主人は仕事の忙しさにかまけて主の降誕どころでない。かたくなな心とは、何かにとらわれている心だ。権力に、地位に、仕事にとらわれている人々は、主を受け入れない。

主の降誕を祝ったのは、ヨセフとマリヤと羊飼いと東方の博士だった。マリヤは、人お言葉どおりこの身に成りますようにと、自らを委ねた。ヨセフは、夢で導かれ、それに従った。羊飼いは、御使いに聞き、信じ、捜してきた。博士も、不思議な星に導かれて来た。皆、かたくなではなく、心が柔らかで、自分の思いや考えを超えた神の導きを受け入れる人たちだった。

何かに固執してかたくなな心の人、主を受け入れない。神の不思議な導きに心え、柔らかい心の人が、主を受け入れるのである。

結論

なぜ主は貧しくなられたのか。それは、まず救い主が人類に受け入れられるためであった。さらに、私たちのような貧しい、後者暗い、汚れた、神のかたちを失った者でも主を受け入れることができ、豊かで、明るく、聖い神のかたちをとりもどすためであった。私たちは、心をかたくなにしないで、自分の心がこのような状態であることを認めて、ありのままに主を迎えよう。するとそこから始まって、主が救ってくださる。主の降誕を祝うこのとき、あなたも心をかたくなにしないで、神の不思議な導きに心えよう。

研究資料

(足立)

喜びのしるしと約束された救い主の到着の宣言が、この記述を支配している。

テキスト

8 救い主誕生のニュースは、その地の宗教的、社会的リーダーたちではなく、社会的には卑しとされてきた羊飼いたちに真先に届けられた。1・52にあるように、低いものに伝達された(参照7・22)。当時一般的に、羊飼いたちは不誠実な者と見なされ、汚れているというレッテルを貼られていた。まさに彼らは社会の部外者であった。野宿しながら羊の群れの番をしていたとあるが、彼らは通常3月から11月までの期間、群れとともに野原に出ている。

9 すでに1・13～20、28～37に登場したように、に、主の御使いが現われた。天からの声明は御使いの到来とともに始まっている。この声明の構造は、①御使いの出現(9)、②恐れによる応答(9)、③保証の言葉(10)、④聖なるメッセージ(11)、⑤しるしの提供(12)となっている。欠けているのは、しるしへの異議と要求である(参照1・13～20)。メッセンジャーは羊飼いたちの回りに主の栄光をもたらした。栄光(ドクサ)は、ヘブル語カボッドに關係している。それは神の臨在の顕現であり、威厳ある主の現われそのものである(出エジプト16・7、10、24・17、40・34、詩篇63・2、イザヤ40・5、エゼキエル1章等)。

この栄光はイエス自身とも深く結びついている(ルカ9・30～31、ヨハネ1・14、使徒7・55)。

10 恐れるな 聖書に出てくる標準的な励ましの言葉(ルカ1・13、30、5・10、8・50、創世記15・1、士師6・23、ダニエル10・12、19)。

喜びを伝える(ユアンゲリソマイ)とは、グッド・ニュースを公に宣言するという意味。この動詞はルカ福音書に集中している(1・19、2・10、3・18、4・18、43、7・22、8・1、9・6、16・16、20・1)。この知らせに應答することにより、大きな喜びが与えられる。そしてこの喜びは、すべての民(この民全体のため)に提供される。

11 きょう イエス・キリストの救いの時代が始まることを表現していることばである(参照ルカ4・21、5・26、13・32～33、19・9、23・43)。ダビデの時にあるが、これはマリヤの子どもが救い主としての役割を果たすことに注意を向けていることばである(参照1・27)。救い主としてのイエスの役割は、「主」と「キリスト」という称号によって適格にあらわされている。これらの称号の結びつきはユニークなものである。救い主、キリスト、そして主という結びつきは、他の新約聖書の本文には登場しない。救い主(ソーター)とは、古代ギリシャ、ローマ時代にしばしば神々や王たち、皇帝、哲学者、医者などに用いられた称号である。しかし御使いは、イエスこそ真の救い主であると告げている。キリスト(クリストス)は、ヘブル語マシーアハに由来し、油注がれた者を意味する。主(キュリオス)は、ヘブル語の

ヤーウエを指すことばであるが、絶対的な主権と神性の關係を意味する。ここで御使いは、みどりごを救い主、キリスト、主という三重の称号で呼び、その至高性と神性を宣言している。

12 救い主誕生のしるしとは、飼葉おけの中に寝かしてある赤子である。飼葉おけという極度に小さく、低い所に救い主は置かれている。これは救い主なる神が地上の最も低いところに下って来られたという大いなる謙遜を示すと同時に、羊飼いたちにとっては自分たちとの接点ともなる。

13 するとたちまち、おびただしい天の軍勢が現れ(比較、列王上22・19、エゼキヤ19・3、ダニエル8・10、歴代下33・3、5、参照、黙示録19・1～2、6～8、ネヘミヤ9・6)。神をさんびして 信仰者だけでなく全被造物による適切な応答(ルカ2・20、19・37、24・53、使徒2・47、3・8～9。参照、詩篇148・1～4)。

14 いと高きところでは、神に栄光があるようにこれは天国への言及であって(参照19・38)、上層階級を指すのではない。イエスの栄光に關しては以下の箇所を参照(ルカ9・26、32、21・27、24・26)。平和とは、ここでは救い主なるキリストがもたらす最高の祝福について言及しており、本質的には救いに関する同義語である(参照使徒10・36)。したがって平和とは、神と人間との間の平和を意味し、人間の罪が原因となる仲たがいを神が癒すことである。み心にかたう人々となるが、これも誰が神を選ぶかということではなく、神が選んだ人ということに強調点がある。

聖書 ルカ2・1、20
タイトル クリスマスおめでとうノ
中心聖句 そして急いで行って、マリヤとヨセフ、また飼葉おけに寝かしてある幼な子を捜しあてた。
ルカ2・16
目標 救い主が、貧しい赤子になって誕生された意義を知り、素直に主を心に迎えるべきことを発見する。

導入
クリスマスおめでとうございます。今日は、私たちのために、人となって、イエス様が地上にお生まれ下さった日のことをお話ししましょう。

(起) ストーリーを語る
マリヤとヨセフに、神のひとり子の誕生が告げられたころ、皇帝アウグストは、ローマ帝国中に人口調査の命令を下しました。ヨセフとマリヤの二人も、登録のためにユダヤのベツレヘムという町まで行かなければなりません。マリヤはもうお腹が大きくなっていましたから、その旅行もたいへんだったことでしょう。ところがベツレヘムの町についてみると、ユダヤの国中から、この町出身の人が集まっていて、泊まる場所がありません。二人は宿屋の中には泊まるのができず、なんと家畜小屋に泊まらなければならなくなってしまったのです。
その夜のことで、マリヤは、家畜小屋で赤

やんのイエス様を産みました。そこにはベッドもゆりかごもありませんから、家畜に餌をやる飼葉おけをゆりかごがわりにして、赤ちゃんのイエス様を寝かせました。
その日、ベツレヘムの町の近くに、野宿しながら夜とおし羊の番をしている羊飼いたちがいました。そこへ御使いが現れ、主の栄光によって真つ暗な夜が明るくなったのです。御使いは、「恐れる必要はありません。すばらしいお知らせがあります」と言い、さらに「きょうダビデの町に、あなたがたのために救い主がお生れになりました。赤ちゃんが、布にくるまって、飼葉おけに寝かされています。それをするしとして、救い主を見つけてゆきなさい」と言いました。彼らはすぐさま、ベツレヘムに向かいました。そして、マリヤとヨセフとイエス様を見つけたし、御使いから教えられて、ここに来たことをみんなに話しました。そうして、御使いの教えたとおりのことで、神様を賛美しながら帰って行ったのです。

(承) 学ぶべき真理
皆さんの周りには、生まれたばかりの赤ちゃんがいますか。赤ちゃんは自分からは何もできません。できるのはただ泣くことだけです。赤ちゃんは、受け入れてもらうことしかできませんね。イエス様は、神様として堂々と地上に来ることもできず、なにも、どうして赤ちゃんの姿で来られたのでしょうか。それは、イエス様は私たちに受け入れられるため来られたからです。
イエス様は家畜小屋で生まれました。イエス様のゆりかごは、馬や牛がえさを食べるための飼

葉おけでした。家畜小屋は薄暗く汚いところですよ。良い匂いはいません。しかし、イエス様は、そんな場所でお生まれになりました。なぜなら、イエス様は、暗い場所を明るくし、汚いところをきれいにするために来られたからです。
イエス様は、私たちを救うために赤ちゃんの姿で来られました。威張った姿でないのは、だれにでも受け入れられるためです。罪のために心が暗くなり、争いやねたみの絶えない私たちのために、真の光として来てくださったのです。

(転) 生活への適用

最初にイエス様のご誕生を祝いに来たのは、名も知らない羊飼いたちでした。羊飼いたちは御使いの知らせを聞いてかけつけました。イエス様にお会いできたのは、神様の不思議な導きを素直に信じた人たちだけでした。
自分の思いや考えを超えた神様の働きを信じる柔らかい心の人、今もイエス様にお会いすることが出来ます。クリスマスの飾りつけも、ケーキも、プレゼントも楽しいです。しかし、クリスマスの本当の喜びは、私たちのためにへりくだって人となってくださったイエス様を、私たち一人一人の心にお迎えするときに生まれます。

結論

イエス様は今も生きておられ、どんな人の心にも住んでくださいます。そして、暗くさびしい心を明るく照らしてください。皆さんも、素直な心でイエス様を救い主として、今日心にお迎えしましょう。それが本当のクリスマスです。

中高校へのヒント

- 考えてみよう
- 1 主イエスが赤ちゃんとして家畜小屋の中でお生まれになったことは、何を意味しているでしょうか。
- 2 客間には主イエスのいる余地がありませんでしたが、その後の生涯はどうでしたか。
- 3 主イエスの誕生が、真つ先に羊飼いたちに知らされたことは、何を意味しているでしょうか。
- 4 羊飼いたちはどのようにして主イエスに出会いましたか。東方の博士たちはどうでしたか。
- 自分にあてはめてみよう
- 1 もしあなたが羊飼いの立場であったならば、御使いの告知を聞いてどうしていたでしょうか。
- 2 あなたは毎週どのような思いで主を礼拝していますか。
- 3 あなたは主イエスを心の中にお迎えしていますか。締め出したままではありませんか。
- 話し合ってみよう
- 1 「幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてある」のが、どうして大きな喜びの「しるし」と言えるのでしょうか。
- 2 私たちは毎週どのような思いで主を礼拝したらよいでしょうか。
- 3 主はどのように貧しくなれましたか(ピリピ2・6〜8他参照)。
- 4 主イエスを心の中にお迎えした体験があれば、分かち合いましょう。

ワーク A

●導入のヒント
イエス様のお誕生を最初に知ったのは、王様でもお金持ちでもなく、汚く貧しい羊飼いでした。皆さんは、自分は悪いことなんかしてないよって言えますか。言えませんか。罪で一杯です。でもイエス様はのために生まれてくださいました。貧しく汚い私たちの罪を赦すためです。嬉しいですね。イエス様を信じて罪を赦して頂いて、神様に喜ばれる子どもになりましょう。
●ワークについて
絵に色を塗って切り取り、トイレットペーパーの芯かラップの芯を切ったものにまきつけます。角笛にして、「イエス様が生まれたよ」と、羊飼いのように言ってみましょう。

ワーク B

●質問1 お話を思い出して答えましょう。
●質問2 羊飼いは、み使いの言葉が真実だと信じて出かけていったので、イエス様を捜し当て、礼拝することができました。
●質問3 私たちも神様の導きを素直に信じ、イエス様を求めるなら、イエス様に出会い、心を喜びで満たしていただけます。
●讃美歌 「クリスマスおめでとう」
(日本ホーリネス教団子どもさんびか 44番)
●今日のお祈り 「神様、救い主イエス様を送って下さってありがとうございます。イエス様に出

ワーク C

●第1問 イエス様は、権力ある王として宮殿の中ではなく、また腕力ある筋肉マンとしてきれいな病院にでもなく、つましい家畜小屋の飼葉おけの中に赤ちゃんとしてお生まれくださいました。
●第2問 家畜小屋の中で赤ちゃんの状態でお生まれくださった意味を質問しています。
●第3問 イエス様はすべての人のところに来てくださいます。信じてイエス様を心の中にお迎えいたしましょう。

ワーク D

●今週は、心からクリスマスをお祝いしたいと思います。
●「さて誰でしょう」は、人物にスポットをあてた簡単なクイズです。聖書箇所を開いて答えましょう。
●最後の10番の質問では、「私です」と答えることができれば、本人もみんなも喜び合えるのではないのでしょうか。
●イエス様をまだ受け入れられない人があれば、分級の後に、ていねいに気持ちる聞いてあげる必要があるかも知れません。
●来週は教会と一緒に朝ごはんを食べるので、朝食抜きで来るように知らせてください。

聖書 マタイ4・1-11 テーマ 荒野の試み

序論

今週から約2カ月、「主に会った人々」から学ぶ。子どもたちに主を紹介し、彼らにも主と出会わせたい。最初の2週は、主イエスがどういう方に焦点をあてる。主がバプテスマを受けられた直後に、父なる神は「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」と仰せられた。主は、この父なる神を頼り、その御心に従ってみわざをなされる。しかしサタンは3度、主を試み、「頼り足りない。頼りすぎ。全く頼らない」という、御心と正反対の生き方を示した（『小島伊助全集』3巻271頁）。主は、これらの試みに、律法を實生活に適用した生活律法である申命記の聖言を引用して打ち勝たれた。

一、パンによる救い

主イエスは肉体をもたれているので、四十夜も断食すれば、体力を消耗し、空腹になられる。このとき悪魔は、八神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じて「こんなさういふとそのかしたのだ。確かに昔も今も、飢えている人々にパンを与えることは、救いであるだろう。主は当然ながら、それをする力をもたれていた。しかし、荒野を旅するイスラエルの民は、マナを与えられながらも信仰になった。肉体的あるいは経済的な救いは、一時的な満足を与えても、永遠の救いにはならない。

研究資料

(足立)

テキスト

- 1 イエスは御霊によって荒野に導かれた。ここで主導権は神が握っておられ、神の子イエスは父なる神との信頼関係に生きておられる。そもそも主は聖霊によって人となられ（1・20）、公生涯をはじめににあたっても神の御霊の承認によって立ち上がった（3・16）。そのイエスを悪魔は試みる。神は決して人を罪に誘惑しない（ヤコブ1・13）が、イエスは人の受ける試みを自ら経験することにより真の救い主となる（ヘブル2・17-18、4・14-16）。悪魔の狙いは、父なる神に対するイエスの信頼を阻むこと。荒野での試みは、かつてのイスラエルの経験を想起させる（申命記8・2）。
- 2 断食は、重大な願いを成就するためや祈るために当時のユダヤ人社会では広くいざわった習慣（参照6・16-18）。イエスの断食は四十日四十夜であった（モーセは律法授与の時に同じ日数断食した。出エジプト34・28）。ここにおいて人間イエスの肉体的欲求は最高潮に達している。
- 3 悪魔は試みる者であり、イエスに誤った行動を取らせようとしている。彼はイエスが神の子であることを否定しない。むしろ彼はイエスが神の子であることに着目し、その特別な立場を誤用させようと企む。神の子なのだから石をパンに変えるべしと容易なことではないかと。この場合イエスは空腹の絶頂にあった。悪魔は人の肉体的必要

主は、この誘惑に対して、人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」との聖言を引用された。荒野の旅を振り返って、モーセが民に語った言葉である。主イエスは、八わたしが命のパンである」と言われた（ヨハネ6・35）。パンを食べても、人はいつか死ぬ。永遠の命とは、半分パンに頼って、半分神に頼る生き方ではない。主イエスの語られる言葉こそ魂に栄養を与え、肉体が死んでも、滅びることのない永遠の命を与える。神の救いはパンではなく、聖言によるのである。

二、奇跡による救い

つぎに悪魔は、エルサレムにある八宮の頂上へ主を立てた（第3の試みの時には八高い山へ連れて行っているが、どちらも文字どおりにとるよりも、霊的な体験と理解したほうが良いだろう）。そして、詩篇を引用して、御使いが守ってくれるから八下へ飛びおりて「こんなさういふ」というのである。奇跡を見たなら、すぐに人々は、主を神の子と認め、救いのわざも容易に行なえると、思わせようとしたのである。確かに、奇跡によって人を救おうとする動きは世に多くある。しかし、それは本当の救いにならない。そこには人格的な関係がないからだ。

主は八主なるあなたの神を試みてはならない」との聖言を引用された。奇跡が起こったから神を信頼するのではない。本当の信頼は、神との人格的交わりによって生まれる。いつも神と共にあって救いを聞き、共に歩む交わりこそ、信仰である。

神の救いは、奇跡ではなく、信仰によるのだ。

三、この世の栄華による救い

さらに悪魔は、繁栄している八この世のすべての国々へ主を見せ、八わたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう」と言う。神ではなく、悪魔を礼拝せよと誘惑するのである。これは、「現世での繁栄を約束するから、悪魔を礼拝し、永遠の救いを捨てよ」という意味だ。確かに現世での繁栄こそが全てと思っている人々は、悪魔を礼拝しても繁栄を選んでいく。公害を隔しても製品を作り、賄賂を贈っても仕事を受注する大人たちの姿がこれにあたる。

しかし主は、八主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ」との聖言で答えられた。この世でどんなに繁栄しても、死ねば終わりだ。全世界をもうけても、永遠のいのちを失ったら元も子もない。有限な地上での栄華ではなく、永遠の神の国を求めるべきである。永遠のいのちを得るためには、主の十字架の贖いを受ける以外に道はない。神の救いは、地上の繁栄ではなく、十字架の贖いによるのである。

結論

神の救いは、聖言による、信仰による、主の十字架による救いだ。しかし悪魔は、パンや奇跡や栄華により頼めと、誘惑してくる。この誘惑に勝利する秘訣は、主イエスが模範を示されたように、聖言を實生活に適用することである。「主の御名によって命じる。悪魔よ退け。聖言には」と書かれている」と、悪魔を退けよう。

- につける。後にイエスは多くの群衆に食物を提供された（14・15-21、15・32-38）。しかしこの荒野において、イエスが自己の必要のために力を用いることは、天の父のみこころではない。このことは父なる神から独立して生きる救い主の提示となり、かつ間違ったメシヤ（飢えの解決者）を印象づける。イエスの使命はゴルゴタの十字架。
- 4 イエスは聖書に基づき（申命記8・3）、悪魔の試みを退ける。イエスはパンの必要を否定しないが、人のいのちが食物によってのみ支えられることに同意しない。かつてモーセに率いられたイスラエルの民は40年間荒野をさまよった。それは出エジプトを経験させて下さった主を信頼せず、不従順を繰り返したからだ。しかし神は民に天からマナをふらせ、必要を与えて下さる神に信頼し、神のみことばに養われることの大切さを経験させられた。悪魔の挑戦は、この生ける神への信頼を抜きにして人の必要を満たそうとする誘いだった。イエスはみことばによって勝利された。
 - 5 試みる者の名は悪魔。第二の誘惑の場所は、荒野から聖なる都エルサレムに移る。
 - 6 再び悪魔はイエスが神の子である事実を訴える。そしてイエスが父への信頼を第一とされることを根拠に、詩篇91・11-12を悪用して試みる。詩篇91篇は一貫して神への信頼を歌っているが、悪魔はその文脈を無視してイエスに危険を冒すようささやく。悪魔によるみことばの悪用。ここには、イエスに超自然的演技をさせて、群衆を誤った方向に導こうとする悪魔の意図もつかえる。

- 7 イエスは悪魔の意図を見抜き、再び聖書に依拠（申命記6・16）して反論する。申命記においてのみことばは、イスラエルの民が飲み水の欠乏をモーセに告げたことに言及して語られたものである（参照出エジプト17・1-7）。ここには、神への信頼を持たず、神を試みてはならないことが記されている。イエスが神殿の頂から飛び降りることは、自ら危険な状況を作り出し、神の奇跡を求めることになる。神に仕える者は、神への信頼に基づいて必要を訴えることが大切である。
- 8 悪魔は再びイエスに挑戦し、非常に高い山に連れて行く。悪魔はイエスに地上の王国の栄華を見せる。確かに悪魔は地上の支配者である。
- 9 ひれ伏して：拝むなら 露骨な条件提示である。悪と手を結んで神の国を手取り早く建設せよとの誘い。地上の富、権力、繁栄を得るために。
- 10 イエスは妥協の余地がない断固たる態度で拒絶する。サタンよ、退けとは、神の子イエスが悪魔とその申し出に一切かわりがないことを示している。サタンというこぼが、本福音書においてここで最初に使われている。サタンとは、敵という意味を持ち、神に徹底的に敵対する存在として記されている。またサタンは、神が創られた人間に最も関心を持っている。イエスは再びみことばを引用する（申命記6・13）。ここでは、主なるあなたの神に強調点がある。サタンではなく、神こそが礼拝されるべき対象である。聖なる栄光は神おひとりの為にある。人間が献げるあらゆる奉仕も、ただ神のみが受けるにふさわしい。

聖書 マタイ4・1～11

タイトル サタンよ退け！

中心聖句 サタンよ退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある。 マタイ4・10

目標 イエス様の働きが、十字架の贖いであることを発見し、悪魔の誘惑を退ける者となる。

導入

悪魔はとても悪賢く、私たちをだまして、神様の救いから引きずり下ろそうと働きかけてきます。そんな悪魔と、イエス様も戦われました。悪魔は、イエス様を救い主という働きから引きずり下ろそうと誘惑しましたが、イエス様はこれらにことごとく勝利されたのです。

(起) ストーリーを語る

イエス様が洗礼を受けられたとき、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である」と、天から神様の声がありました。これはイエス様が神様の息子で、神様の願っておられるとおりのことをするという意味です。

洗礼を受けられた後、イエス様は荒野で40日40夜の断食をされました。疲れて空腹になったイエス様に、悪魔は誘惑をしかけてきました。最初の誘惑は、まわりにある石ころを見せて、「おなかがついているのなら、神の子なんだから石をパンに

変えて食べたらいいじゃないか」という言葉の罠です。確かにイエス様はおなかがついておられ、食べ物も必要でした。しかし悪魔の誘惑は、神の力をパンを得ることに使えという誘惑なのです。イエス様は直ちに、「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである」とお答えになり、悪魔の誘惑を退けられました。イエス様の働きは、自分や人が食べ物を得るためではありません。食物は、人がイエス様を信じて救われたのなら、添えて与えられるもののなのです。

次に悪魔は、イエス様を都に連れて行き、宮の頂上に立たせました。そして、「もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおろしてごらんさい。神様が支えてくださると聖書に書いてありますよ」と言います。ここで悪魔は、奇跡を見せたら人は救えるよと誘惑したのです。しかしそれなら、とくに神様は、全能の力でそうなさっています。するとイエス様は、「主なるあなたの神を試みてはならないとも書いてある」とお答えになりました。神様は人格を持たれます。ですから、イエス様は、突然不思議なことを行なって信じさせたりなさいません。私たちと出会い、語り、イエス様の人格を受け入れさせてくださいます。彼を受け入れることが、信じることなのです。

次に悪魔は、とても高い山にイエス様を連れて行き、目の前に広がる町全体を見せて、「わたしをひれ伏して拝みさえすれば、目の前に広がる世界は皆あなたのものにしてあげましょう」と言いました。ここで悪魔がしたのは、イエス様の働きを地上だけのものにしようという誘惑です。わたし

を拜んで、この目の前の世界の王になったらどうか、イエス様が王になったらみんな幸せになるじゃないかというものです。

これに対してイエス様は、「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と聖書に書いてある」と答えて、サタンの誘いを拒絶されました。イエス様の働きは、この世だけのものではなく、永遠のいのちを与えるものです。悪魔を拜んで地上で繁栄しても、永遠のいのちを失ったならなんにもなりません。

(承) 学ぶべき真理

石をパンに変えて与えても、奇跡を見せて驚かせても、この世の繁栄を与えても、人は救われません。イエス様は、イエス様を信じて、イエス様に従っていく人が永遠のいのちを受け取るように、人となられ、十字架につかれたのです。

(転) 生活への適用

皆さんも、悪魔に誘惑されることがありますよ。拾ったものは自分のものにしちゃえ。あいつを嫌になれ。悪口言っちゃえ。って、悪魔はさぞつてきます。そんなとき、あなたも「イエス様によって命じる、悪魔よ退け。言葉にはくと書かれている」って、命じることができるのです。

結論

イエス様の十字架の贖いだけが、永遠のいのちを与える救いです。その他の救いは悪魔の用意した偽物です。イエス様を信じ、イエス様についていく人にこそ、永遠のいのちが与えられます。

ワーク A

● 暗唱聖句 (12月29日～1月26日)

だれでも新しく生(ま)れなければ、神の国を見ることはできない。(ヨハネ3・3)

● 導入のヒント

悪魔(サタン)とは、バイキンマンの形をしているわけではありません。「お母さんのいうことなんか聞かなくていいよ」とか、「教会に行くより、遊ぶほうが楽しいよ」と、心に話しかけてくるのです。イエス様もこの悪魔の誘惑にあわれました。でも、「サタンよ退け」と言って神様に頼るなら、悪魔に勝つことができます。

● ワークについて

色画用紙を半分に折り、内側に、みことばの書かれている白い紙を貼りつけます。表紙に自分の名前を書いて、聖書を作ってみましょう。

ワーク B

● 質問1 今日のみことばを書きましょう。

● 質問2 イエス様は悪魔に誘惑された時、どのように行動されたでしょうか。イエス様の行動の基準は聖書の言葉だったことに気づきましょう。

● 質問3 以前学んだ十戒を思い出しながら、自分の心の中の声に対して実際にどのように勝利していくかを、一緒に考えてみてください。

● 讃美歌 「負けるもんか」

(ノアCDコレクション Vol.1 66番)

● 今日のお祈り 「神様、みことばに従って悪魔に勝つことができるように助けてください。」

ワーク C

● 第1問 悪魔は肉体的限界にあったイエス様に、誘惑のわなを仕掛けました。悪魔の語った言葉と、それに対するイエス様の言葉を、マタイ4・3～10から、抜き書きします。悪魔の巧妙な言葉に惑わされないイエス様の「聖言の剣」を味わってください。

● 第2問 悪魔はイエス様を離れ去りました。かわりに、み使いたちが仕えたことも、話してください。

● 第3問 問はずばり「みことば」です。しかし悪魔も聖言を用いることがあります。よい動機から聖言が適用されているかを観点に考えてみてください。

ワーク D

● 今朝、子どもたちは空腹で来ています。先生は悪魔役を一人選んで、その子にメモを渡します。

● (メモの内容) みんなには悪魔役をしていることとは、ないしよにしておき、パンを食べるように、誘惑する言葉をかけてください。(例)「先生は先に食べていいって言ってたよ。もう食べてもいいんじゃない。」「ねえ、先にたべちゃおうよ。」「人数分のパンと飲み物を用意しておきます。テーブルの上に、用意したパンを置いて、ちよっと待ってね」と、教師はワークを取りに行きます。約5分後、分級室にもどり、子どもたちが約束を守って待っていたかどうか確認します。

● ワークを始めます。ワークの質問を読んで、正直な気持ちを話しあいましょう。その後、朝食を共にして、一年をふりかえりましょう。

中高校へのヒント

● 考えてみよう

1 悪魔はなぜ主イエスを誘惑したのでしょうか。

2 主イエスはなぜ誘惑にあわなければならなかったのでしょうか(ヘブル2・17～18他参照)。

3 主イエスは悪魔の誘惑に対して、どのように勝利されましたか。

● 自分にあてはめてみよう

1 あなたが誘惑にあったとき、どうしてしましたか。

2 あなたは神の言葉に信頼しないで、物質的な豊かさのみを求めようとしていませんか。

3 あなたは神の主権を無視して、自分の思いどおり神を操ろうとしていませんか。

4 あなたは神を礼拝し、神に仕えることよりも、この世の楽しみのほうを求めて生きようとしていませんか。

● 話し合ってみよう

1 誘惑と試練とはどう違いますか(ヤコブ1・12～17他参照)。

2 聖書の中から、誘惑に勝利した実例を幾つか挙げてみましょう。それぞれの勝利の秘訣はどこにありましたか。

3 聖書の中から、誘惑に敗北した実例を幾つか挙げてみましょう。それぞれの敗北の原因はどこにありましたか。

4 誘惑に勝利した体験、逆に敗北した体験があれば、分かち合いましょう。

聖書 ヨハネ1・19-34
テーマ ヨハネの証言

序論

今週は、バプテスマのヨハネが主イエスをどのように紹介したかを学ぶ。共観福音書によれば、ヨハネは荒野で「悔い改めのバプテスマ」を宣べ伝えていた。彼が、民衆のメシヤ待望熱をかきたてているのではないかと心配した祭司たちやレビ人たちは、使者を遣わして、ヨハネが自分をどう考えているのかを探らせたのである。そのときヨハネは、自分について語るよりも、自分の後に来られる主イエスについて証言した。その証言は4つにまとめられる。

一、自分は声、メシヤはことば

当時、ヨハネは多くの人々に注目されていた。しかし、自分は旧約聖書に預言されているキリスト（つまりメシヤ）ではないと宣言した。また、エリヤの再来でも、モーセが言っていた人あの預言者でもなく、ただ荒野で叫ぶ者の声にしかすぎないと語ったのである。この福音書の冒頭で、主イエスは「人」として紹介されている。声と言には大きな違いがある。声は直ちに失われます。けれども言は永久にあります。声は忘れられます。言は忘れられません」（バックストン『ヨハネ伝講義』25頁）。

二、人生の中心である方

さらにヨハネは、自分のあとに来るかた（主イ

エス）の「くつのひもを解く値うちもない」と言う。当時、「くつのひもを解く」のは奴隷の仕事であったが、それさえする値うちもないとは、この方がどれほど偉大かを示している。そのような偉大な方を、あなたがたの知らないかたが、あなたがたの中に立つておられる。ヨハネは証言する。この「人」という語は、英語では「イン」ではなく「センター（中心、真中）」である。この方こそ人生の中心であり、本当の「主」であることを証言するのだ。全ての中心はイエス・キリストである。仕事の中心、家庭の中心、教会の中心、そして世界の中心も主イエスである。全ては主イエスのためにあり、主イエスのものであり、主イエスによって成り立っている。

三、世の罪を取り除く方

その翌日、ヨハネは主イエスに会った。そして開口一番、「人よ、世の罪を取り除く神の小羊」と言った。この「人小羊」は、過越の祭りのときにほふられる小羊（出エジプト12・3）、あるいは苦難のしもべを象徴する小羊（イザヤ53・7）を指している。ヨハネと主イエスは親戚なので、ヨハネが「人」としてこの人を知らなかった。主イエスは不自然である。多分、「メシヤ」としては知らなかった」という意味とるのが適当だろう。主イエスが公の働きを始める直前に、ヨハネは主が人類の罪を取り除く方であることを知った。自分を「人小羊」としかないと謙遜な者がこそ、この真理を発見するのだ。

世の罪を取り除くことこそ、メシヤの使命であ

る。ヨハネは、人生の中心である方が、また罪を取り除く方だと証言する。それも小羊として取り除くのである。神のひとり子の、十字架上で犠牲のゆえに、罪は取り除かれるのだ。

四、聖霊のバプテスマを受ける方

共観福音書はみな、ヨハネが主イエスにバプテスマを受けたことを記している。本書だけはその記事を省いているが、代わりに「御霊がはどのように天から下って、彼の上にどまるのを見た」というヨハネの証言を記す。これを目撃したからこそ、ヨハネは「この人こそは、聖霊によってバプテスマを受けるかたである」と知った。

ヨハネの使命は、水でバプテスマを受けることであり、これは罪の悔い改めの象徴である。しかし、御霊によってバプテスマを受けることは、新しい命を与えることであり、これは人神の子でしかないことだった。ヨハネは、水のバプテスマの限界を十分に知っていた。本当に必要なのは、神の霊に満たされ続けて、神の命をいただくことである。人に命を与えることができるのは、メシヤしかないので。

結論

主イエスこそ、人生の中心であり、人の罪を贖う方であり、御霊で満たしてくださる方である。これが救い主の使命であり本分だ。ヨハネは、当時誰も理解していなかったこの真理を発見し、その事を証言する声に徹した。私たちも人生の中心を主イエスに置き、主によって贖われ、御霊に満たされて、この真理を伝える声になりたい。

研究資料

（足立）

他の3つの福音書と同様、ヨハネ福音書にも、イエス・キリストの登場以前にバプテスマのヨハネの活動が記されている。しかし本書では、バプテスマのヨハネが洗礼を授けることは彼の主な働きとして記録されてはいない。むしろ、イエス・キリストが神の御子であると証言するヨハネの姿が顕著に描かれている。

テキスト

19 ユダヤ人たちが この表現は本福音書で最初に登場するものであり、イエスに敵対する者たちを表すものとしてしばしば出てくる。「エルサレムから」とあるが、多分サンヘドリン（ユダヤ最高議会）の指導者たちがバプテスマのヨハネとは何者であるかを確認するため、ヨハネのもとに祭司たちやレビ人たちを派遣した。ヨハネの指導していた洗礼運動が全国民を包括する巨大な悔い改めとなっていたので、エルサレムの宗教的指導者たちは異常な恐れを感じていたであろう。

20 わたしはキリストではない 1世紀のパレスチナでは、メシアへの期待がはびこっていた。ある者たちはダビデ的メシアを期待し、他の者たちは祭司的メシアを期待していた。ヨハネは少しもためらわず自分がキリストではないと声明した。

21 あなたはエリヤですか マラキ4・5に基づき、ユダヤ人は、世の終わりに預言者エリヤが再来すると期待していた。彼らはバプテスマのヨハ

ネがエリヤの再来かと尋ねた。しかしヨハネは、これにも明確に「否」と答えた。

22 エルサレムの指導者たちから派遣されていた者たちは、一連の否定以上の答えを持ち帰らねばならなかった。彼らは別の提示をする代わりに、ヨハネ自身に「自分をどう説明するか」と尋ねた。

23 預言者イザヤが言ったように ヨハネはイザヤ40・3を自らにあてはめ返答した（参照マタイ3・3、マルコ1・3、ルカ3・4）。ヨハネは期待された終末的人物像を自らに適用することを拒んだかもしれないが、それは彼が単なる巡回説教者であることを意味しない。彼はイザヤの預言によれば、声である。洗礼者ヨハネは、荒野で叫び、主のために道を備え、みことばなる救い主イエスの到来を証言する声に徹していた。

24-25 使節団のバプテスマ派がヨハネに投じた質問によって、彼らの関心事がわかる。それは、ヨハネが施す洗礼が何の権威に基づいているかであった。当時、洗礼は通常異邦人改宗者に対して授けられたユダヤの儀式であった。それは罪を洗いきり、改宗者が新しい生活に入ることを象徴するものであった。したがって洗礼を施すことは権威の主張と見られた。他の3つの福音書では洗礼が悔い改めと結び付けられている（マタイ3・2、マルコ1・4、ルカ3・3）。ヨハネは、人格的かつ個人的悔い改めと信仰が必要であると主張した。

26-27 しかしながら本福音書では、ヨハネが取り扱っていた事例が提示されることなく、ヨハネの説教によるキリスト証言へと即座に移っている。

ヨハネは、使節団の中にすでにキリストが立っており、おられると主張する。くつのひもを解く 当時靴の紐を解くのは奴隷の仕事であった。ヨハネは自分を、やがて登場する救い主の奴隷と呼ばれるにすら値しない人間であると位置づけている。

28 この対話が交わされた場所が記されている。

29 見よ、世の罪を取り除く神の小羊 この宣言は、キリストを証言するヨハネの性質を最もよく表している。小羊と訳される語（アムノス）は、新約聖書中4回使用されているだけである（ヨハネ1・29、36、使徒8・32「イザヤ53・7の引用」、1ペテロ1・19）。いずれの場合もキリストに適用されている。特に使徒8・32と1ペテロ1・19は、いけにえとしての小羊を意味し、キリストの十字架を明確に主張している。新約聖書におけるイザヤ53章からの引用はキリストに直接適用されている（マタイ8・17、ルカ22・37、ヨハネ12・38、使徒8・32-35、1ペテロ2・22-24）。これらの言及はキリストの贖罪のみわざを強く主張している。キリストご自身が、私たちの罪の責任を取り除く唯一究極の犠牲となり、神への道を開かれた。洗礼者ヨハネは自らの役割の限界を認めてイエスを紹介し、罪を取り除くキリストを宣言した。罪を取り除く小羊の犠牲は、旧約聖書にしばしば見られる（創世記4・4、8・20、22・2-8、出エジプト12・21-27、レビ記14・10-25、民数記6・12）。著者ヨハネの贖罪の神学は、ヨハネの第一の手紙に展開されている（1ヨハネ1・7、2・2、4・9-14）。

聖書 ヨハネ1・19～34
タイトル ヨハネの紹介
中心聖句 わたしは水でバプテスマを授けるが、あなたがたの知らないかたが、あなたがたの中に立つておられる。
ヨハネ1・26
目標 ヨハネの証言から、イエス様がどのような方かを発見し、人生の中心におく。

導入
バプテスマのヨハネには、イエス様の働きの準備をする役目がありました。それは、水のバプテスマを授けて、人々を悔い改めに導くこと、イエス様を紹介することです。では、いったいヨハネは、イエス様を何と紹介したのでしょうか。

(起) ストーリーを語る
バプテスマのヨハネは、イエス様が誕生される6ヶ月前に生まれた、親戚のエルザベツの子でした。彼は荒野に住み、ヨルダン川で悔い改めのバプテスマをたくさんの人に授けていました。イエス様もそこでバプテスマを受けられました。
ある時、エルサレムから指導者たちが、彼のもとに祭司やレビ人たちを送って「あなたはどのような方なのか」と尋ねさせました。ヨハネが約束された預言者かメシヤではないか、という噂がたっていたからです。しかしヨハネは「違う」

と答えました。そして、「預言者イザヤが言ったように、わたしは『主の道をまっすぐにせよと荒野で呼ばれる者の声』です」と答えました。声はすぐに消えてしまいます。そして言葉を残します。ヨハネは、自分が声のようにイエス様を紹介する者であると答えました。

そこで違わされてきた人たちは、さらに質問をして、「ではなぜバプテスマを授けているのですか」と尋ねました。ヨハネは、「わたしは水でバプテスマを授けているけれども、あなたがたが知らないそのかたが、あなたがたの真ん中に立つておられます。わたし自身は、そのかたのくつのひもを解くほどの値打ちもないものです」と答えました。ヨハネは、イエス様が世界の中心、すべての中心だと言っています。この世界はイエス様のためであり、イエス様によってなりたち、イエス様のものです。まずヨハネは、イエス様が全ての中心であることを証しました。

翌日、ヨハネはイエス様が自分のほうに近づいてこられるのを見て、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と言いました。これは、イエス様が、当時の人々が教えられてきた律法で罪のために捧げられる小羊と同じようになって、人類の罪からくる刑罰の身代わりとなり、十字架につかれることを証したのでした。

またヨハネは、「ある人の上に御霊が下ってとどまるのを見たなら、その人こそ、御霊によってバプテスマを授けるかたである」と神様から聞いていました。御霊のバプテスマとは、御霊にどっぷり浸されることです。そしてヨハネは、現に御霊がイエス様の上に下り、とどまるのを見たので、「イ

エス様こそ御霊でバプテスマを授けるかたです」と証したのでした。

(承) 学ぶべき真理
バプテスマのヨハネが、イエス様の前に準備したのは、水でバプテスマを授けて人を悔い改めに導くこと、そしてイエス様を紹介することでした。ヨハネは、イエス様は全ての中心です。罪からくる刑罰の身代わりになる方です。聖霊によるバプテスマを授ける方です。と、証しました。

(転) 生活への適用
神様の事を知らせることができるのは、イエス様を信じた人たちだけです。私たちも見たこと、聞いたこと、信じたことを話して、ヨハネのように、イエス様のことを伝えたいと思います。そのためにも、自分がイエス様をどのように信じているかが問題です。皆さんはイエス様のことを、ヨハネのいうとおりに受け取っていますか。皆さんの中心はイエス様でしょうか。イエス様に罪の刑罰の身代わりにならなければいけません。イエス様から聖霊によるバプテスマを受けたでしょうか。全部いっぺんにでなくていいのです。一つ一つやってゆきましょう。

結論
まず、犯してしまった罪の刑罰の身代わりになってもう一度から始めましょう。イエス様を信じて、犯した罪を言い表し、ごめんなさいとあやまるのです。すると、自己中心の人生からイエス様を中心にした御霊に導かれる人になれるのです。

ワーク A

導入のヒント
皆さんはどうやって教会学校に来るようになりましただか。お友だちに誘われた人や、両親と一緒に来ている人もいます。ヨハネさんは、多くの人々に、イエス様が罪からの救い主であり、神の子だと話しました。自分の弟子たちがイエス様の弟子になっても、へいきでした。イエス様に本當の救い主だとわかっていいたからです。
ワークについて
色画用紙、白い紙、曲がるストロー、のり、ピンポン玉を用意して、ぞうを作って遊びましょう。

ワーク B

質問1 お話を思い出して答えましょう。
質問2 一人の罪、一つの罪でなく、この世の全ての人の、全ての罪を取り除くために、全く罪のない神の子イエス様が私たちの身代わりに十字架にかかれ、いけにえとなって下さいました。
質問3 子どもたちの罪も、悔い改めてイエス様を信じるなら取り除かれ、赦されて神の子とされ、イエス様に導かれて歩む者とされます。
讃美歌 「イエス様ごめんなさい」
(ブレイズワールド14番)
●今日のお祈り 「神様、私の身代わりにイエス様が十字架にかかって下さったことを信じます。私の罪を赦してください。」

ワーク C

●新しい年に入って最初の分級です。今日はイエス様を人々に紹介したバプテスマのヨハネの言葉学びます。ワークにある中から、ヨハネがイエス様を紹介した言葉に○をして、その言葉の意味について話を展開しましょう。その後、「あなたはイエス様をどのように紹介しますか」と聞いてみてください。その内容をワークに書き込みます。なるべく具体的にイエス様を紹介できるように導いてください。
●今年も、子どもたちと先生方が、イエス様と共に歩む一年でありますようにと、祈り願っています。

ワーク D

●新年のあいさつがわりに、お互いに自己紹介をしてみよう。改まった気持ちも、年始には、良いのではないのでしょうか。ポイントを参考にしてください。
●親しい人のために、イエス様の紹介文を書いてみましょう。
●ヨハネが紹介したイエス様と一緒に、今年一年も歩みましょう

中高校へのヒント

- 考えてみよう
- 1 バプテスマのヨハネが、イエスこそメシヤであると確信することができたのはどうしてでしょうか。
 - 2 ヨハネは主イエスがどのような方であると語っていますか。
 - 3 主イエスが「世の罪を取り除く神の小羊」と呼ばれたのはどうしてですか。
 - 4 「御霊によってバプテスマを授ける」とは、どういう意味ですか。
- 自分にあてはめてみよう
- 1 あなたは主イエスをどのように理解し、体験していますか。また、あなたの生活の中でどのように位置づけていますか。
 - 2 あなたは罪を取り除かれたという確信がありますか。その確信の根拠は何ですか。
 - 3 あなたはヨハネのように主イエスを人々に紹介していますか。主イエスを効果的に紹介するのに必要なものは何でしょうか。
- 話し合ってみよう
- 1 どうしたら罪を取り除いていただけるのでしょうか。バプテスマを受けるから救われるのでしょうか。
 - 2 水によるバプテスマと御霊によるバプテスマとはどう違いますか。
 - 3 罪を赦された体験、潔められた体験があれば、分かち合いましょう。

聖書 ヨハネ1・35-51 テーマ 最初の弟子たち

序論

バプテスマのヨハネがエルサレムからの使者に会ったのが第1日とすると、主イエスと会ったのは第2日、そして第3日には、アンデレともう一人の弟子（多分、本書の著者のヨハネ）が主に会い、第4日にはペテロが主と会った（これを第3日の出来事と考える人もある）。そして、その翌日には、ピリポとナタナエルが主に会っている。今週は、そのうち3人に焦点をあてて、主と会ってどのように変わったのかを見てみよう。

一、アンデレ

△ふたりの弟子△は、もともとバプテスマのヨハネの弟子だった。しかしヨハネが△見よ、神の小羊△と言うヨハネの△声△を聞いて、△イエス△について行った△。主のあとについて行った2人は、△△におとまりなのですか△と尋ねている。多分、滞在先に通うつもりだったのだろう。しかし主はそれに答えず、△きてこらんさい。そうしたらわかるだろう△と言われた。そこで彼らは、△イエスの△に泊まった△。彼らは、一晩主とともに過す間に、主がバプテスマのヨハネの言う救い主であることを悟ったのだ。アンデレは、前日には主を△ラビ△（訳して言えば、先生）△と呼んでいた。教師の一人だと思っていたのだ。しかし、次の日には△メシヤ△（訳せばキリスト）△と呼んで、兄弟シモンに紹介している。主イエス

を救い主と認めたのである。

主イエスとともにいることによって、信仰は成長する。このことは、彼らに大きな変化をもたらすし、すぐにこのことを伝えたいと思うようになって、兄弟に伝えたのだ。信仰はパートタイムではいけない。フルタイムなのだ。その時だけでなく、常に主と共にいるために、弟子は召された。私たちもまた同じように召されている。

二、シモン（ペテロ）

△メシヤに△出会った△アンデレは、△まず自分の兄弟シモンに出会って△、△イエスのものにつれてきた△。本物に出会った（直訳では「発見した」）アンデレは、漁をしていたかもしれない兄を連れてきたのだ。△まず△という語は、もう一人の弟子ヨハネも、自分の兄弟ヤコブを連れてきたことを示唆すると考える学者もいる（『新聖書注解』）。主はシモンに目をとめて、△あなたは△シモンである。あなたをケバ（訳せば、ペテロ）と呼ぶことにする△と仰せられた。ケバとは、岩という意味である。主は、シモンという人物を、岩のように強固な者と呼んでくださった。そこでシモンは主に従った。

主は今も、どんなに弱い者をも、強い者と認めてくださる。あなたが今すぐであっても、主は△としてくださる。主にお会いして従うなら、人は造り変えられていくのである。

三、ナタナエル

ナタナエルはピリポが連れて来たが、主イエス

は、△△の心には偽りがなく△とおっしゃった。ナタナエルは不思議に思い、△どうしてわたしをご存じなのですか△と聞く。主の答えは、△ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたがいつく木の下に居るのを見た△だった。そこで彼は、△あなたは神の子です△と告白した。

偽りのない人など、神以外に存在しない。恐らくナタナエルはいつく木の下で悔い改めの祈りをしていたのであろう（当時は密室を確保できない庶民は野山へ行って、祈りの時を持っていた）。彼の悔い改めの祈りは聞かれ、罪赦されたので、主は△偽りがなく△と言われたのだろう。ナタナエルは、そのことだけで主を神の子と言うが、主は△これよりも、もっと大きなことを、あなたは見るであろう△と仰せられた。それは、天が開けて神の御使いが、主の上を上り下りするのを見ることだ。主の弟子になると、天と地が主イエスによって繋がっているのを見る。人間は罪のゆえに神と交わらず、天が開けないでいる。しかし、主イエスによって天が開かれ、神との交わりが回復されるのだ。主につき従っていく者は、その事実を見るようになる。

結論

これら3人だけではない。主イエスに出会って、主に従い、主とともに過す者を、主は造り変えられる。今、あなたが自分の醜さや弱さに悩んでいるなら、主に会おう。必ずあなたは変えられる。主と共にあり、主に造り変えられ、主によって天と地が繋がれていくのを見る生涯でありたい。

研究資料

（足立）

これらの節に登場する弟子の召命は他の3つの福音書の記事と調和していない（マタイ4・18、22、9・9、マルコ1・16、20、2・13、14、ルカ5・1、11、27、28）。しかし厳密に言つたならば、ヨハネ1章でイエスは弟子たちを召し出してはいない（43節のピリポの場合を除いて）。弟子たちは洗礼者ヨハネの証言によって、また洗礼者ヨハネに従った者たちの証しによって、イエスに導かれている。けれどもこれはイエスを支持して他の宗教を放棄したことを描写しているのではない。すなわち最初の弟子たちは、洗礼者ヨハネの証言が意味することに適切に付随して登場している。あくまでキリスト教という新しい宗教のために自分を捨てるという内容ではない。しかしながら本福音書1章のこの時点で、駆け出しの弟子たちがイエスに招かれている（1・39、50）。

また1章のこれらの箇所には、著者ヨハネがイエスをどのように見るかというキリスト論的関心が強く打ち出されている。神の小羊（36）、メシヤ（41）、旧約聖書に預言された方（45）、神の子（49）、イスラエルの王（49）、人の子（51）。

テキスト

35、37 翌日洗礼者ヨハネは、イエスが通り過ぎるのを見て彼を神の小羊と確認した。このとき洗礼者ヨハネの弟子たちの2人が自分たちの主人の証言を聞いた。彼らの1人はシモン・ペテロの兄

弟アンデレであった（1・40）。もう1人は名前が記されていない。本文は洗礼者ヨハネが自分の従者にイエスの弟子になることを期待していたとは伝えていない。しかし洗礼者ヨハネが、自らを来るべき方の道備えと理解していたことから考えれば、彼の弟子たちの幾人かがイエスこそ最高の方と識別できたとしても理にかなっている。いったんヨハネが来るべき方を確かめたなら、彼の幾人かの弟子がイエスにつき従うのは時間の問題であった。本福音書で「ついて行った」と訳される動詞（アコルーセオー）は、しばしば弟子としてつき従うことを意味する（例1・43、8・12、12・26、21・19、20、22）。しかし37節はそう断定できるわけではない。時々この動詞はまったく中立である（例11・31）。著者ヨハネは、まったくありきだりの意味で2人の人がイエスに従ったことを記しているかもしれないし、また別の意味で、本当の弟子になる第一段階を踏んだことを伝えている可能性もある。

38、39 2人の者がついて行った後で、イエスは一つの質問をした。何か願があるのか イエスは彼に従う2人の男たちに、自分たちの心に何かあるかを表現するよう求めた。これはイエスに従い始めた2人が、人生において何が本当に必要かを尋ねられたのであろう。別の表現で言うなら、この2人は何を求めてイエスのもとに来たのか。2人はラビといふことばで応答し始めた。この語は字義的には、「わたしの偉大なお方」という意味であり、学徒が主人や教師に敬意を示すための共通語であった。イエスに対して普通に用いられて

いる（1・49、3・2、4・31、6・25、9・2、11・8）。△△におとまりなのですか△と表現されている動詞（メノー）は、しばしば△と△とまる、つながる△と訳され、ヨハネ福音書の特徴的なことばである（特に15章）。きてこらんさい。そうしたらわかるだろう 間違ひなく洗礼者ヨハネの弟子たちに光を与え、イエスとの親しい関係が始まることを暗示している。彼らはイエスとその日の残りを過ごした。

40、42 イエスに出会ったアンデレが最初にしたことばは、自分の兄弟を見つけて、わたしはメシヤにいま出会ったとの宣言である。「メシヤ」という語はヘブル語、あるいはアラム語の字訳であり、「油注がれたもの」を意味する名称であった。旧約聖書においてメシヤは、イスラエルの王（例サムエル上16・6、サムエル下1・14、大祭司（レビ記4・3）、預言者（詩篇105・15）を意味した。新約聖書においては、イエスがメシヤとして提示されている。すなわち預言者、祭司、王（イエスの3職制）。この時点でアンデレがイエスの3職制を十分に理解していたとは思われない。おそらく、メシヤといふことばに来るべき方の称号を見たのであろう。

ペテロがアンデレに連れて来られた時、イエスはペテロに起こるであろう事の宣言として、彼に新しい名を与えた。彼の名はこの時点まで、ヨハネの子シモンであった（21・15、17）。だがイエスはケバと呼んだ。これは岩という意味。イエスはペテロの生涯を見抜いている（マタイ16・18）。

聖書 ヨハネ1・35～51
タイトル イエス様に出会う
中心聖句 きでござんない。そうしたらわかるだろう。ヨハネ1・39
目標 イエス様と出会って共にいる人は、変えられていくことを発見する。

導入

皆さんは今年も新しい友だちと出会ったでしょう。イエス様もいろんな人と出会われました。今日は、イエス様が、後に弟子にお選びになった人たちとはじめて出会った時のお話をします。

(起) ストーリーを語る

ガリラヤ湖の漁師のアンデレはバプテスマのヨハネの弟子になって、その教えに従っていました。しかしヨハネがイエス様のことを「世の罪を取り除く神の小羊」と教えてからは、イエス様の教えも聞くようになりました。そして夕方になり、アンデレたちがイエス様に「先生、今夜はどこにお泊りですか」と尋ねると、イエス様は「来てござんない。そうすればわかる」と言われるだけでした。そこでアンデレたちは、泊まるころまでついてゆきました。そして、その日一日中、イエス様と一緒に過ごしているうちに、アンデレは、イエス様が救い主だとわかったのです。

どうしてイエス様は泊まるころを教えてください。それはアンデレが、泊まらなかったのでしょうか。それはアンデレが、泊

まるころ聞いて、通ってこうとしていたからです。その時だけの、通いの弟子ではないかもしれません。いつも主と共にいるのが本当の弟子なのです。

翌日、アンデレはまず兄弟のペテロにイエス様のことを知らせようと仕事場へ駆けつけ、「僕たちはメシアに出会ったんだよ、早く一緒に会いに行こう」と言って、イエス様のもとに連れてきました。こうしてアンデレの兄弟のシモンも、イエス様にお目にかかることができました。イエス様はシモンにおっしゃいました。「あなたはヨハネの子シモンである。あなたをケバ(ペテロ)と呼ぶことにする」。ケバというのは「岩」という意味です。これは、これからシモンがイエス様に従っていくことで、岩のように動かない信仰を持つようになることを表しています。イエス様との出会いが、シモンをも変えることになったのです。

次の日、ピリポがイエス様に従いました。すると今度は、ピリポがナタナエルにイエス様のことを伝えました。ところがナタナエルは、「ナザレ村からメシアは出ないよ」と言って、相手にしませんでした。しかし、ピリポはあきらめずに「きてござんよ」と誘いました。そこで、ナタナエルは「イエス様のところに行くことにしました。イエス様はナタナエルがやって来るのを驚かすことなく、あなたの子です」と告白しました。するとイエス様は、「あなたはもっと大きなこと、天が開け、

人の子の上に御使いが上り下りするのを見る」とおっしゃいました。

(承) 学ぶべき真理

皆さんもイエス様と出会って素晴らしい人に変えられたと思いませんか。アンデレもペテロもナタナエルもイエス様と出会って、変えられました。そのためには、通いではだめです、いつもイエス様と共にいる人は、変えられます。また、イエス様には計画があります。今はあなたはくですが、これからにする」という計画です。イエス様と共にいる人は、イエス様に似るように変えられていきます。そして、祈りを聞かれるイエス様は、信じて従う人に、天が開かれて、神様が地上に働かれるみ業を見せてくださいます。

(転) 生活への適用

イエス様に出会うことによって私たちは新しいスタートを切るようになります。あなたは自分が今、何だと思えますか。しかし神様は、将来どのようにしてくださるでしょうか。弱虫を勇気のある人に？ おっちょこちょいをよく考える人に？ 自分にあてはめて考えてみましょう。

結論

イエス様に出会って弟子になった人は、変えられていきました。そのためには、パートタイムの弟子ではいけません。いつも主と共にいましょう。そして、今はくたとしても、神様の計画により、くとしてくださることを信じましょう。そして、神様が天を開いて働かれるのを見ましょう。

ワーク A

導入のヒント

教会学校は何でもできる、素直な良い子がくる。とどこでしょうか。いいえ、そんな人はいません。だれもみんな神様の前に罪人です。弟子たちもそうでした。何もできない弱く愚かな人たちでした。けれどもイエス様が大好きで、声をかけていた。いたとき喜んで従って行きました。神様は心を見られます。私たちもイエス様を愛して、イエス様に喜ばれるように従っていきましょう。

ワークについて

紙を3回、半分に折り、人の形に切り取ります。広げるとたくさんの方ができます。イエス様のことを伝えたい人の顔を書きましょう。

ワーク B

- 質問1 お話を思い出して答えましょう。
- 質問2 子どもたちは、イエス様に出会った。いらないかわからず、イエス様をどのような方として認識しているのでしょうか。認識しているイエス様の姿を実際に体験するときに、イエス様と出会うことになりま。
- 質問3 子どもたちはイエス様とお会いしているでしょうか。質問2を参考に、子どもたちと話してみてください。
- 讃美歌 「歌いつづけよう主のあいを」
(日本ホーリネス教団子どもさんびか 77番)
- 今日のお祈り 「神様、私も弟子たちのように、イエス様に出会い、信じて従っていきます。」

ワーク C

●第1問 聖言を書きます。聖書箇所も必ず書いてください。

●第2問 イエス様に出会った弟子の中で、アンデレ、シモン・ペテロ、ナタナエルに着目し、それぞれの顔を書き込みます(想像たくましく描きましょう)。彼らの、イエス様にお会いする前の状態から、お会いした後の変化を、言葉で書きます。アンデレはイエス様を紹介する人に変えられ(ヨハネ1・41)、ペテロは強くされ(1・42)、ナタナエルは「あなたは神の子です」と告白するように変えられました(1・49)。そして、3人ともそれぞれの仕事を離れ、イエス様に従う者となったのです。

ワーク D

- 実際に経験した出会いを思い出しましょう。
- 良い出会いだったその人は、どんな人だったか思い出しましょう。
- イエス様に出会ったと想定して、その時の自分を想像してみましょう。3つの質問について、お互いに話し合えるなら、良いと思います。
- 質問4は、私たちに与えられたユーモアのセンスを発揮しつつ、今自分たちが使っている言葉に言い替えるなら、もっと聖書の言葉が身近なものになるでしょう。最後の文も読んでみましょう。

中高校へのヒント

●考えてみよう

- 1 アンデレはどのようにしてイエスに出会い、メシアと確信するようになりましたか。その後、真ッ先にしたことは何ですか。
- 2 主イエスはシモンをケバ(ペテロ)と改名されましたが、それはどうしてでしょうか。ケバはその後、名前のとおり的人物になりましたか。
- 3 ナタナエルはどのようにして主イエスに出会いましたか。

●自分にあてはめてみよう

- 1 あなたは主イエスに出会ったことがありますか。その結果、どうなりましたか。
- 2 あなたは日々、主イエスについて行き、交わっていますか。
- 3 あなたもケバのように変えられたいと思いませんか。どのように変えられたいですか。主イエスはどのように変えて下さると信じますか。
- 話し合ってみよう
- 1 二人の弟子が主イエスについて行ったとき、バプテスマのヨハネはどう思ったでしょうか(ヨハネ3・29も参照)。
- 2 人々を主イエスのもとに導く秘訣はどこにあるでしょうか。
- 3 主イエスに出会って、変えられた体験があれば、分かち合いましょう。
- 4 アンデレやピリポのように主イエスのもとに人を導いた体験があれば、分かち合いましょう。

聖書 ヨハネ3・1～17
テーマ ニコデモ

序論

先週学んだ3人の弟子たちは、みな、漁師だった。彼らは無学な、ただの人（使徒4・13）であったが、今週学ぶニコデモは、彼らとは対照的な人物であった。彼はパリサイ人（宗教家）であり、ユダヤ人の指導者（サンヘドリンの議員）であり、ハイスラエルの教師（学者）だった。しかしこんなに立派な人でも、自分の功績によっては神の国にはいることはできない。神の国にはいるには、何が必要なのだろうか。

一、新しく生まれること

ニコデモは、夜、主のもとにやって来た。人目につくのを恐れたのだ。さらに彼の心の中には、**「やみ」（1・5、3・19～21）**があった。彼は光を求め、主が人神からこられた教師であることを認めて、わざわざやって来たのである。しかし、主イエスが教師以上の方であることを、彼は知らなかった。主は、彼に**「新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」と**おっしゃった。どんな立派な社会貢献をしても、どんなに知識があっても、どんなに律法を遵守していても、新しく生まれない限り、神の国に入ることはできない。ニコデモは、この点が理解できなかった。自分の人生に何を付け加えても、犯した罪と相殺して、神の国にはいることはできないのだ。

二、水と霊から生まれること

しかし、彼は新しく生まれることを、母の胎にもどって再び生まれることと誤解していた。そこで主は再びこれを説明し、**「水と霊」**から生れなければ、神の国にはいることはできないと**「おっしゃった」**。水から生まれるとは、ヨハネが授けていた水のバプテスマのことである。これは、自分の罪を悔い改めて、新しい生き方をする事だ。そして、霊から生まれるとは、聖霊のバプテスマのことである。神の霊に浸され、御霊に導かれる新しい人生を送ることを意味している。ちょうど水中に浸されるように、神の霊が神を信じる人をドブブリと浸しているのだ。

神の霊の働きは風と似ている。風自体は見ることはできないが、必ず存在し、温度を保ち、酸素を保ち、人を生かしている。それが、物を震わせて音を出すとき、人は、風の存在に気づく。神の霊も見えないが、それは必ず人を生かす。神の霊が人を変えるとき、回りの人はその存在を知る。神の国にはいるのは、知識、善行、まじめな生活などの功績によらない。新しく生まれてこそ、つまり悔い改めて主イエスを信じ、罪が赦され、神の霊に導かれてこそ、はいれるのだ。神の霊に浸され、導かれなければ、人は罪を犯さずに生きることができない。

三、御子を信じること

主はさらに深い真理を語られる。自分が八天から下ってきた者と言われたうえで、モーセの時代の故事を引用し、人の子もまた上げられなければならないと告げられた。上げられると

いう語は、他にも8・28と12・32、34でも用いられており、どれも「十字架にかけられる」ことを意味している。神の言葉を信じて、青銅のへびを仰ぎ見た人は、へびの毒を逃れて生きただけでなく（民数記21・4～9）、罪の身代わりとなって十字架につけられた御子を信じて仰ぎ見る人は、罪の罰から逃れて生きることができるのである。

主はこのとき、全人類の罪を負って呪われたへびのようになることが自分の使命であることを、ニコデモに示された。弟子たちにさえ、この2年後にしか伝えない真理である。神の御子が人となられ、十字架にかかって人類の罪の身がわりになってくださった。この贖いを受け取るのが、新しく生まれることだ。悔い改め、御霊に導かれて、はじめて受け取れるのだ。

結論

ニコデモがこのとき、明確に主を信じたかどうかは記されていない。しかし、彼はその後、主を罪に定めようとする人々に対して勇敢に抗議し（7・50～51）、また主の死後には、遺体に塗るために高価な没薬をもってきた（19・39）。確かに彼は主と出会って変わったのである。

人は、どんな立派な社会貢献をしても、どんなに知識があっても、どんなに律法を遵守していても、新しく生まれない限り、神の国にはいることはできない。自分に何を付け加えても神の国にはいることはできない。ただ新しく生まれることだけが唯一の道なのである。

研究資料

(足立)

2・23～25の役割は、イエス・キリストの栄光ある啓示に関して新しい見地を導入する性質を持っている。すなわち、エルサレムの人々の信仰は不十分なものとして語られており、イエス自身彼らを信用していなかった。そしてエルサレムの住人であり、表面的にイエスをとらえていたニコデモが3章で登場している。その不十分な信仰を持つ人々を代表するようなニコデモが、イエスに質問し、イエスが答える形で3章は進んでいく。

テキスト

1 ニコデモ ヨハネ福音書にのみ言及されている（7・50、19・39）。指導者（アルコーン）とは、ユダヤの最高議会サンヘドリンの議員のことを指す（参照7・48）。彼は社会的地位を持つ人。
2 夜 ヨハネは夜に象徴される重要性を意識している（参照19・39）。暗闇や夜は悪、不真実、無知の領域を表象している（参照9・4、11・10）。ユダは光から離れて、サタンの夜に迷い出た（13・30）。一方ニコデモは、闇から光に導かれて（3・19～21）。彼は議員という立場上、人目を避けたのである。ニコデモの質問から、彼がイエスに心引かれていることがわかる。
3 ニコデモの儀礼的な挨拶に対してイエスは、人生の主題の心臓部に切り込んでいく。よくよく（まことに、まことに）アラム語、或いはヘブル語からの字訳でアーメンを意味する。新しくと

訳されていることは（アノーセン）は、上から、再び、という意味である。生まれる（ゲンネセイ）という動詞は、不定過去形の受動態である。イエスはここで、新しい誕生、再生を主張している。上から、天から生まれるとは、聖霊なる神のみわざによること（参照1・12～13）。神の国を見る当時、ユダヤ人の熱心党は神の国を武力によって獲得するものと考え、パリサイ派は律法遵守によってもたらされるものと考えていた。しかしイエスは神の国（神の支配）を自身の宣教の中心においていた。特にここで神の国は、永遠のいのちという概念と相互交換可能なことばとして使われている。

4 ニコデモは、「人間は経験の集大成」と考えていたであろう。人生を形成するありとあらゆるものの束こそ自分である。その自分が霊的に再生するとはどういうことか、理解できないでいた。
5 ニコデモの無理解に対して、イエスは再び霊的新生を強調している。神の国にはいる3節では「神の国を見る」となっているが、意味はまったく同じ。しかし変化している重要なのは、水と霊（御霊）から生まれるという点（3節では新しく生まれる）。イエスは、ここでニコデモがイスラエルの教師（10節）であることを意識して、旧約聖書の預言を想起させるアプローチをとる（参照エゼキエル36・25～27）。ポイントは、聖霊の働きを通して与えられる霊的新生を意味する（参照1コリント12・3、テトス3・5）。
6～7 肉から生まれる者は肉であり 肉という

語は、ここではパウロがよく用いる「罪深い性質」という意味では使われていない。1・14にあるように、肉体を意味する人間性のこと。自然な人間の誕生は、人類の地上の家族に属する人々を産み出す。しかしそのままで神の子ともたちにはならない。霊（御霊）から生まれる者は霊（御霊）である。人間が神の子ともたちになるためには、聖霊によってキリストを受け入れる道だけである。あなたがた（複数）世界のすべての人に対して、ニコデモが言ったわたしたち（2節）に対して、イエス特有のユーモアともとれる。

8 ハブル語のルアッハもギリシア語のプニューマも、「御霊」だけでなく、「息」、「風」という意味を持つ。しかし新約聖書で御霊以外の意味で使われるのは極めてまれである。人は風を支配したり理解したりできないが、風の効果を見抜くことはできる。私たちは風の音を聞き、草が揺れるのを見物し、雲が動くのを見、嵐を肌で感じる。同様に聖霊の働きを人が支配することは不可能だが、その働きの結果を証しすることはできる。

9～10 ニコデモが聖霊による新生について反論したとき、イエスは驚きを隠さなかった。教師（ホ・ディダスカロス）には冠詞（ホ）がついているので、教授とか、有名な教師との意味。墮落した人間の英知では、聖霊の働きを理解できない。
11 わたしたち ここでイエスは、ご自分の弟子たちも含めて語っている。
13～15 青銅の蛇を仰ぎ見て助かったように（民数記21・4～9）、十字架のイエスを信じて救われる。

聖書 ヨハネ3・1～17
タイトル 神の国に入るには
中心聖句 だれでも新しく生まれなければ、神の国を見ることはできない。
ヨハネ3・3
目標 よい行いによって神の国に入ることはできず、新しく生まれることが不可欠で、新しく生まれることが何を意味するかを発見する。

導入
先週は、イエス様に出会って弟子になった3人の漁師の話でした。今日は、どうしたら神の国に入れるのかわからないでいた学者先生が、イエス様のもとをたずねたお話です。

(起) ストーリーを語る
ある夜、イエス様のもとにこっそりやってきた人がいました。その人の名はニコデモといい、厳格に律法を守るパリサイ人で、誰もが知ってる有名な学者であり、そのうえユダヤの国会議員をしている立派な人でした。ニコデモは聖書をよく知っていたはずですが、神の国に入るには、自分は何をしたら良いのか悩んでいました。ですから、評判の教師であるイエス様のもとに、人目をはばかりながら、こっそり夜に訪れたのです。
イエス様は彼を招き入れて1対1で話をなさいました。ニコデモは「先生、私たちはあなたが神

からこられた教師であることを知っています」と挨拶しました。するとイエス様は、その挨拶を聞き流すかのようにして、彼の心にある本当の質問に対して答えられたのです。「よくよくあなたに言うておく。だれでも新しく生まれなければ神の国を見ることはできない」と。ニコデモは驚きながら言いました。「年寄ったわたくしがまだ母親の体に入って生まれなおすことなどできないことです」。この問いに対して、イエス様は、「だれでも水と霊によらなければ、神様の国に入ることはできない」と教えられました。

新しく生まれるとは、もう一度お母さんのおなかの中からやりなおすことではありません。よい行いをつむことで、神の国に入ろうとすることをやめることです。神の国は人間の努力で入れる所ではありません。水とは悔い改めを表し、霊とは聖霊に導かれることを表します。新しく生まれるとは、何かを自分の身に付けて自分のために生きる生き方をやめて、聖霊様に導かれて神と共につかえる生き方をすることです。

イエス様はまた、「風は思いのままに吹いている。あなたはその音を聞くが、それがどこからきてどこへ行くかは知らない」と語られ、人を新しく生まれさせる神様の霊の働きは、人の目には見えなくても確かにあるのだと教えられました。
さらにイエス様は民数記の話をなさいました。昔モーセに率いられていたイスラエルの民が不信仰でつぶやいたとき、彼らを滅ぼすために火の蛇が送られました。しかし、たいてい蛇にかまれても命が助かった人たちがいました。それは、モーセの言葉を信じて、竿に掲げられた青銅の蛇を見上

げた人たちでした。青銅の蛇を見上げた人が救われたのと同じように、イエス様が自分たちの罪の身代わりに十字架で死んでくださったことを信じる人も救われることを教えてくださったのです。

(承) 学ぶべき真理
ニコデモさんは、パリサイ人として律法を厳格に守り、学者としてよく勉強し、国会議員として人のために働きました。ですから彼は、これ以上どんなよいことをすれば神の国に入れるのだろうと迷っていたようです。しかし、自分の努力やよい行いと引き換えに、神の国に入れる人は一人もいません。ただ心から自分の罪を悔い改め、イエス様の十字架を仰ぐこそ、聖霊に導かれて、神の国に入ることができるのです。

(転) 生活への適用
あなたは、ニコデモさんのように、まじめだから、よく勉強したから、よい行いをしているから天国に行けると思っていますか。あなたは新しく生まれた経験がありますか。

結論
新しく生まれるとは、自分の力で神の国に入ろうとする生き方をやめて、イエス様を信じる信仰によって神の国に入ろうとする人になることです。まず自分の罪を正直に悔い改め、聖霊様に何でも相談して、毎日を導いてもらえば、神様が私たちを神の国にふさわしく変えてくださいます。あなたも今日、新しく生まれませんか。神様は、待っておられます。

ワーク A

導入のヒント
皆さんは、お母さんのおなかから生まれてきました。でも、魂も新しく生まれなければなりません。そうでないと罪を持ったまま滅んでしまいます。ニコデモさんはイエス様にそのことを教えてもらいました。私たちも罪を悔い改め、イエス様の十字架を信じて、新しく生まれかわり、天国へ向かって歩く新しい命を頂きましょう。
ワークについて
色画用紙を3枚用意します。1枚ずつみことばを貼り、ひもでつるして壁掛けにしましょう。

ワーク B

●質問1 「新しく生まれる」という抽象的な言葉をお話の中で子どもたちにわかりやすい言葉で説明してください。
●質問2 「水と霊とから生まれる」ととき、人は神の子として新しくされます。
●質問3 子どもたちにとって「新しく生まれる」とことはどのくらい大切なことなのでしょう。新生することの大切さと、イエス様が心から待っておられることを伝えてください。
●讃美歌 「さあノイエスをまをんじましよう」(ふくいん子どもさんびか 1番)
●今日のお祈り 「神様、罪を悔い改めて、イエス様を信じます。私を神の子として新しく生まれさせてください」

ワーク C

●第1問 聖言を書き、何回か読みます。
●第2問 聖言の中の「神の国を見る」ところで、できる人について、聖言そのものから考えます。
●第3問 「新しく生まれる」ところの意味するところを質問しています。「新しく」とは、外見ではなく、霊において新しくなることです。答えを書いたあと、「イエス様を信じた人は、新しく生まれ変わったんだね」と、教師自身が感動を持って語ってください。
●第4問 聖言の自分への適用です。子ども自身が「私が神の国に入るには……」と、問題を自分にあてはめて考える時を持ちましょう。

ワーク D

●イエス様が言われた神の国に入る道とは、私たちが普通考えることは全く違うことを発見しましょう。イエス様の言われる道がどんなにすばらしく、ただで与えられるものであり、しかもイエス様の大きな代価と犠牲による恵みであるかを知ることができたら、どんなにステキでしょうか。
●子どもたちに、神の国に入りたいという願いが起こされるように祈ってください。子どもたちの真実な声を聞いたなら、真剣に受けとめ、いっしょに祈ってあげてください。

中高科へのヒント

●考えてみよう
1 ニコデモが主イエスのもとに、夜やってきたのはどうしてでしょうか。
2 「新しく生れる」、「水と霊とから生れる」とは、どういうことですか。
3 主イエスが引用された青銅のへびの出来事を確認しましょう(民数記21・4～9)。
4 主イエスは私たちのために何をしておさいましたか。それは何のためですか。
5 どうしたら神の国に入ることができるのでしょうか。
●自分にあてはめてみよう
1 あなたの心の中にも、「夜」の部分がないでしょうか。
2 あなたは新しく生まれるという体験をしましたか。
3 あなたは神の国に入る確信がありますか。その確信の根拠は何ですか。
●話し合ってみよう
1 ニコデモはユダヤ人の指導者でありながら、霊的真理をどうして理解することができなかったのでしょうか。
2 聖霊はどのように働いて、人を新しく生まれさせられるのでしょうか。
3 永遠の命とはどのようなものでしょうか。
4 新しく生まれた体験があれば、分かち合いませんか。

聖書 ヨハネ4・1-26

テーマ サマリヤの女

序論

今週学ぶ人物は、当時のユダヤ人が嫌っていたサマリヤ人の女性であり、しかも道徳的にも芳しくない状況にいる人であった。また彼女は自分から主に会いに来たのではない。普通のユダヤ人は、サマリヤ人を嫌うゆえに、ヨルダン川沿いの道を通っていたのに、主イエスは彼女に会うために、わざわざサマリヤを通過されたのである。

一、生まれに渴く

△時は昼の十二時ごろであった。一番暑くて普通の人は水をくみにこない時刻に、井戸にやってきた女性に、主は「水を飲ませて下さい」とおっしゃった。当時、ユダヤ人がサマリヤ人に、また男性が女性に、このような依頼をすることはありえないことだったので、彼女は非常に驚いた。そして△としてサマリヤの女のわたしに△と尋ねている。彼女の第一の渇きがみごとに引き出された。彼女は、自分の生まれに渴いていたのだ。主の答えは、△もしあなたが神の賜物のことを知っていたならば、あなたの方から願ひ出て、その人から生ける水をもらったことであろう△であった。神の賜物とは、神の御子イエス・キリストであり、主にある永遠のいのちである（ローマ6・23）。永遠を知るなら、あなたは渇かないというのだ。たとい家柄や人種、才能、容姿などにコンプレックスをもち、生まれに渴いていても、あ

なたは渇かなくなる。神は永遠を与えられるからだ。1+無限=無限である。2+無限も、1万+無限も無限である。たとい自分が1でしかなくとも、与えられた神の賜物は無限の永遠である。何に無限を足しても無限なのだ。だから生まれに渇く必要は全くない。神の賜物である主イエスと、そこからくる永遠のいのちをいただくなら、すべての人は無限の賜物を持つようになる。

二、人生に渴く

毎日、苦勞して水をくみに来ていたこの女性は、△その水をわたしに下さい△と叫んだ。主は、彼女の渇きをさらに引き出されたのだ。この女性は、不幸な結婚生活をし、人生に渴いていた。5人の夫がいたが、今は夫ならぬ者と暮らし、真昼に水を汲みに来なければならぬ人生に渴いていた。淫蕩な女性との解釈もできるが、△夫△と言われている以上、正式な結婚だったと思われる。死別ゆえのレビート婚だったのかもしれない。ただ、過酷な人生を歩んできたことは間違いない。主は彼女に、△生ける水△を与えたと語られた。その水は、飲んでもまた渇く普通の水ではない。△その人のうちで泉となり、永遠の命に至る△とある水である。7・39をみると、この△生ける水△とは聖霊のことだとわかる。この世のパートナーとは別れる時がある。しかし聖霊はいつも共にいて下さり、決して見捨てられない。人生が重くつらい時、聖霊にパートナーになってもらい、聖霊と共に歩むなら、湧き上がる恵みが生まれ、人々を潤していく人生が変わる。生ける水である聖霊

を受けるなら、私たちは人生に渇かない。

三、天の父に渴く

そこでこの女性は、主を預言者と考え、彼女が長く悩んでいた問題を尋ねた。第三の渇きが引き出されたのだ。礼拝する場所は、サマリヤ人が主張する△この山△（ゲリシム山）なのか、ユダヤ人が言う△エルサレム△なのかとの問いである。彼女は、自分たちの礼拝はこれでいいのかと、天の父に渴いていたのだ。主は、△霊とまこと△をもって父を礼拝する△なら、どこであってもいいと答えられた。しかもその時は△今△きている△と。当時は、動物をいけにえにすることにによって礼拝をしていた。しかしそれはひな型である。神を信じる者が自分を△生きた、聖なる供え物△（ローマ12・1）としてささげることが、霊的な礼拝である。△霊とまこと△とは、霊的に、かつ具体的に、と理解してよい。私たちは、霊とまことによっていつでもどこでも礼拝することができる。そう礼拝するなら、父に渴くことはない。

結論

主と出会ってこの女性が変わった。もはや人目をはばからず、水がめをそこに置いたままにして、他のサマリヤ人に大胆に証しするようになった。主は、現在でも、あなたに会うために、わざわざおいでくださる。私たちは、生まれに渇き、人生に渇き、父に渴くことがある。しかし、神は御子を与え、御霊を与え、ご自身を与えて、渇きを癒してくださるのだ。

研究資料

(足立)

テキスト

1-3 水の象徴は続いている（参照2・6、3・5、4・10以下）。ここにはイエスがユダヤを去って、ガリラヤに行った経緯が記されている。イエスは受難のときまで、パリサイ派の挑戦を避けるようにされた。イエスの時はまだ来ていない（参照2・4、7・6、8・30、8・20）。
4 イエスは北方の辺境ガリラヤに向かったが、この旅には取るべき道が2つあった。一つはヨルダン川東にあるペレヤを迂回して北に向かう道であり、もう一つはユダヤからまっすぐ北上して、サマリヤを通過する道であった。イエスは後者を選び、ユダヤ人から嫌悪されていたサマリヤ人の地に、足を入れる。
5 スカルという名の町にイエスは到着した。
6 イエスがヤコブの井戸に着いたのは、昼の12時ごろであった。日中の高い気温と長旅により、イエスののはは渇き、からだは疲れていた。
7-8 埃にまみれたイエスが一人のサマリヤ女性と△を△を交わしたのは、真昼の太陽に照らされる水汲み場であった（ニコデモとの対話はエルサレムの町でも夜）。通常水を汲むのは朝か夕方（創世記24・11）。何か理由があると考えられる。サマリヤ人は、アッシリヤの植民地政策により入植した異邦人とユダヤ人の混血であった（列王下17・24）。ユダヤ人の男性が見知らぬサマリヤの女に声をかけ、水を所望したとは当時の常識からす

るときわめて大胆な振る舞いであった。
9 サマリヤの女の驚きのことば。当時ユダヤ教のラビは女性に話しかけることはなかった。しかもユダヤ人が軽蔑したサマリヤ人。△実際すると△とされた語（スコンラオマイ）は、△ともに使用する△という意味を持つ。これから考えると、サマリヤ人の使用した容器には祭儀的な汚れが付着している、これに触れると、その汚れが乗り移るようになる。したがって、ユダヤ人は決してサマリヤ人と容器（食器）を共に使わなかったという意味になる。しかしイエスは関わりを求められた。
10 イエスが飲み水を所望したのはこの女性との接点を持つためであった。イエスは即座に神の賜物と生ける水に話を発展させる。
11-12 この時点で女性は霊的な渇きについて話し合う気持ちを持っていなかった。彼女はイエスの語りかけに対して井戸水にこだわって返答した。生ける水と訳されることばは、流れている水という意味と、水に象徴される霊的いのちを表す意味と、どちらにも使われる。イエスが言おうとしたのは、霊的生命の水であったが、女性は当然のように湧き水と理解した。

13-14 イエスは井戸水と彼自身が与える水との相違を強調している。物質的な水はどの渇きを一時的には潤す。一方、霊的な水は永遠への渇きを満足させる。また、井戸水は厳しい労働によって汲まなければならなかった。しかし霊的な水はその人の中で溢れるようになる。イエスは彼女に湧き出てやまぬ愛の生命を与えようとしていた。

15 ニコデモが新生を字義的に受けとめたように（3・4）、彼女もイエスのことばを愚鈍に捉えていた。彼女の関心は、自分個人の利便さであり、水汲みの手間を省くこと。

16 唐突ではあるが主題の変更が起こった。しかし不自然ではない。サマリヤ女性はいまだにイエスが誰であるかわからず、彼が提供したいのちの水の意味を誤解していた。しかしイエスは彼女の生活と魂の罪に光を投げた。即ち配偶者の問題。
17-18 このとき彼女と一緒に暮らしていたのは夫ではなかった。彼女は見知らぬ人に自分の不倫を告白したくなかったであろう。しかし彼女はイエスの前で偽ることはできず、正直に現実を話している。イエスも彼女の主張をありのまま受けとめている。

19-20 イエスの関わりに対して、彼女が畏怖の念を抱いたことは間違いない。にもかかわらず、彼女は自分の現実に向き合うことに恐れを感じて、か、主題を礼拝論に移行させることによって、光から逃れようと少なからずもがいている感じもする。しかし彼女は△このイエスこそ、長年ユダヤ人とサマリヤ人との間で戦わされてきた礼拝論争に明確な答えを与えてくれる人だと確信した。

21-24 礼拝問題に対するイエスの解答は、①礼拝の場所は地域的に限定されない。②御霊（フニユーマ）と真理（アレセイア）をもって神を礼拝するのが真の礼拝。③神は霊である。

25-26 救い主を待ち望むこの女性の信仰に対して、イエスは△ご自身を明らかにされた。

聖書 ヨハネ4・1〜26

タイトル 渇きを癒してくださる神様
中心聖句 わたしが与える水を飲む者は、いつまでも渇くことがない。

ヨハネ4・14

目 標 私たちの渇きを、父、御子、御霊の神は癒してくださることを発見する。

導入

これは、ユダヤ人が普段敵対視して近づかないでいたサマリヤを、わざわざイエス様が通過されたときの出来事です。そこには、人生に渇いた女性がいまいました。イエス様はわざわざこの人に会うためにサマリヤを通過されたようです。

一、御子（神の賜物）

イエス様は、サマリヤのスカルというところで、旅の疲れを感じて、井戸の側で休んでおられました。しかし、あいにく水を汲むおけがありません。そこに、昼の12時ごろ、ひとりの女の人が出てきました。イエス様は、彼女に「水を飲ませて下さい」と声をかけられました。彼女は大変驚きました。なぜなら、その当時、男の人が人目につくところで女の人に話しかけることはなかったからです。その上イエス様はユダヤ人のラビであり、彼女はユダヤ人が口もきかなかったサマリヤ人だったからです。ですから、「どうしてサマリヤの女のわたしに水を飲ませてくれとおっしゃるのですか」と尋ねています。するとイエス様は、「あなたが神の賜物のことを知り、わたしがだれであるかを知っていたならば、あなたの方から願い出て、生ける水をくださいと求めるでしょう」と答えられたのでした。

二、御霊（生ける水）

イエス様はさらに、「この水を飲む者はだれでも、まだかわく。しかし、わたしが与える水を飲む者は、かわかない。さらにその水がその人のうちで、泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう」と語られました。そこで彼女は、「その水をわたしにください」と訴えました。するとイエス様は彼女に夫を連れてくるように言われました。しかし、彼女はかつて4回も結婚しましたが、今は正式な夫でない男の人と暮らしていたのです。それで今日も、皆が水を汲みに来ない昼の暑い盛りに、人目を避けてこの井戸まで来ていたのです。

彼女の第二の渇きは、人生とパートナーについてでした。彼女は5人の夫と別れ、夫でない人と暮らすような過酷な人生でした。しかし、イエス様の与える水は聖霊様です。決して見捨てず、人を共にいて導いてくださいます。この水を飲むなら決して渇かず、かえって命の水があらわれます。

三、御父（礼拝を受ける方）

夫のことまでイエス様が見とおしておられることを知った彼女は、イエス様が預言者だと思いました。そこで、日頃からの渇きであった問題、神様を礼拝する場所はゲリシム山か、エルサレムかということを探ねます。そこでイエス様は、霊なる神様を礼拝するのには場所関係ないことを教えられ、霊とまことをもって礼拝するなら、誰でもどこでも礼拝できることを教えられました。

彼女の第三の渇きは、自分たちの礼拝は正しいかどうかの問いでした。イエス様は、父なる神様を心から具体的に礼拝するのなら、どこでも誰でも礼拝できることを教えられたのです。

結論

御子と御霊と御父の神様が、そろって人間に与えられています。神の賜物は御子です。御子イエス様は、永遠の命を与えてくださいます。命の水は御霊です。御霊は決して見捨てないパートナーです。礼拝を受けるのは御父です。誰でも、どこでも、霊とまことをもって礼拝するのなら、父なる神様は、天の父となってくださいます。

どんな心の渇きも、父、御子、御霊の神様が癒してください。皆さんも、苦しいこと、悲しいことがあったら、イエス様に打ち明けてください。サマリヤの女は、水がめをそこにそのままに残して町にゆき、イエス様を証しするようにになりました。皆さんも必ず癒されます。

ワーク A

導入のヒント

のどが渇いたらお水が飲みたくなりますね。だれどたくさん飲んで、また渇くでしょう。イエス様は私たちに、いつまでも渇かない水をあげようとおっしゃいます。それは魂に注がれる救いの水です。サマリヤの女はこの水をもらって、本当の喜びにあふれ、町の人たちにイエス様のことを伝えました。イエス様がくださった救いの水は、なくなるどころかますますあふれるようになります。私たちもこの水をいただきます。

ワークについて

指人形を作りましょう。サマリヤの女の人になって、イエス様のことを知らせましょう。

ワーク B

- 質問1 お話を思い出して答えましょう
- 質問2 イエス様は私たちを招いておられます。
- 質問3 サマリヤの女性は、イエス様をキリストと信じたとき、イエス様から聖霊をいただいた喜びを伝えるものとされました。
- 質問4 私たちの内に悩みがあるとき、イエス様を信じて打ち明けるなら、私たちに聖霊を与えてくださり、喜びに満たしてください。
- 讃美歌 「歌いつづけよう主のあいを」
- 今日のお祈り 「神様、私もイエス様を救い主と信じます。私の心を聖霊で満たし、喜びでいっぱいにしてください。」

ワーク C

● 第2問 「かわくことのない水」の本質を質問しています。それは、聖霊様です。第3問に移る前に、「聖霊様が心の中におられると、かわくことがないんだね。つまり、あれが足りないとか、つまらないとかいうような不満がなくなるんだね」と話し、次問の導入にします。

● 第3問 かわくことがない毎日、喜びと感謝に満ちています。でも実際の生活では、悲しいことやつらい事などもあります。しかし、倒される事があってもそれらに打ち負かされる事はなく、悲しみも喜びに変えられる日が来るのです。心の表面は波立つとも、心底に主は最善をなさるとの確信を持って、いつも主に顔を向けて歩みましょう。

ワーク D

● イエス様の与える水とは何でしょうか。霊的で、抽象的な言葉だけで話をするなら、わかりにくいかもしれません。一人一人、コップをもって水をくみ、飲んでみましょう。そして、水についての質問に答えながら、イエス様の与える水とは何かを深く考えられたらと思います。

● 最後の文を読み、イエス様を信じることで、その水が与えられることを話してください。

中高校へのヒント

● 考えてみよう

- 1 サマリヤ人の歴史を調べてみましょう。
- 2 主イエスがわざわざ「サマリヤを通過しなければならなかった」のはどうしてですか。
- 3 サマリヤの女の渇きの原因はどこにありますか。
- 4 「永遠の命に至る水」を得るためにはどうしたらよいでしょうか。

● 自分にあてはめてみよう

- 1 あなたは心の渇きを感じたことがありますか。それはどのような時で、どのように対処しましたか。では、心の渇きはこうしたらいやされるのでしょうか。
- 2 あなたの中に、「永遠の命に至る水が、わきあがる」ことを妨げている何かがありませんか。
- 3 あなたは毎週どのような思いで礼拝をさげていますか。

● 話し合ってみよう

- 1 主イエスが旅の疲れを覚えられたのはどうしてでしょうか。
- 2 ヨハネ福音書では、聖霊はどのような働きをされるお方として記されていますか（1、3、6、7、14、16、20章）。
- 3 「まことの礼拝」とは、どのような礼拝のことでしょうか。
- 4 心の渇きを感じた体験、またその渇きがいやされた体験があれば、分かち合いましょう。

聖書 ヨハネ5・1～9
テーマ ヘテスタの池の病人

序論

今回は、長い間病気で苦しんで絶望している人の癒しを扱う。この出来事をおいて、神の祝福を受け取るには、どうしたらよいかを教えらる。

一、不信仰な世界

この出来事は、ヘテスタの祭りのときにエルサレムでおこった（過越の祭りかどうかは議論がある）。にぎやかな祭りの最中にも、ヘテスタ（「あわれみの家」という意味）の池のまわりには、癒されることを望んでいる多くの病人がいた。この池の周囲には八五つの廊があり、そこには八病人、盲人、足なえ、やせ衰えた者などが、大ぜいからだを横たえていた。その理由が、その後の「」の中で説明されている（事情を知らない人のために追加されたのだろう）。八水が動いた時まず先にはいる者は、どんな病気にかかっていたか、いやされたからである。とは、当時の言い伝えであった。何とか元気になりたいと思って、迷信にわずかな望みを託していたのだ。それは信仰ではなく、不信仰である。神は確かに癒してくださる。しかし神の恵みが、人を争わせることはない。先に入った者が癒されるというのは、人間中心の考え方に他ならない。これこそ現代社会の真相である。自らのわずかな力をもって競い合い、われさきにと利得を目指す姿が見られる。バックストンは、祭りについて、「神は此儀式に由て何人でも恵

み給いとう御座います。けれども不信仰によりて生命の源を離れましたから悉く癒を受けません」と記している（『ヨハネ伝講義』90頁）。

二、信仰による救い

ヘテスタに、三十八年のあいだ、病気に悩んでいた人があった。彼は、最も長い間、癒しを求めていた人物だったのではなからうか。しかし、癒されることなく、時間は過ぎていった。癒される人は何人かいただろうが、彼はそのたびにほそをかむ思いだったろう。彼は絶望しきっていた。そんな彼に、主は、「なおりたいのか」と問われた。主は彼が求めるか否かを見られたのだ。しかし彼は、ヘテスタを池の中に入れてくれる人がいません。とつぶやき、求めようとしなかった。38年もたてば、自分を世話して池に入れてくれた両親も亡くなっていただろう。彼は、ヘテスタの池を前にして、絶望していた。

「主に拠て恩恵を受ける者は其俦で他の力なしに恩恵を頂戴することが出来ます」（バックストン）。自分の力や他人の力に頼ろうとするなら、信仰は生まれぬ。人間の力に絶望するときこそ、信仰が生まれる機会である。聖書中、主に求めない人が救われる記事は少数だが、ナインのやもめやマリヤの女の場合も含め、これらの場合には共通点がある。みな絶望していたということだ。主は絶望している人には、自ら出向かれる。

三、救いの根拠

主は彼に、へ起きて、あなたの床を取りあげ、

そして歩きなさい」と命じられた。「馬鹿なことを。歩くことができないから、こんなに長い間苦しんできたのではないか」と思うなら、彼は癒されなかっただろう。しかし、主の権威あることは聞いた彼は、それに従った。言い伝えではなく、主の言葉を信じたのだ。すると、とても起きる力がないと思っていたのに、起きあがれた。粗末な床もたため、それをとりあげて歩くことができた。救いの根拠は、主イエスにある。言い伝えでもなく、自分の力でも、人の援助でもない。

命令する者は命令に対して責任がある。できないときの責任は、命令した者にある。命令するとは、命令を受けた者に根拠があるのでなく、命令した者に根拠があるのだ。自分に根拠をおくのではなく、主に根拠をおくことが信仰である。この信仰によって、彼の病は癒された。「お言葉どおりこの身になりますように。お言葉ですからやってみましょう」と、自分に根拠をおかず、主に根拠をおくことが信仰なのである。

結論

自分に絶望する者は、自分に根拠をおかず、主に根拠をおくようになる。自分のわずかな力を根拠にして他の人と競い、われさきに得しようとする、神の恵みを受け取れない。ヘテスタの他には多くの病人がいたが、癒されたのは彼ひとりだけであった。土地神話、学歴神話という迷信を信じ、人を押し退けて競い合い、そこに何がいったのか。神の恵みは人を競わせない。それに絶望し、主に根拠を移す者が、神の恵みを受け取るのだ。

研究資料

（足立）

ヨハネ福音書5章にはイエスによる1人の男の癒し（奇跡）が記されており（5・1～9）、その後この事件にまつわる長い論争が詳述されている（5・9b～47）。この事件は後に続くイエスとユダヤ人との論争を導入する役割を果たしている。しかもその論争は当時のユダヤ社会で重く大視されていた安息日律法の問題であった。そしてイエスの前に立ちふさがったのは安息日律法を護持する当時のユダヤ人指導者たちだった。

テキスト

1 福音書記者ヨハネは、様々なユダヤ人の祭りに事実に基づく話を繰り返し結び付けている（参照、2・13「過ぎ越しの祭り」、6・4「過ぎ越しの祭り」、7・2「仮庵の祭り」、10・22「宮きよめの祭り」、11・55「過ぎ越しの祭り」）。しかしこの5章の出来事は、何の祭りであったかを確証できない唯一の事例である。ユダヤ人の祭 この表現はいろいろな読み方が可能。おそらく仮庵の祭りか、過ぎ越しの祭りを暗示しているのであらう。しかしヨハネがこの箇所だけ祭の名前を記さなかった理由を私たちは十分に理解できない。この箇所でのユダヤ人の祭りへの言及は、エルサレムでのイエスの存在を説明する歴史的事件以上の意味を持たないように思われる。文脈から考えても、4・46～54の奇跡がガリラヤで起こっていたことに、ヨハネの視点が意識される。

2 羊の門 ギリシャ語原文には門と訳されていることはない。これはネヘミヤ記3・1、32、12・39に記されている「羊の門」との関連で補足されたものである。ヘテスタ 池の名前は多くの写本にいろいろと確認されている（ヘテスタ、ヘサザ、ベルゼサ、ベスサイタ）。様々な写本の照合からだけでなく、1960年に最初に公表されたクムラン文書にある共通したヘブル名という支持をも得て、ヘテスタが正しいとされている。5つの回廊を持つヘテスタの池に関しては、考古学上の発掘からその存在が堅く確認されている。

3a 大ぜいがからだを横たえていた 横たえていたと訳される動詞（カテケイト）は未完了時制なので、当時習慣的に病に苦しむ人たちがその池の周りに伏していたことを示している。多くの有力な写本には、3節後半と4節は欠落している（新改訳脚注参照）。この部分は3節前半や7節を説明するために、超自然的説明を加えようとして後代に加筆されたものと考えられる。したがってギリシャ語本文からは削除すべきものとして、福音主義に立つ聖書学者も支持している（テニイ、モリス、カーソン）。

5 ヨハネはその男が38年間病気で苦しんでいたことを私たちに伝えている。彼は長い年月の間その回廊に連れて来られていたのかも知れない。おそらく水の動きを期待してそこにいたのであろう。ヨハネはその男が寝たきりの病だとは認定していないが、7節から考えると手足が麻痺していたと見るべきであらう。

6 イエスはその男が池のそばに横たわっているのを見た。ヨハネは、イエスがどのようにその男の病の長さを知ったかを、私たちに伝えてはいない。ただ単純にイエスが知ったことを記している。また多くの他の癒しの奇跡が起こった場合とは対比的に、その男はイエスに近づいていない。イエスがその人に近づいたのであった。なおりたいのか イエスの質問はあまりにも明白に見える。もちろんその男は癒されたのであろう。しかしこれはそう単純ではない。あまりにも長い間病を患ってきた人というものは、一定の思考パターンから踏み出そうとはしないものである。その男は自分が癒されないことを認め、自らあきらめていることを知っていた。彼はほとんど間違いなく乞食であり、それ以外に生活する術はなかった。しかしイエスはイエシアタイプを持って彼を導いている。それは、その男自身が癒されたいという意思を明確に表示するためだった。

7 この男は、イエスが現実に人を癒すことができるかとは認めていない。彼が、イエスが誰であるかを知らないのは驚くべきことではない（5・13）。彼は、自分が長い間癒されないこと、また水が動いたとき池に入ることができなかったことを説明している。それは、彼を運んでくれる人がいなかったという主張。

8 イエスの力あることが彼を癒す。起きて（エゲイシ）ということばは、終わりの日の、神の子の力ある声を取り起している（5・28～29）。9 床をとりあげて 癒しが完全である証明。

聖書 ヨハネ5・1-9
タイトル たった一人が癒された
中心聖句 起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい。ヨハネ5・8
目標 迷信や自分の力で競うことに絶望し、主と主の言葉に根拠をおくとき、神の恵みを受け取れることを発見する。

導入

ベテスタの池の周りには、たくさんの病人がいたのですが、イエス様が癒されたのは、たった一人だけでした。どうしてイエス様は、彼だけを癒されたのでしょうか。

(起) ストーリーを語る

ユダヤ人のお祭りのときのことです。大勢の人たちがエルサレムに集まっていました。イエス様もエルサレムに来て、神殿近くのベテスタの池にやってこられました。ベテスタとは、「あわれみの家」という意味です。その池には言い伝えがあって、神の御使いが降りてきて水を動かすとき、一番先に飛び込んだ人は、どんな病気であっても癒されると言われるのです。ですから、そこには、目の見えない人、歩けない人、やせ細っている人などが、ひしめき合っていました。みんな、自分が一番先に池に飛び込んでやろうと、待ち構えているのです。しかしこれは迷信です。神様の恵みが、人を争わせることはありません。弱った体の病人

に残るわずかな力で争わせるとは、ひどい迷信です。

そこに、38年もの間、病気にかったまま、歩くこともできない男の人がいました。彼はもう長い期間、池のそばにいました。でもまったく癒されません。水が動いたとき真っ先に飛び込んでいくつもりなのですが、何回やっても癒されません。そのたびに、誰かに先をこされたのだと思い込んでいたようです。そして、38年も経つと、もう彼を動かしてくれる両親や兄弟もなくなってしまうたのでしよう。「誰もわたしを水に入れてくれる人がない」と、絶望していました。

そこにイエス様がおいでになりました。そして、この病気の人の目を留められ、「なおりたいのか」とお尋ねになりました。当然、イエス様は彼の願いを知っておられたのですが、告白をもとめられたのです。彼は、「わたしを池の中に入れてくれる人があります。わたしがいりかけると、ほかの人が先に降りて行くのです」と言いました。イエス様は、「起きて、あなたの床を取りあげ、そして歩きなさい」と命じられます。するとどうでしょう。この人はたちまち癒され、自分で床を取り上げて歩いて行けたのです。

(承) 学ぶべき真理

38年間病気の人は、迷信にも裏切られて、絶望していました。でも、それが良かったのです。迷信と自分の体に残ったわずかな力に頼って争っている他の人は、癒されませんでした。イエス様は、絶望している人のところに自ら出向かれます。そして命令されるのです。病人に命令するって、お

かしいですよ。でも、いつもイエス様は命令されます。それは、こういうことです。あなたが、担任の先生に、理科室からピーカーを借りてくるように命令されました。あなたが、持って行くのとすると、理科の先生に、「何のために持って行くのか」と根拠をきかれました。自分が遊ぶためという根拠だったら貸してもらえませんが、担任の先生の命令が根拠だったら貸してもらえますね。命令するということは、命令を受けた人に根拠があるのではなく、命令した人に根拠があるのです。イエス様が命令されたら、イエス様が根拠です。この病気の人は、迷信や自分の力に根拠をおいていました。しかしそれに絶望して、イエス様が根拠になられたのです。そして癒されました。

(転) 生活への適用

皆さんの周りにも、おかしい迷信や神話がありませんか。また自分のわずかな能力を競い合うことに必死になっいませんか。学歴神話とか受験戦争って、ベテスタの池の状況にそっくりですね。人と競って良い成績をとれば、得するのでしょうか。それともイエス様に根拠をおいて、神様の御用をするために勉強するのでしょうか。

結論

池の周りにいた他の病人は、迷信と自分のわずかな力を根拠にして争って、神様の恵みを受け取りませんでした。しかし、信仰とは、イエス様に根拠をおくことなのです。主がおっしゃるから、そのとおりこの身になりますようにと明け渡す人が、神様の恵みを受け取るのです。

ワーク A

●暗唱聖句 (2月2日〜23日)
行け、あなたの信仰があなたを救った。
(マルコ10・52)

●導入のヒント

病気になったこと、ありますか。テレビも見られないし、友だちとも遊べないし、つらいですね。そんなとき、神様にお祈りしましょう。神様は私たちの祈りを聞いて、必ず答えてくださいます。信じていきましょう。

●ワークについて

枕と敷布に色を塗って切りぬき、点線で半分に折る。パンチで黒マルに穴をあけ、糸などでまわりをかがる。病人になった人の気持ちを考え、話をしましょう。

ワーク B

●質問1 お話を思い出して答えましょう。イエス様は、この人の信仰を引き出されました。
●質問2 あきらめるしかない状況の中でも、イエス様は信じる者に働きかけてくださいます。
●質問3 イエス様は、38年間病気の男の人だけでなく、子どもたち一人一人にも信仰を与え、信仰に答えて力を与えてくださるお方です。
●讃美歌 「主のちからを」
(ブレイスワールド25番)

●今日のお祈り 「神様、どんなときもあきらめず、イエス様を信じることができるようにしてください。」

ワーク C

●第1問 ヨハネ5・8を書きます。38年間病気の人の気持ちを考え、その人に言われた言葉であることを心にためましょう。

●第2問 イエス様がお言葉を与えられると、あつという間に病気はなおりました。

●第3問 私たちも、なおしてほしいところを、率直にイエス様に申し上げましょう。ワークの例以外にもありましたら、とりあげて一緒に祈りしてください。38年間の病気を、お言葉一つで癒されたイエス様ですから、子どもたちの願いにも必ず応えてくださる事を、しっかり握らせてください。

ワーク D

●1月から、いろいろな人がイエス様に出会って、新しい人生を歩み始めているのをみてきました。
●子どもたちもイエスさまに出会えるように願います。1番から順に質問に答えながら、イエス様がどんなお方か知ることができるように導いてください。子どもたちが、イエス様を心に受け入れて、新しい人生を始めることができれば幸いです。

中高校へのヒント

●考えてみよう

- 1 ベテスタの池に行ってから癒されるまでの病人の心の動きを想像してみましょう。
 - 2 主イエスから「なおりたいのか」と言われたとき、病人はどうして素直に「なおりたいです」と答えられなかったのでしょうか。
 - 3 主イエスが「なおりたいのか」とわかりきったことを尋ねられたのはどうしてでしょうか。
 - 4 病人が8節の主イエスの命令に素直に応答できたのはどうしてでしょうか。
 - 5 病人はどのようにして癒されましたか。
- 自分にあてはめてみよう
- 1 なかなか祈りが聞かれなかったり、道が開かれなかったりすると、あなたはどのような心境になりますか。
 - 2 「良くなりた」と願いながらも、真剣に祈って努力することをしなかったり、最初から諦めたり、人を妬んだりしていませんか。
 - 3 病人が池のそばで縛られていたように、あなたも何か(家庭環境、劣等感、罪、悪習慣等)に縛られ、あなたらしい生き方ができないままにいることはありませんか。
 - 4 あなたがその束縛から解放されるためにはどうしたらよいでしょうか。
- 話し合ってみよう
- 1 信仰によって病や束縛から解放された体験があれば、分かち合いましょう。

聖書 マタイ15・21～28
テーマ カナンの女

序論

主は、その生涯の中で一度だけ、異邦人の地、
△ツロとシドンとの地方△に行かれた。すると、
その地方の△カナンの女△が、主に会おうとやっ
て来たのである。当時のユダヤ人は、サマリヤ人
を嫌うとともに異邦人も嫌っていた。しかも女性
である。今まで学んだ誰よりも難しい立場の人物
と思われる。しかし、主は彼女の願いを聞き届け
られた。彼女は何ゆえ、神の恵みを受け取れたの
だろうか。

一、あわれみ深い神

彼女には、悪霊にとりつかれて苦しんでいる娘
がいた。彼女が△わたしをあわれんでください△
と叫び続けていることに注意しよう。「わたしを」
と、娘のことを自分の問題として、主に求め続け
ているのである。そんな彼女に対して、主イエスは、
3度も冷たい態度をとられた。まず、△ひと言も
お答えにならなかった△。次に、△イスラエルの
失われた羊以外の者には、つかわれていない△と
おっしゃった。さらに、異邦人の蔑称である「犬」
（清濁が理解できないという意味）という言葉を用
いて、△子供たちのパンを取って小犬に投げてやる
のは、よろしくない△とおっしゃった。主がこんな
態度を取られたのは、△この女を追い払ってくだ
さい△と言う弟子たちに、異邦人に対する神の本
当の御心を教えるためであったのだらう。

う。確かにカナン人は、イスラエルを惑わし、偶像
崇拜に導いた民族であった（エズラ9：1）。それ
でも、神は異邦人を御心にとめておられる。求
め続ける異邦人を、神は無視されることはないの
である。

彼女は、神はあわれみ深く、求める者に必ず報
いてくださることを確信していた。それゆえ、ど
んなに理不尽と思われる目にあっても、求め続け
たのだ。出てきて、叫び続け、叫びながらついて
ゆき、近寄って拝し、願いを訴えた。そしてつい
に△あなたの信仰はみあげたものである△と、主
に称賛されるに至った。神はあわれみ深く、求
める者に必ず報いてくださることを信じる信仰が、
神の恵みを受け取れたのである。

二、全能の神

彼女が最初から△主よ、ダビデの子よ△と叫ん
でいるのは、主が人々からそのように呼ばれてお
り、多くの病人を癒しておられたことを、彼女が
知っていたからに違いない。主が祈禱師や魔術師
をはるかに越えるお方であることを、彼女は悟っ
ていたのだ。冷たくあしらわれたにもかかわらず、
△女は近寄りイエスを拝し△たことも、主を神と
認めていた証拠である（「拝し」というギリシャ
語は、神を礼拝するとき用いられる）。

主が、△犬△という言葉ではなく、△小犬△と
言われたことに注意しよう。彼女はその言葉に
気づき、とっさに△小犬もその主人の食卓から落
ちるパンくずはいたできます△と答えた。パンで
なくて、パンくずだけでも神のあわれみがあれば、

娘がいやされるのに十分だという信仰の表れだ。
彼女は神の全能の力を信じていた。これは、マ
タイがすでに記録しているローマ人の百卒長の、
△主よ、わたしの屋根の下にあなたをお入れする
資格は、わたしにはございません。ただ、お言葉
を下さい△という信仰に酷似している（8・8）。
全能の神は、どんな時、どんな場所でも、すべ
ての病を癒すことができるという信仰が、百卒長
にも彼女にもあったのだ。主はこの信仰に、△女
よ、あなたの信仰はみあげたものである。あなた
の願いどおりになるように△と答えられた。△そ
の時に、娘はいやされた△と聖書は証言している。

主は、この地方では彼女以外の人物と会ってお
られない。たった一人の異邦人女性と出会うため
に、イスラエルの国境を越えられたのだ。どんな
民族でも、イスラエル人と同様に、神の恵みを
いただくことができる。「パンくずでもいただけるな
ら」という信仰があれば、異邦人でも、女でも、
選民イスラエルでも、何の関係もない。神の恵み
は注がれている。ただ、信仰がないと受け取れな
いのである。

結論

主イエスさえも称賛なさる信仰とは、どんな理
不尽な状況でも、求める者に報いてくださると信
じて求め続ける信仰、パンくずでもいただけるば
癒されるという神の全能を信じる信仰だ。神のい
ますことと信じる者に報いてくださることを信じ
るなら、神の恵みを受け取ることができる。

研究資料

(足立)

マタイはこれまでも、御国の福音が異邦人にも
開かれていることを提示してきた（1・3～5、
2・1～12、8・5～13、28・34、11・21～22）。
そしてこの箇所では、イエス自ら異教の地に出か
け、異邦人に福音の恵みを注がれたことを記して
いる。

テキスト

21 イエスはそこを出て 厳密にどこから出てき
たかは記されていないが、イエスがパリサイ人や
律法学者たちと論争された場所のことであろう（参
照15・1）。ツロとシドンとの地方 別名フェニキ
ヤ地方。ツロはイスラエルのガリラヤ国境から約
20キロ北にある地中海に面した海港都市のこと。
シドンは、そのツロよりさらに北方約35キロの場
所に位置する。イエスがイスラエルの国以外に出
かけたのは、この箇所とピリポ・カイザリヤ地方
（16・13）だけであるが、後者の場合には、土地
の人と言葉をかわしておられない。

22 カナンの女 マルコはこの女性を、スロ・フ
エニキヤ生まれのギリシヤ人と記している（マル
コ7・26）。このことからマタイは旧約聖書の背景
を意識して、この女性が契約の民とは区別された
存在であることを示唆していることがわかる。カ
ナン人は、イスラエルの民が出エジプト後に侵入
したパレスチナ先住民の名称。当時の社会的背景
からして、カナンの女がユダヤ人イエスに娘の

癒しを求めることは、きわめて大胆な行為。ダビ
デの子よ この表現は旧約聖書には出てこない。
もともとダビデの息子ソロモンをさしたが（サム
エル下7・12～13）、次第にメシヤを指す称号にな
った（詩篇132・11）。カナンの女がこの称号を口
にしたのは、驚きそのものである。旧約聖書の背
景を持つていなかったであろう彼女が、ダビデの
子というメシヤ待望の称号を口にした。しかし、
どれだけの自覚があったかは定かではない。わた
しをあわれんでください 彼女の姿勢はパリサイ
人や律法学者とは全く対照的であり、ただ主のあ
われみにすがらただけである。娘の苦しみを自らの
痛みとして受けとめている。叫びつづけた（エウ
ラゼン）という動詞は、未完の時制であるので、
繰り返し叫び続けたことを意味する。

23 イエスはひと言もお答えにならなかった イ
エスが助け求める者の叫びを無視したのは他に例
を見ない。求める者が異邦人であっても、癒しを
行われた事例はこれまでにもある（4・24、8・
5～13、9・28～30、11・21）。したがってイエス
の沈黙の理由は人種の問題ではなく、カナンの女
性の信仰を試すためであったと推察できる。この
女を追い払ってください 弟子たちにとってはこ
の女性に煩わしい存在（参照マルコ7・24）。

24 このイエスの返答は、直接には弟子たちに対
するものである。イスラエルの家の失われた羊
この表現はイスラエルの民全体を指している。彼
らは契約の民であるにもかかわらず、羊飼いに象
徴される指導者を失っていた。イエスは既に10章
で弟子たちに派遣のメッセーシを語られた。その

場合、イスラエルの家の失われた羊に言及された
（10・5～6）。これは宣教における主の計画の
順序を意識していること。つまり伝道におけるイス
ラエルの優先性。

25 再びこの女性はいエスにすがりつく。彼女は
ここでも「娘を」ではなく、わたしをと言ひ、自
分と娘が一つであるかのように主の前に出ている。
拝して（プロスキネオー）という動詞は、しばし
ば礼拝に用いて用いられる（マタイ2・2、8、
11、4・9、10、14・33、20・20、28・9、17）。
26 イエスはここでも自らが第一義的にイスラエ
ルの宣教に遣わされていることを説いている。子
供たちとはユダヤ人、小犬とは異邦人のことを指
す。パンはいエスが与える祝福を象徴するもの。
また、小犬という表現は決して異邦人を差別した
ものではなく、イエス特有のユーモアであったと
推察できる。主は偏狭な民族主義からではなく、
彼女から真の信仰を引き出そうとして温かく語っ
ておられたであろう。

27 イエスのユーモアに基づく発言に対して、カ
ナンの女も見事に返答した。彼女は宣教における
神のイスラエルへの優先性を受け入れている。し
かしその上で、異邦人に対する主のあわれみをも
信じている。食卓から落ちるパンくず テーブル
から落ちてくるものの小さな切れ端を意味する。
彼女の食いがりが強調されている。

28 字義的には「あなたの信仰は大い」となる。
主が信仰をほめたのは、カナンの女とローマの百
人隊長だけ（8・10）。ともに異邦人であった。弟
子たちは信仰が薄い（8・26、14・31、16・8）。

聖書 マタイ15・21・28
タイトル イエス様にほめられた
中心聖句 でも、小犬もその主人の食卓から
落ちるパンくずはいいただきます。
目 標 神様は必ず報いてくださるという
信仰と、パンくずほどの力でも癒
せるという信仰が、称賛されるこ
とを学ぶ。

導入

イエス様は、生涯で1度だけカナン地方へ行かれたことがあります。そこで、一人の女性に会われました。彼女も求めることがあって、イエス様に近づいてきたのです。ところがイエス様は、珍しく、ノーとおっしゃいました。

(起) ストーリーを語る

カナン地方は、ユダヤ人でない人たちが住んでいる異邦の地でした。ですから、普通ユダヤ人はそこに行くことはありませんでした。昔、偶像礼拝に引き込まれたことがあるので、カナン人を嫌っていたのです。しかし、イエス様は敢えて出向かれたようです。さて、そこに女の人がいて、彼女にはひとりの娘がいました。でもかわいそうなことに、悪霊にとりつかれて苦しんでいました。そこで、イエス様のことを聞いていたこの女はイエス様についてきて、「主よ、ダビデの子よ、わたしをあわれんでください」と叫びつつたのです。

ところが、イエス様はまるで何も聞こえないかのように、返事をされません。

そこで、イエス様の周りにいた弟子たちは、叫びつつける彼女をうるさかつて、「この女を追い払ってください」とイエス様に訴えました。すると、イエス様は初めて口を開きになり、「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外の者には、つかわされていない」と、そっけない返事を返されたのでした。

ところが、イエス様のこのような態度にもかかわらず、彼女はさらにイエス様に近寄っていき、イエス様を礼拝しながら、「主よ、わたしをお助けください」と訴えたのです。彼女は、娘の悪霊を追い払ってもらうために必死です。しかし、イエス様はさらに、「子供たちのパンを取って小犬に投げてやるのは、よろしくない」とおっしゃいました。犬とは、異邦人をさげすむときにユダヤ人が使った悪口で、大が何にでも鼻をつっこむことから、清いか汚いかがわかってないという意味で用いていました。ところが、これを聞いた彼女は、失望するどころか、イエス様が使われた「小犬」という言葉を受けて、「小犬もその主人の食卓から落ちるパンくずは、いただきます」と、答えました。この答えを聞かれたイエス様は、「あなたの信仰は見あげたものである」と、彼女の信仰をたいへんほめられたのです。

それは、何度もう冷たくあしらわれたのに、彼女は、「イエス様は必ず悪霊を追い出してください」と、あきらめなかったからであり、パンくずほどの恵みでも悪霊を追い出す力があると信じていたからです。そして、イエス様が「あなたの願い

どおりになるように」とおっしゃると、娘はいやされたのです。

(承) 学ぶべき真理

どうもイエス様は、彼女の信仰を弟子たちに見せるために、3度もノーと言われたようです。だってイエス様は全能の神様で、最初から彼女がどんなに素晴らしい信仰の持ち主かを知っておられたのですから。たぶん、弟子たちに、異邦人にもイエス様から称賛されるほどの信仰をもった人がいて、神様の恵みは異邦人にも与えられることを知らせたかったからだと思います。

イエス様にほめられるほどの信仰ってすばらしいですね。神様は求める者には誰でも報いてくださるという信仰と、パンくずほどでも神様の力があれば悪霊は追い出されるという信仰が、ほめられるのです。

(転) 生活への適用

皆さんは、イエス様にほめられるほどの信仰でしょうか。神様が、祈っていることにすぐにこたえてくださらないときはどうしますか。あきらめないで、求め続けますか。

結論

信仰とは、神のいますことと、神は信じる者に報いてくださることを信じることです。まさに、カナンの女は、この信仰をもっていました。私たちも、パンくずほどでも神様の恵みを受ければ願いはかなうこと、また神様は求める者には誰でも報いてくださることを信じましょう。

ワーク A

● 導入のヒント

皆さんは、教会の先生に注意されたり、間違っていることを指摘されたとき、どうしますか。腹をたてて、「もう教会には来ない」とって思いますか。でも心を低くして聞くなら、神様は私たちに大切なことを教えてくださいます。目に見える人の言うことを素直に聞くことは、目に見えない神様に聞くことに似ています。

● ワークについて

紙皿の中央にみこばを貼り、耳に色を塗ってはりつけ、目、鼻、口などを書き込み、壁掛けにしましょう。

ワーク B

● 質問1 お話を思い出して答えましょう。女の人はイエス様があわれみ深いお方であることを信じていました。

● 質問2 祈りが答えられ、感謝できるまで、祈り続けることの大切さに気づきましょう。

● 質問3 子どもたちの願いを、イエス様に祈りましょう。これからも時々、「〇〇ちゃん、続いてお祈りして」と声をかけてあげてください。

● 讃美歌

「いつくしみふかき」

● 今日のお祈り 「神様、必ずお祈りに答えてくださることを信じます。」

ワーク C

● 第2問 イエス様が、すぐに女の人の願いに答えられなかったのは、理由がありました。まず、女の人の信仰をさらに引き上げるためです。次に、弟子たちに、イスラエルの人々の救いの大切さと、異邦人にもすばらしい信仰が与えられる事を知らせるためです。

● 第4問 子どもたちもすばらしい信仰を持ちたいと思うことでしょうか。子どもたちの実情に合わせ、この問いをしないで、すぐ良い信仰が与えられるようにお祈りしてもよいです。イエス様を信じていると言いつつ、その信仰生活が充実していないようならば、この問いによって取り扱いの時を持つとよいでしょう。

ワーク D

● カナンの女の信仰は、本当に驚くべき信仰です。ここまでイエス様に冷たく対応された人が他にあるでしょうか。少しのこと、あきらめたり、おこってしまったりしやすい私たちに、あきらめないで、信頼していくことの大切さが教えられます。子どもたちにもそのことが少しでも伝わって、どんなことがあってもイエス様を信頼していくべきことを確認したいと思います。

中高校へのヒント

● 考えてみよう

1 これまで主イエスは、病人に対してどのような態度を取られていましたか。
2 カナンの女の執拗な願いに対して、主イエスがすぐに答えられなかったのはなぜですか。
3 主イエスはどのような態度で彼女に接しておられたでしょうか。冷たく突き放した態度だったでしょうか。
4 信仰の大きさを称賛されたローマの百卒長(マタイ8・5・13)や、逆に信仰の薄さを叱責された弟子たち(マタイ8・26、14・31、16・8)と、ここで学んだカナンの女とを比較してみましょう。

● 自分にあてはめてみよう

1 もしあなたがカナンの女の立場であったならば、どうしていたでしょうか。
2 あなたはカナンの女のように主イエスに期待し、諦めないで求め続けたことがありますか。
● 話し合ってみよう
1 主イエスのゲツセマネでの祈りと、カナンの女の態度との共通点を挙げてみましょう。
2 執拗に祈り求めても病が癒されない等、祈りが聞かれない場合がありますが、どう考えたらよいでしょうか。
3 諦めないで祈り続けた結果、祈りが聞かれた体験、逆にこれは御心になかった祈りではないと示された体験があれば、分かち合います。

聖書 マルコ10・46～52
テーマ バルテマイ

序論

ベテスタの池にいた38年患っていた男は、絶望しているところに主の方から出向かれ、癒された。カナンの女は、拒絶されてもあきらめず求めてその信仰を表し、娘を癒していただいた。では、バルテマイはどうか。彼の場合こそ、典型的な主との出会いだといえる。

一、執拗に求める

バルテマイは盲人のこじきであった。目が見えない者は、当時の社会では働くことができなかった。もので、ものこいをするしか生きる方法はない。しかし、目が見えないゆえに、人々の話をよく聞いていたのだろう。ヘナザレのイエスが来られたことを知って、ヘナザレの子、イエスよ、わたしをあわれんでくださいと叫び出した。彼は、人々の話から、主がヘナザレの太刀ではなく、ヘナザレの子であることと認めていたのだ。彼の叫び声が邪魔になったので、一緒に歩きながら主の教えを聞いていた人々多くの人々は、彼をしかって黙らせようとした。でも彼はそれにひるまず、へますます激しく叫びつづけた。彼の執拗な求めは、カナンの女と非常に似ている。

彼は、確かに主のお話の邪魔になっただろう。人々も、何かの悪い因果で盲人に生まれついたり誤解し、彼が活れているので、主に近づけたいとないと考え違いをしていたらう。しかし主は、

彼を招かれた。主は、求める者に報いてくださる方だ。私たちもへまひつづけて、求めつづけることに、主にある解決を見つける。

二、招きに応える

バルテマイの叫び声を聞かれた主は、へ彼を呼べと仰せられた。人々は驚いたが、これが主の御心であった。へ喜べ、立て、おまえを呼んでおられるの言葉に聞いたバルテマイは、喜びのあまり、へ上着を脱ぎ捨て、踊りあがってイエスのもとにきた。そこで主は、へわたしに何をしたいのかと問われた。当然主は、彼の求めを知っておられたが、わざわざ問われたのだ。主は、その人の求めを告白させられる。ベテスタの池の病人にも、へなおりたいのかと尋ねられた。主がご存じだから、わざわざ言わなくていいのではない。主に知られていることを、自分が知るために、告白が必要なのだ。

バルテマイは、へ先生、見えるようになることですと、答えている。このへ先生と訳された語は「ラボニ」で、復活の主に会ったマリヤが言ったのと同じ、親しみのこもった語である（ヨハネ20・16）。彼が、初対面の主をそう呼んだのは、主の言葉に暖かい響きを感じたからであらう。

主は、私たちを招いてくださり、求めを聞いてくださる。私たちがその招きにこたえて、告白するならば、主の豊かな恵みを受けるのである。

三、主に従う

真実な応答をしたバルテマイに、主はへ行け、

研究資料

(足立)

テキスト

46 イエスと弟子たち一行は、エリコにきた。エリコはエルサレムから約25～30km離れた地点に位置する。イエスがエルサレムで十字架刑に処せられるまで、1週間以内の時期と考えられる。マルコ福音書における最後の癒しの奇跡がこの場面である。バルテマイは、盲人のこじきであったと記されている。当時は社会保障など全くない時代。身体に障害を持つ人、特に目が見えない彼は、社会から疎外された状態にあった。特にユダヤ社会では、病气や不幸は、本人が犯した罪と何らかの因果関係があると信じられていた（ヨハネ9・2）。すわっていた（エカセト）という動詞は未完了時制であるので、継続を表し、すわりつばなしてあった事を意味する。座って食糧をすることだけが、彼の生きる術であった。

47 バルテマイは、ナザレのイエスのことを耳にして叫びだした。この機会を逃すと彼はイエスに会うことが不可能と感じたのかもしれない。ダビデの子イエスとは、救い主の称号。このことばは、イエスがダビデの子孫と言うだけでなく、ダビデに与えられた約束を受け継ぎ、成就するお方であることも意味している（サムエル下7・12～16、歴代上17・11～14、詩篇89・29～37、イザヤ11・1、10、エシミヤ23・5～6、30・9、エゼキエル34・23～24、ホセア3・5）。わたしをあわれんでくださいとは、詩篇の中で悩める者が神に述べ

る叫びである（例。詩篇4・1、6・2、41・4、10・51・1、109・26、123・3）。正規の教育を受けていなかったバルテマイが、イエスをどれだけ理解し、ダビデの子が持つ神学的意味をどれほど把握していたかは、はなはだ疑わしい。しかし、目が見えぬゆえに、霊的敏感さは鋭く研ぎ澄まされていたことは十分想像できる。

48 乞食バルテマイを叱責している群衆は、疑いなく彼を邪魔者と見なし、黙らせようとした。彼らは、イエスが一人の盲人に時間を費やすよりも、さらに重要なことをしなければならぬと主張しているようである。しかし彼は一貫してイエスに叫び求めている。叫びつづけた（エクラセン）と言う動詞の時制は未完了なので、バルテマイがひたすらイエスに叫び続けたことを示している。

49 ついにバルテマイの叫びはイエスの耳に達した。群衆が騒ぐ中で、バルテマイの肉声が直接イエスの耳に入ったかどうかはわからないが、イエスは多くの群衆よりも自分を求める一人の魂に関心を持っておられる。イエスは立ち止まって彼を呼び出された。主イエスを呼び求めるバルテマイの祈りとも言える叫びを、主はご自分の主権によって確実に聞いておられた。イエスはここでも人々にバルテマイを呼んでこさせ、イエスとの一対一の人格的な関係に導こうとされた。

50 おそらく彼の上着は、投げてもらった硬貨を包むものか、あるいは彼が道端に座するための敷物になっていたであらう。いすれにせよ、バルテマイにとつてこの上着は彼の財産と呼べる唯一の物

あなたの信仰があなたを救ったと命令された。これは、カナンの女の場合と、よく似ている。またその後、彼の目はへたちまち見えるようにになった。カナンの女の娘も、またベテスタの病人も、命令によって癒された。命令とは根拠が移ることである。主が命令されたら、主が根拠である。彼は、自分ではなく主を根拠として癒されたのだ。さらに彼は、へイエスに従って行った。彼は、その生涯、主に従い通したのではないだろうか。バルテマイという名が明記されているのは、彼が初代教会で、よく知られていたからだと思像される。マタイとルカも、比較的短いこの記事を省かないで収録していることから、それは伺える。主の命令を受けて従う者の生涯は祝福される。神と人に喜ばれ、自分自身も喜べる有意義な生涯が待っている。バルテマイは、ものこいする生涯から、主に従う生涯に変えられたのだ。

結論

主に求め、主の招きにこたえ、主に告白し、主の聖言を受け、主に従って行く。まさにこれがクリスチャンの生涯である。バルテマイは、ものこいする生涯から、主に従う有意義な生涯に変えられた。私たちもまた同様である。自分は恵まれていてもものこいする必要はないと考えている人は、ほんとに有意義な人生なのかどうか、考えてみるべきだ。主に求めているか。招きにこたえているか。告白しているか。聖言を受けているか。聖言に従っているか。謙遜になって求めるところから始めて、主に有意義な生涯にしていただろう。

であったはず。彼はそれを肌身離さず持ち歩いていただろう。しかし彼はそれさえも放り出してしまった。イエスに招かれたバルテマイの驚きと喜びがいかほどのものか、容易に察せられる。目の見えないバルテマイが踊りあがるとは、彼にとつてイエスの招きが計り知れない喜びであること示している。

51 わたしに何をしてほしいのかというイエスの問いかけは、10・36でセバダイの子のヤコブとヨハネとにイエスがした質問と全く同じことばである（単数と複数の違いはあるが）。ヤコブとヨハネは自分たちの出世を願った（10・37）が、バルテマイは、自分の目の回復をイエスに率直に申し出た。盲人の癒しは、救い主の到来と結びついている（イザヤ29・18、32・3、35・5）。

52 再び信仰の重要性が強調されている（参照2・5、5・34、9・23～24、6・5～6）。イエスは初めて会ったバルテマイに、あなたの信仰があなたを救ったと言っている。バルテマイは、律法学者やパリサイ人のような聖書知識を持っていたのでもなく（聖書を学ぶことは大切だが）、弟子たちのようにいつもイエスと共にいたわけではなかった。彼はただ道端に座って、ここぞとばかりイエスに叫んだだけであった。イエスは彼の彼と関わりをもち、バルテマイの中に自分への信頼を明確に認められたのである。ここで言う信仰とは、キリストご自身への単純な信頼である。彼は見えるようになり、イエスの行かれる所についていた（バルテマイはイエスの十字架の目撃者となる）。

聖書 マルコ10・46〜52
タイトル 目が見えるようになった
中心聖句 行け、あなたの信仰があなたを救った。マルコ10・52
目標 求めること、告白すること、聖言に従うことによって、神様の恵みを受けとれることを発見する。

導入

しばらく、イエス様に出会った人たちの話を続けていきます。今日の人は、イエス様に出会って、神様の恵みを受け取った、典型的な例です。

(起) ストーリーを語る

イエス様と弟子たちは、旅を続けてエリコの町に着きました。そして、イエス様が、弟子たちや大勢の群衆とエリコから出かけられるときのことです。そこに、テマイの子であるバルテマイという男の人がいました。彼は目が見えず、通りすがりの人から、物やお金をもらって生活していました。その日もいつものように何かをもらおうとして道端に座っていたのです。しかし、道がさわがしく、何かいつもとちがいます。病人を癒したり、奇跡をおこなっておられる救い主が通られていたのです。彼は、「ダビデの子イエスよ、わたしをあわれんでください」と叫び出しました。彼は、目が見えないことで、今までにどんなに辛い生活をしてきたことでしょう。目が見えないのは、自分か

先祖が何か悪いことをしたせいだと誤解され、いじめられたことも、しばしばあったことでしょう。でも働くことができないために、人から施しを受ける以外に生きていく手段はなかったのです。なんとか癒してほしい、そんな思いが一気に爆発して、彼は大声で叫びました。

それを聞いた周囲の人たちは、彼を叱って黙らせようとしました。しかし彼は、かえって、もっと大きな声で、何度も叫びつづけました。その声を聞かれたイエス様は、立ち止まりました。そして、「彼を呼べ」とおっしゃったのです。イエス様がバルテマイを招かれたことを聞いた人々は、彼に「喜べ、立て、おまえを呼んでおられる」と伝えました。そこでバルテマイは、上着を脱ぎ捨て、踊りあがってイエス様のもとへ行きました。

そこで、まずイエス様は「わたしに何をしたいのか」と尋ねられました。バルテマイは「先生、見えるようになることです」と、彼の長年の願いを告げます。当然イエス様は彼の願いを知っておられました。しかしイエス様はいつも、求めてきた人に「何をしたいのか」と問われ、告白を求められます。それは、神様に知られていることを、自分が知るためなのです。告白すると、神様はちゃんとご存じだと自覚できます。

イエス様は、彼の答えを聞くとすぐに、「行け、あなたの信仰があなたを救った」とおっしゃいました。すると、たちまち彼の目が見えるようになりました。ここでもイエス様は、病人に命令しておられます。それは、バルテマイが何かをしたからではなく、イエス様が根拠となるためです。

そして、目が見えるようになったバルテマイは、そのままイエス様について行きました。バルテマイの話は、短い箇所ですが、3つの福音書に全部のつています。そして、今まで学んだ人との違いは、バルテマイだけ実名であるということです。おそらく、彼はこのままイエス様の弟子になっていたのでしょうか。

(承) 学ぶべき真理

これは、典型的な病気のいやしの出来事です。それは、まず、あきらめないで主に求めること。次に、何を求めているのか告白すること。そして、神様の聖言に従うことです。これが、神様の恵みを受け取る秘訣なのです。

(転) 生活への適用

あなたは、神様に何か願っていますか。「いちいち祈らなくても、神様は知っておられる」と思っていますか。神様が知ってくださっていることを、自分が確信するためには、告白が必要です。罪を犯してしまったときも告白が必要ですよ。そして、聖言に従っていますか。神様はあなたへの計画をもっておられます。それを聞いて行う時、祝福を受けとれるのです。

結論

神様の恵みを受け取るためには、必要なことがあります。求めること、告白すること、聖言に従うことです。すると、人にもものをもらって生きるしかなかった者が、神様と共に歩んで、神様と人のために役立つ者になることができます。

ワーク A

● 導入のヒント

皆さんの一番の願いはなんですか。バルテマイは、目が見えるようになることでした。それは魂の目です。罪によって見えなくなっている私たちの心の目も、イエス様の十字架で罪を赦して頂き、見えるようにしていただきましょう。そうしたら、本当に大切なものは何か、生きる目的は何かもはっきりとわかります。

● ワークについて

両方のバルテマイに色を塗り、半分に折って割りばしをはさみ、ペーパークラフトを作りましょう。

ワーク B

● 質問1 バルテマイは、自分の必要を知り、ただだイエス様のあわれみを求め続けました。

● 質問2 病気や目に見える悪いところにはすぐに気づきますが、目に見えない心の罪にはなかなか気づくことができません。

● 質問3 心の罪から来る悪いところは、イエス様でないと直すことはできません。気づいたら、イエス様に訴えて、直していただきましょう。

● 讃美歌 「すくいぬしにきたれ」

(ふくいん子どもさんびか18番)

● 今日のお祈り 「神様、私にも悪いところがあります。イエス様を信じます。どうか心もからだもきよめてください。」

ワーク C

● 第2問 まだ見えるようになっていなくても、イエス様が呼んでおられるという知らせを聞いただけで、バルテマイは喜び踊りました。目が見えるようになっていたときの喜びは、もっと大きかったでしょう。バルテマイの喜びの顔を描き、その気持ちを言葉でも表してみましょう。さらに自分がイエス様に会った時の気持ちと顔も描いてください。

● 第3問 イエス様に出会って、具体的な変化があらわれます。10の例から何個でも答えてください。目に見える変化ばかりではなく、見えない変化もあります。「この例のほかにもないですか」と分級の中で聞いてみるのも良いでしょう。

ワーク D

● バルテマイのように、イエス様に向かって執拗に求める人は、そう多くはいません。周りの人にとどめられてもやめようとしないう、真剣な叫び。現在は、叫び求める必要を感じないほど、物のあふれた時代です。バルテマイの状況、悲しみ、苦しみに目をとるとき、もしかしたらその叫びの意味が目が開かれるかもしれません。

● 霊的な渇きのおこるとき、人生の悲痛を感じる時、子どもたちがイエス様に叫ぶよう祈ります。

● 来週は洗足をしたいと思えますので、ご準備ください。用意するものは次週のワークに書いてあります。子どもたちに持ってきてもらっても良いと思います。

中高校へのヒント

● 考えてみよう

- 1 主イエスがバルテマイに「わたしに何をしたいのか」とわかりきったことを尋ねられたのはどうしてでしょうか。
- 2 同様の問いに対して、弟子たちは何と答えましたか(マルコ10・35以下)。
- 3 目が見えるようになったバルテマイはどうしましたか。なぜそのような行動を取ったのでしょうか。

● 自分にあてはめてみよう

- 1 主イエスから「わたしに何をしたいのか」と尋ねられたならば、あなたは何を願いますか。
 - 2 あなたが主イエスに一番に願い求めなければならぬものは何でしょうか。それを願い求めないでいて、他のどうでもよいものを一生懸命に願い求めているのでしょうか。
 - 3 あなたも、バルテマイのように主イエスに従っていきたく願いますか。
- 話し合ってみよう
- 1 「わたしをあわれんでください」というバルテマイの叫びには、どのような思いが込められていたでしょうか。
 - 2 「求めよ、そうすれば、与えられるであらう」という約束があるのに、執拗に祈り求めても答えられないのはどうしてでしょうか(ヤコブ4・2〜3、1ヨハネ5・14他)。

聖書 ヨハネ13・1～15
テーマ 足を洗われた弟子

序論

これは、主イエスが十字架につけられる前夜の出来事である。主は、いまだに未熟な弟子たちを「最後まで愛し通され」て、彼らの足を洗われた。「最後まで」とは、「残るところなく」「どこへまでも」とも訳される。主はこの洗足によって、最後まで愛を、残るところなく表されたのだ。

一、足は差し出せないところ

弟子たちの足は、もうすぐ主を裏切つて逃げ去る足であった。特にユダは、主を売り渡しに走る直前であった。またペテロも、主を決して裏切らないと豪語したが、3度も主を否定して激しく泣いて悔いることになる(ルカ22章)。また、他の弟子たちも、もうすぐ主を見捨てて逃げ去るのである。主はそれらすべてを「存じ」の上で、弟子たちの足を洗われた。4節の「脱ぐ」という語は、「命を捨てる」という意味ももっている(10・11、15)。上着を脱ぐことが、奴隷の姿をとることと命をすてることを象徴しているのだ。ペテロは、もったいないという気持ちからだろうが、へたししの足を決して洗わないで下さいと言う。しかし、主はへたしわだしが洗わないなら、何の係わりもなくなる」と仰せられた。あわてたペテロは、「どうぞそ手も頭も」と言い出す。すると主は「すでにからだを洗った者は…全身がきれい」／＼しかし、みんながそうなのではない／＼と言われた。足とは何か。それは、自分では聖くできないところのことだ。裏切ってしまうのが人間なのだ。しかしそのような人間であることを認めて、主に「存じ」のような者です」と自らをさし出せば、主が聖くしてくださる。11弟子はさし出し、ユダはさし出さずに命を絶った。私たちも、彼らと同じく、自分ではどうしても聖くできないところをもっている。そのことに気づいたとき、絶望しても、ユダのように命を絶てはいけぬ。絶望しても、主に期待し、主に委ね、主にさし出そう。「存じ」のようなものです」と。すると主が上着を脱ぎ、手ぬぐいをとって聖くしてくださる。しかし、そうしないなら、あなたも主との関係を失っていく。かつては信じたことがあり、かつては体を洗ったことがあるが、今は汚れた人、主と係わりのない人、ユダのような人になってしまうのだ。

二、足は必ず汚れるところ

当時は、道を歩くなら、雨期は泥で、乾期はほこりで、必ず足は汚れてしまった。だから家にはいる時には、足を洗う水が出されるのが普通だった(ルカ7・44参照)。足とは、歩めば必ず汚れるところを表している。私たちも一週間この世で生活するなら、意図的に罪を犯すことはなくても、失敗はある。弱さや愚かさ、未熟さはある。だからこそ、いつも主に告白し、赦されていく必要がある。私たちが告白してさし出すとき、主はそれをきよめてくださるのだ。

三、足は洗い合えないところ

最初にこの家に入ったとき、弟子たちはだれも他の弟子の足を洗おうとはしなかった。この少し

前には、誰が一番偉いかと論争していた弟子たちだった(ルカ22・24)。彼らは、一番偉い者は、かつて仕える者だと教えられたばかりなのに、互いに牽制しあっていた。もし、自分が洗えば、自分が一番軽く扱われると思っていたのだらう。約3年間、主から多くのことを教えられていながら、弟子たちは「兄弟を愛する」という最も大切なことが実行できていなかった。そんな高慢な弟子たちの足を、主は洗われたのだ。主は、全員の足を洗い終えて、へ主であり、また教師であるわだしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互に足を洗い合うべきである／＼とおっしゃった。これは、模範であった。

結論

へたしがつかわす者(20節)とは、聖霊のことである。聖霊を受け入れる者は、主イエスを受け入れる。主イエスを受け入れるなら、父なる神を受け入れるようになる。このように聖くする働きは、聖霊から始まる。主が天に上られた後、足を洗うのは聖霊である。聖霊は、私たちが自分で聖くできないところ、どうしても汚れてしまうところ、互いに洗い合えないところを、聖くしてくださる。私たちにできることは、自分では聖くできないことを認めて、足をさし出すことなのだ。

研究資料

(足立)

福音書記者ヨハネにとって、イエスの死が中心的な位置を占めていたことは明らかである。ヨハネ福音書の13～19章に、イエスの十字架前後と十字架の出来事が記されている。このことは、イエスの全生涯に12章(1～12章)、十字架に至る24時間以内に7章(13～19章)、そして復活に関して2章(20～21章)と、福音書の記録を割り振っていることからわかる。以上のことから、彼の強調点はどこにあるかは明白で、ヨハネは私たちに中心の出来事が何かを読み誤らせない。

テキスト

1 過越の祭の前に 過ぎ越しというテーマは本福音書の至るところで展開されてきた(2・13、23、6・4、11・55、12・1、参照18・28、39、19・14)。イエスは弟子たちを最後の晩餐の席で洗足に招き入れた。これは世の罪を取り除く神の小羊として、イエスご自身を究極の過ぎ越しとして見なしてのことであった(1・29)。父のみもとに行くべき自分の時 今まで来ていなかったが、天の父によって決定されたイエスのクライマックスの時(例2・4、7・8)。すなわち十字架に架かる時。彼らを最後まで愛し通された 1～12章で、ヨハネは愛という名詞と愛するという動詞を9回使っているが、13～17章においてはそれらを30回使用している。つまり愛がこの一連の出来事を支配するテーマである。

2 イスカリオテのユダがどういう理由でイエスを裏切るに至ったかは十分に説明されていない。しかし、聖書は悪魔がユダの心にイエスを裏切る思いを入れたと記している。

3 1節ですでに表現されている内容が繰り返されている。すなわちイエスが自らに対する天の父の御心を十分承知しているということ。ここでは二つの重要なことが付加されている。イエスは、世を去るべき自分の時が来たことだけではなく、自分は神から出てきたということ、そして父がすべてのものを自分の手にお与えになったことも知っていた。

4～5 上着を脱ぎ、手拭を腰に巻き、人の足を洗い、手拭で足を拭くことは、奴隷のする仕事であった。しかも異邦人の奴隷のすることであって、ユダヤ人奴隷には免除されていた。それほど賤しい奉仕を、イエスは弟子たちにしたのである。ここで特に重要な点は、イエスがユダの足も洗ったという事実である。イエスはユダが自分を裏切る過程の中にあつたことを知っておられたが、ユダの足を洗うことを止められなかった。このことは、真にイエスの弟子になった人々は、奉仕の受け手がそれに値しないからといって自分の行う奉仕を止めてはならないことを意味している。真のイエスの弟子は、自分の気に入らない人にも仕えるのである。イエスはユダをも愛していた。

6～7 疑いなく、弟子たちの全員はイエスがなさった洗足によって、深く当惑させられたであろう。そして彼らのたいいていの者たちは、沈黙を余

儀なくされたであろう。そこでペテロがその沈黙を破って尋ねた。あなたがたの足をお洗になるのですか。しかしイエスは彼に、信仰によって洗足に服従することを求めた。弟子たちは、救い主は十字架につき、崇められるべきお方だとまだ理解していなかったため、十字架を予表する象徴的行為(洗足)を受けとめられなかった。ペテロと他の者たちは、後に理解することになる。8～9 わたしの足を決して洗わないで下さい ペテロの態度に、彼の性格上力強いものが感じられる。彼はイエスの提示を跳ね除けているが、その意味するところが何であるかがわかっていない。もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしと何の係わりもなくなる イエスの洗足の行為には象徴的意味がある。イエスは、特別な食事の席だから、足を洗うことに意味を持たせているのではない。イエスはまさに死のうとしていて死ぬのである。彼の死によってもたらされるきよめを受けることなくして、キリストのものとなる方法はない。もしイエスが十字架の血潮によって私たちを洗ってくださらなければ、私たちは彼との関係をもてない。弟子たちの足を洗うことは、イエスの「行為による贖え」であった。私たちは自分の努力によって救いを獲得することはできない。しかしキリストは彼に信頼する者すべてをきよめ、罪から解放し、救いに招き入れてくださる。一度キリストの救いに与った者は、汚れた部分だけを洗ってもらえば良い。

聖書 ヨハネ13:1-15
タイトル 足をさしたぞう
中心聖句 しかし、主であり、また教師であるわたしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたもまた、互(い)に足を洗い合うべきである。
ヨハネ13:14
目標 イエス様に自分のどうしても汚れるところを明け渡すと、それがきよめられることを発見する。

導入

イエス様は、十字架にかかれる時が近づき、弟子たちとの別れが近いことを知って、彼らの足を洗われました。そのことで、弟子たちを愛し通したことを表されたのです。なぜ弟子の足を洗うことが、愛し通すことなのでしょう。

(起) ストーリーを語る

弟子たちがイエス様と共に生活して3年目のことです。過ぎ越しの祭りの前日の夕食が始まるうとしていた時でした。イエス様は、席から立ち上がった、上着を脱ぎ、手ぬぐいを腰にまかれまいた。これは奴隷の姿です。そして、水をだらいにくんできて、弟子たちの足もとにしゃがみ、彼らの足を洗って、腰の手ぬぐいでふきはじめられました。当時は、服を着たままでは、自分で自分の足を洗うことができないので、奴隷に洗ってもらって家にながっていただのです。

そして、順番はペテロに回ってきました。するとペテロは、「あなたがわたしの足を洗われるのですか」と聞きました。そこで、イエス様は「わたしのしていることは、今はわからないだろうが、後でわかるようになる」とおっしゃいます。するとペテロは、「決して洗わないでください」と断りました。「おそれおおい」と思ったのでしよう。しかしイエス様は、「もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとなんの係わりもなくなる」と言われました。そこでペテロは、「主よ、では、足だけではなく、手も頭も」とお願いしたのです。しかし、イエス様は、「からだを洗った者は、足のほかは洗う必要がない」とお答えになりました。当時は、食事の前に水浴する習慣でした。しかし足だけは、歩いて来る途中に、雨期は泥で、乾期は土ほこりで、必ず汚れてしまうのです。それで、部屋に入るときには足を洗っていたのです。全員の足を洗った後で、イエス様は弟子たちに向かって、「主であり、また教師であるわたしが、あなたがたの足を洗ったからには、あなたがたも互いに足を洗い合うべきである」と教えられました。誰かが足を洗う係をしないといけません。でも弟子たちは、「自分はいらない。一番身分の低い者がしたらいい」と、押しつけ合っていたのです。それでイエス様は、「わたしがしたとおり、あなたがたもするように」と、模範を示して下さいました。そして、「このことをしたの、あなたがたは裏切って逃げたけれど、わたしが救い主であることを信じ、またわたしがつかかわす聖霊を受け入れ、わたしを受け入れ、父なる神を受け入れるようになるためだ」と教えられたのです。

(承) 学ぶべき真理

そのとき足を洗ってもらったのは12人の弟子でした。その足は直後にイエス様を裏切る足です。イスカリオテのユダは、すぐ後にイエス様を売り渡したに走ります。また、他の弟子も、イエス様が捕らえられたとき、一目散に逃げ出します。ペテロも、3度、イエス様を知らないかと否定するのです。

足とは、自分では洗えないところ、どうしても汚れるところ、互いに洗い合うことができないところを表しています。またそれは、弟子たちの弱く愚かで、裏切ってしまうところを表しています。その弱いところ、愚かなところをイエス様にさしだして、洗ってもらいましょう。もし洗ってもらわれないなら、なんの係りもなくなくなってしまいます。すぐに裏切ってしまうような者です」と告白し、自分を明け渡す人が、イエス様が与えてくださる聖霊によって、聖くしていただけるのです。

(転) 生活への適用

皆さんにも自分ではどうしようもない、どうしても汚れるところってありませんか。どうしても弟とけんかしてしまうとか、どうしても両親に口ごたえしてしまうとかです。そんなとき、「こんな者です」と、イエス様に明け渡ししましょう。

結論

徹底して愛するとは、どうしても汚れるところを聖くすることです。私たちにできるのは、足を差し出すこと、汚れるところを明け渡すことです。

ワーク A

導入のヒント

誰かにやさしくしてもらったら嬉しいですね。「そんなことしてほしくない」と強がったり、「自分でできる」とはねのけてはいけません。低い心で受け取る時、相手の心がわかります。イエス様は十字架に命を捨てるほど私たちを愛してくださいました。イエス様の十字架を信じて救われたら、そして、イエス様の愛を本当に頂いたら、お友だちを心から愛することができます。信じていこうね。

ワークについて

自分の足型を取って、そこに色を塗りましょう。足を顔にみだてて、目・鼻・口・耳などを描くのも、おもしろいでしょう。

ワーク B

●質問1 今日のみなさんは思い出して答えましょう。

●質問2 イエス様は、弟子たちのこれから後の行動全てを知った上で愛を示し、十字架の意味を示し、弟子たちに従うように告げられました。

●質問3 好きな友だちのためだけでなく、嫌いな友だちのためにも愛を示し、行動するようにイエス様は勧めておられます。

讃美歌

「愛をください」
(友よ歌おう74番)

●今日のお祈り 「神様、どんな友だちも愛せますように、イエス様の愛をください。」

ワーク C

●第2問 弟子の足を洗われた時の、イエス様のお心を書きます。自分を裏切るユダの足も、十字架を前に逃げ去ってしまう弟子の足も洗われまいた。ご自身は、もうすぐ十字架にかけられようとしているのに、最後の最後まで、仕える姿勢で愛を表してくださいました。そして、互いに愛し合うように、弟子たちに模範を示されたのでした。

●第3問 イエス様は私たちの足をも洗ってくださいます。スペースいっぱい、イエス様に足を洗ってもらっている自分の姿と、その時のイエス様のお顔を描いてください。表情や視線なども考えて描きましょう。

ワーク D

●今日は洗足をしてみましょう。

●ある教師が、教会学校に来た生徒の足があまりに臭いので、足を洗ってやったそうです。はじめはその臭いことがたまらないので始めたことでしたが、洗っているうちに、彼に対して、何とも言えない愛情がわいてきたと聞きました。外国の教会では、礼拝の中で、お互いの足を洗いあうことがあります。そこに出席していた日本の牧師はそのことで非常に恵まれたと話していました。

中高校へのヒント

考えてみよう

1 弟子たちが率先して足を洗おうとしなかったのはなぜでしょうか(ルカ22:24)。
2 主イエスが「上着を脱ぎ、弟子たちの足を洗い、上着をつけ」た行為は、何を象徴していますか。

3 主イエスが、裏切り者ユダの足をも洗われたのは、どうしてですか。

4 主イエスが弟子たちを最後まで愛し通されたのに、なぜユダは滅びたのでしょうか。

自分にあてはめてみよう

1 あなたは主イエスに足を洗っていただきましたか。

2 あなたには、「あの人の足だけは死んでも洗いたくない」と思っている人がいませんか。

3 あなたは、最後まで愛し通される主イエスの愛を拒んではいませんか。

話し合ってみよう

1 足以上に汚れている部分はどこですか。そこからどのようなものが出てきますか(マルコ7:20-23)。

2 主イエスはどういうような生涯を送られましたか。私たちはどのように人々に仕えていけばよいのでしょうか(ピリピ2:1-8他)。

3 わだかまりのあった人と互いに赦し合い、仕え合うことができるようになった体験があれば、分かち合いましょう。

聖書 ヨハネ8・21～30
テーマ 上からきたかた

序論

今週から5週にわたって、主イエスがこの地上に來られた目的を学ぶ。今週のテキストは12節から続いており、主がパリサイ人と論争しておられる箇所である。主はすでに16節で、へわたしをつかわされたかたは、わたしと一緒だと明言された。その意味が理解できないパリサイ人たちに、主はさらに3つの宣言をされたのである。

一、わたしは上から来た

主イエスは、へあなたがたは下から出た者だが、わたしは上からきた者である。あなたがたはこの世の者であるが、わたしはこの世の者ではない。と、パリサイ人に対しておっしゃった。下とはこの世を意味している。主は、この世に誕生されたが、本来は上、すなわち天におられた方であり、この世に属する方ではなかった。もちろん、主イエスは、いろんな修業を積んで神のようになった方ではない。もともと神であられた方が、人となられたのだ。しかしパリサイ人は、それを信じようとはしなかった。だからどんなに論争しようとも、主がどういふ方がわからなかったのである。どれだけ律法の知識があつたとしても、どれだけ清い生活をおくったとしても、へもしあなたがたが、わたしのことを信じなければ、自分の罪の中で死ぬのです(24節、新改訳)と、主は宣言しておられる。天から下り、天に帰る方だけが、

人々を天に連れて行くことができる。人間の努力や行いと引き換えに天国にはいることはできないのだ。主イエスを信じなければ罪の中で死ぬ。だが主を信じる者は、罪の贖いと永遠の命が与えられ、天国に行くことができるのだ。

二、わたしは聞いたままを語る

主イエスは、へあなたがたはどういう者であるかは、初めからあなたがたに言っていると言われた。主は、父なる神から遣わされて、この世に來られた方であることを、ここでも教えておられる。また、宮きよめの時、すでにへわたしの父の家を商売の家とするなとおっしゃった(2・16)。また、安息日に病人を癒し、へ自分を神と等しいものとされた(5・18)。さらに宮の内でへわたしはそれのかた(父なる神)のもとからきたとも仰せられた(7・29)。何度も、自分と父なる神とは、父と子の関係であると示されたのだが、パリサイ人はそれを信じることができないでいた。

さらに主は、へわたしは、そのかたから聞いたままを世にむかって語るとおっしゃった。つまり、「自分が語る」とは、すなわち父なる神の言葉である」と公言されたのだ。主イエスは、いつも父に聞いてそのとおり語り、そのとおり行われたのだ。父なる神と主イエスとは、父と子の関係であられ、一致して行動されているのである。

三、わたしは父と共にいる

主イエスは、父なる神と一体であられた。主は、へわたしをつかわされたかたは、わたしと一緒に

おられる(29節)と証言しておられる。そのことは、主の十字架と復活の後にはじめて、不信仰な者にもわかってくるのだ。28節のへ上げてしまったという動詞は、3・14と同様、「十字架につける」という意味で用いられている(ヨハネ以外はいずれもこの用法をしない。本来は「称揚する」という意味)。主が十字架につけられることは、父なる神が主イエスをへひとり置きざりになさるゝことではない。主の苦しみは、父なる神の苦しみだった。へわたしをつかわされたかたは、わたしと一緒ににおられるという事実があるから、主は十字架の御業を成し遂げられたのだ。

結論

主イエスは、まず、上からこられた。すなわち、天からくだって人になられた。だから天に帰り、信じる者を天に迎え入れる。主イエスがこられたのは、父が遣わされたからであり、父の御心を聞いて伝えるためであった。天から下ったかた以外に父なる神の御心を知る者はいない。そして、主がこられたのは、父なる神と共に神の御業をなすためであった。それは十字架の贖いの御業であった。主イエスは、主を信じる者が天国に行けるようにするために、世にこられたのだ。

研究資料

(長田)

上からきた方

イエス・キリストがどのようなお方であるかは、神が聖書を通して私たちに知らせたく願っておられる最も重要なことである。私たちは、キリストを通してのみ、神の救いと祝福を受けることができるからである(ヨハネ5・39)。なかでも、最も基本的なこととして聖書が告げているのは、キリストが「上からきた」お方ということである。

「わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」(ルカ5・32、3月9日テキスト)。「人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるため」(マタイ20・28、3月30日テキスト)。「わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるためである」(ヨハネ10・10)。「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さった」(1テモテ1・15)。

特に、ヨハネによる福音書では、冒頭で、キリストが受肉された御子であることを明らかにしている。「すべての人を照すまことの光があつて、世にきた」(1・9)。「そして言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った」(1・14)。また、「天から下ってきた者」(3・13)、「上から来る者」(3・31)、「神がつかわされた者」(5・38)、「天からのまことのパン」(6・32)とも証しされている。

本日のテキストにおいても、ユダヤ人との対話を通して、終始、「上からきた者」(8・23)であ

ることを告げておられる主のお姿を見ることができ。キリストが、単に偉大な教師、宗教者と考えるならば、そこに眞の魂の回心は起こりえない。主キリストが「上からきたお方」であると理解することは、キリストにある新しい生涯への第一歩である。

テキスト

21 わたしは去って行く。主は、「上からきた者」として、天に帰る時が来るのを常に自覚しておられた(14・28、16・5、28)。

自分の罪のうちに死ぬであろう。キリストを天からの救い主として悟らないならば、罪の赦しはありえず、自分の罪のうちに死ぬことになる(24節)。わたしの行く所には、あなたがたは來ることができない。キリストを信じることにし、天国に行くことはできない。

22 あるいは自殺でもしようとするつもりか

キリストが天からきたお方であることを受け入れようとし、彼らは、「わたしの行く所に、あなたがたは來ることができない」と語られたお言葉を、正しく理解することができない。

23 下から出た者：この世の者。キリストを受け入れた者だけが、天的な領域に属する者として生きることができ(ヨハネ3・13)。

24 わたしがそういう者であること。28節の同様の言葉と共に、原文は、「エー・エイミ」。70人訳聖書出エジプト3・14に見られる表現(「わたしは…有る者」の部分)。

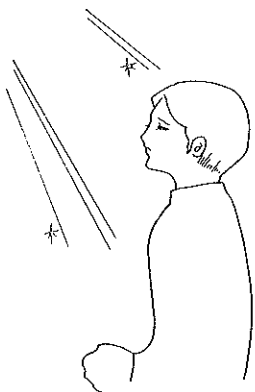
25 あなたは、いったい、どういうかたですか。キリストは、常にご自身を証してこられたにもかかわらず、理解し受け入れようとしない彼らは、同じ質問を無意味に繰り返す(10・24、25)。

26 わたしはそこかたから聞いたままを世にむかって語る。ここに、父なる神に従属して働かれる御子のお姿を見ることができ(28節、5・19、30、12・49、50)。

27 彼らは、イエスが父について話しておられたことを悟らなかつた。霊的な目が閉ざされている間は、どんな真理も悟ることが難しい。

28 人の子を上げてしまった後はじめて、「人の子を上げて」とは、御子を十字架につけることを意味する。そこには、御子が十字架を通して栄光を受けられることが示唆されている(3・14、12・28、33)。十字架と復活の後、ペンテコステの日に、ペテロが語った「あなたがたが十字架につけたこのイエスを、神は、主またキリストとしてお立てになったのである」という言葉を通して、悔い改めに導かれた多くのユダヤ人がいた(使徒2・36、38、41)。

29 わたしをつかわされたかたは、わたしと一緒ににおられる。父なる神が常に御子と共ににおられることもまた、繰り返し証しされている(16節、16・32)。



聖書 ヨハネ8・21～30
 タイトル 天から来られたイエス様
 中心聖句 あなたがたは下から出た者だが、わたしは上からきた者である。
 ヨハネ8・23
 目標 イエス様が天から下ってこられた理由は、十字架による贖いであることを発見する。

導入

イエス様は、もともと父なる神と聖霊なる神とともに天におられました。そして、この世に来られたのです。なぜだと思えますか。今週から5回に分けて、イエス様が来られたわけをお話します。

(起) ストーリーを語る

神殿の中で、イエス様は人々にお話をされていました。その中にはパリサイ人のようにイエス様をねだんでいる人たちもいました。そこでイエス様は彼らに、「わたしは去って行く。あなたがたはわたしを捜し求めるであろう。そして自分の罪のうちに死ぬであろう。わたしの行く所には、あなたがたは来ることができない」と、おっしゃいました。それでユダヤ人たちは、「何を言っているんだらう。自殺でもするつもりなんだらうか」と考えました。するとイエス様は「あなたがたは下から出た者だが、わたしは上からきた者である」とおっしゃったのです。そして、「わたしはこの世

の者ではない。もしわたしがそういう者であることをあなたがたが信じなければ、あなたがたは罪のうちに死ぬことになる」と話されたのです。パリサイ人たちは、律法を守って天国に行こうとしていました。しかしイエス様は、「それでは罪の中に死ぬ」とおっしゃいます。そこには、犯してしまった罪の解決はないからです。イエス様を信じなければ、天国には行けません。天から下ってきた方だけが、人を天に連れていくことができます。イエス様が天から下ってこられたのは、信じる者を天に連れて行くためなのです。

またイエス様は、「わたしをつかわされたかたは真実なかたである。わたしは、その方から聞いたまを世にむかって語るのだから」とおっしゃいました。イエス様が語ることは、父なる神から聞いたことをそのまま語っておられるのです。天から下ってきたイエス様だけが、父なる神様の御心を知って、それを伝えることができるのです。イエス様が天から下ってこられたのは、父なる神の御心を伝えるためなのです。

そして、「わたしは十字架につけられ、よみがえってから、はじめてあなたがたは、わたしに神から遣わされ、神の言葉をそのまま語ったことがわかるようになる」と、おっしゃいました。またイエス様は、「わたしをつかわされたかたは、わたしと一緒ににおられる」と、おっしゃっています。これは、イエス様は十字架につけられるけれど、それは父なる神から捨てられて救いに失敗したのではなく、父なる神と一緒に、御心になった御業であるという意味です。イエス様が天から下

ってこられたのは、父なる神とともに十字架の御業をなしとげるためだったのです。

(承) 学ぶべき真理

イエス様は、天から下って天に帰られました。神様の御心を知って、神様のおっしゃるとおりに行動し、十字架につかれました。それは、イエス様を救い主として信じる人が、永遠の滅びをまぬがれて、永遠の命という救いをいただくことができるようになるためなのです。

(転) 生活への適用

あなたは、弟と一緒に買い物するよう、お父さんから頼まれました。明日の牛乳とパンと、100円までならお菓子を買ってよいと言われました。弟が走り回っています。ほって帰りますか。あなたしか、連れて帰れませんね。弟が200円のお菓子を手にしたらどうしますか。お父さんの言葉をちゃんと伝えますね。では、いつも買う牛乳がなかったらどうしますか。お父さんに電話して聞きますね。ここから、イエス様と父なる神との関係が、どういったものがわかるでしょう。

結論

イエス様は、父なる神様から地上に遣わされた方、神のもとに人を連れ帰る方、神の御心を知って伝える方、神様と一緒に働いて、私たちを罪から救い出すために、十字架につかれた方なのです。そして今も、イエス様の言葉をそのまま信じて従うなら、私たちは救われて、イエス様のいらっしゃる天国へ行くことができますのです。

ワーク A

●暗唱聖句 (3月2日～30日)

わたしがきたのは、…罪人を招いて悔い改めさせるためである。(ルカ5・32)

●導入のヒント

イエス様は、人間としてお生まれになりましたが、本当は神様から遣わされた方です。私たち人間とは違う、罪のない神の御子です。だからイエス様の十字架を信じるなら、罪を赦していただくことができるのです。うれしいですね。信じていこうね。

●ワークについて

それぞれの色で、同じ数字のところを塗りましょう。何が出てくるかな？

ワーク B

●質問1 イエス様は神様と深い関係がある(神様と一体である)ことに気づきましょう。

●質問2 イエス様は自分の罪のためでなく、神様のみこころに従って十字架にかかられたことを知りましょう。

●質問3 イエス様は子どもたち一人一人のために天から下り、十字架で命をささげてくださいました。このお方を信じましょう。

●讃美歌 「イエスさまはすくいぬし」

(日本ホーリネス教団子どもさんびか 64番)

●今日のお祈り 「神様、天から地上にイエス様を送ってくださいありがとうございます。イエス様を信じます。私を天国にいれてください。」

ワーク C

●第2問 「上からきた」とは、もともと神であられたイエス様が、人間の姿をとってこの世に

来てくださったことを表しています。

●第3問 イエス様は、神様から遣わされたお方ですから、また神御自身ですから、父なる神様の心とまったく一致し、完全にそれに従われました。

●第4問 イエス様は神様であられたのに、人間となつてこの世に来て下さり、神様のお心を完全に成し遂げてくださいました。なぜそうしてくださったのかを考えます。よほどはずれていないかぎり、子どもたちの思いをそのまま受け入れてください。

ワーク D

●「わたしは上からきた者である」というイエス様の言葉は、聖霊によらなければ信じることでできないものです。分級では、自分や友だちや先生の出身地を確認しながら、どんなに尊敬する人も、立派な人も、みんな同じ人間であること、イエス様だけが上から来られた神であり、私たちとは全く違う天から来られた方であることを確認しましょう。子どもたちがそれを信じるができるよう、祈って備えてください。

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 主イエスはどこから来て、どこへ行くと言っていますか。また、父なる神とどういう関係にありますか。

2 「自分の罪のうちに死ぬ」とはどういう意味ですか。そうならないために、主イエスは何をして下さいましたか。

3 イエスがキリストであることを人々が正しく理解するようになるのはいつのことだと言われていますか。

4 主イエスを信じると、どのようなことになるのでしょうか。

●自分にあてはめてみよう

1 あなたは自分の罪のうちに死ぬ者ですか、それとも永遠のいのちを持つ者ですか。

2 あなたは信仰の決断をためらい、先延ばしにしていますか。ためらう理由は何ですか。

3 主イエスはあなたに何を期待しておられるでしょうか。

●話し合ってみよう

1 主イエスとユダヤ人とのやり取りを読んで、あなたはどの思いを持ちましたか。

2 どうしてユダヤ人たちは主イエスの言葉を素直に信じ受け入れることができなかったのでしょうか。

3 救いの門は永遠に開かれているのでしょうか (21節)。

聖書 ルカ5・27-32
テーマ 罪人を招くため

序論

今日登場する取税人レビは、マタイの福音書の著者マタイである(マタイ9・9、10・3参照)。取税人の彼は裕福であつたろうし、福音書を書き記しているように、ギリシャ語ができたインテリでもあつた。また、その町の取税人や罪人がおおい食事に集まつていることから、その町の顔役であつたことがわかる。なにゆえそのような人物が主の召しに應えたのだろうか。

一、罪人を招く

当時の取税人は、支配者であるローマ帝国の權威をかさにきて、同族のユダヤ人から税金を本来の金額以上に取りたて、着服していた。そのため、ユダヤ人からは、罪人の代表とみなされていた。しかし主は、自分から彼らに近づかれた。マタイは、この時以前に、すでに主イエスのうわさを聞いていただろう。ひょっとして、バプテスマのヨハネが八きまつているもの以上に取り立ててはいない(3・13)と語るのも聞いていたかも知れない。かといって、彼は、その仕事をやめてはいなかった。しかし、主が彼に、八わたしに従ってきなさいと言われたとき、彼は八いっさいを捨てて立ちあがったのだ。金持ちの取税人にとって、自分が築きあげたものいっさいを捨てることは、簡単なことではなかつたであらう。主イエスは、立派な人物を招かれるのではない。

罪人を招かれる。罪を悔い改めたから招かれるのではない。ありのままで招かれたのだ。私たちも、自分の現在の状況や状態はしかたない。どう取り繕つたとしても、そのような者なのだ。主は、「立派な人になったら、清い人になったら招き、受け入れてあげよう」とおっしゃっているのではない。ありのままのままで受け入れられて、そこから変えられていくのだ。

二、医者になどと

多分その日のことである。マタイは、自分の家で、主イエスのために盛大な宴会を催した。マタイがそうしたのは、主が、弟子の一人に加えてくださったことが非常に嬉しかったからに違いない。彼は、友人たちをたくさん招いた。しかし、自分は義人だと自認していたパリサイ人やその律法学者たちには、その様子を見て、八どうしてあなたたちは、取税人や罪人などと飲食を共にするのかと批判している。それに対する主のお答えは、八健康な人には医者はいらない。いるのは病人である(3・12)というものであった。

「病気が治つてから病院に来なさい」という医者があるだろうか。病気のままで病院に招いて、病気を取り除くのが医者である。同じように、主イエスは罪人に、「罪をきよめてから来なさい」とはおっしゃらない。罪あるままで招いて、罪を取り除いてくださるのだ。ありのままで招きに應え、そして主によって罪が取り除かれていくことを、主は望んでおられるのだ。

三、悔い改めさせる

それと対照的に、自分が病氣であることを認めない人は、医者の所に行こうとは思っていない。パリサイ人たちは、自分は健康だと思つていたゆえに、医者である主を必要とは思っていなかった。しかし本当は、彼らこそ、「自己義認」という大きな病をもっている者だつたのである。

「悔い改め」とは、罪を取り除くことである。主は、八わたしがきたのは、罪人を招いて悔い改めさせるためである(3・1)とおっしゃる。主は、マタイが罪を悔い改めたから、彼を招かれたのではない。主が罪人のマタイを招かれたから、彼は悔い改めたのだ。主は、罪人をそのまゝの姿で招かれる。その主の愛にふれた者は罪をそのままにしておくことができないで、罪から離れたいと切に望む。だからマタイは、取税人のままでいることはできず、いっさいを捨てたのである。

結論

主イエスは、罪人を招かれる。それは、その人を悔い改めに導くためにほかならない。そして、悔い改めた人を、主は最も敬われる。八神の受けられるいけにえは砕けた魂です。神よ、あなたは砕けた悔いた心をかろしめられませんか(詩篇51・17)。主が召された弟子たちは、だれも立派な人物ではなかつた。現代でも主が必要とされているのは、自分は健康だと自認する者ではなく、病人であることを認めて、「癒してください」と謙遜に求めて来る者だ。主は、そのような罪人を招くために、地上に来られたのである。

研究資料

(足立)

この箇所はイエスの宣教の普遍的範囲を示している。彼は肉体的ハンディキャップを持つ人や社会の部外者に関わり続ける。そしてこの箇所は、イエスの罪人たち(社会的追放者)との関わりに焦点を当てている。イエスの行為は、結果的にパリサイ人や律法学者たちの否定的な態度を引き起こした。彼らは不義なる者たちとの交わりを拒んでいた。これらのユダヤ人指導者たちの分離主義と、イエスという一人の教師の接触との間にある対比は、明白である。イエスの見本は教会共同体に対して明確なメッセージを伝えている。すなわち、教会は宣教活動において社会の部外者を探して関わる必要があるということ。イエスは罪人たちを受け入れ、オープンに交わっていた。

テキスト

27 イエスが出て行かれると おそらく5・19にほめかされている家からであらう。しかし5・12の「ある町」からという意味にも取れる。レビという名の取税人 マタイ9・9によれば取税人の名はマタイであるし、全部で4つある12弟子の名のリストにもマタイであられる。このことからレビとは、マタイのことである。1世紀以来、ユダヤ人はしばしば2つの名を持った(普通ヘブル語からアラム語名を一つ、他はギリシャ語からラテン語)。収税所に レビは主任徴税人ではなく、収税所で働く一職員であつた(おそらくカペナウム

の)。見て(エゼアサト)という語は、イエスがこの男を意識して選り出すことを示している。目を留めて(新改訳)。わたしに従ってきなさい ルカはこの語句をしばしば用いて、キリストの弟子になることを表現している(参照5・11、9・23、57、59、61、18・22、28)。もちろんここでは、クリスチャンとしてキリストとの深いつながりを持つことを意味するのではない。むしろクリスチャンになるための主の導きである。

28 いっさいを捨てて このことはマタイ、マルコの並行箇所には見当たらない。ルカはイエスに従うことが意味することを読者に明確にするため、このことを記したのであらう。このことはシモン、ヤコブ、ヨハネの場合とも結びつく(5・11)。主の弟子になるとは、すべてを献げることでもある(14・33)。群衆と弟子とは区別される(14・25、26)。イエスに従うことには、自己否定と、日々自分の十字架を負うことが含まれる(9・23)。家や家族を捨てる(9・57、62、18・28)。貧しさということも無関係ではない(6・20)。イエスに従ってきた これはレビがイエスに従い始めたことを意味することは(起動の未完了)。ここでは、レビの弟子としての始まりと継続が強調されている。引き続き起こる宴会も、レビがイエスに継続して従う一つの道と理解するべき。

29 レビは自分の家で、イエスのために盛大な宴会を催した ルカだけがこの食卓は「馳走のパーティー」であつたと伝えている。それまで、不正な方法でお金をかき集めることがレビの生活の中心

であつた(参照19・8)。しかし今彼は、イエスのために交わりの場を提供している。しかもかつての同僚やその筋の関係者たちを集めての分かち合ひである。間違いなくレビは、自分を愛して召し出して下さったイエスというお方を、友人たちに紹介したかつたのであらう。ルカは好んで食卓に言及している(7・36、50、9・10、17、10・38、42、11・37、54、14・1、24、19・1、10、22、7・38、24・29、32、41、43)。レビ家の食卓は霊的な場所になり、分かち合ひがもたれた。これこそ宣教の最前線である。

30 つぶやいて言つた ルカ15・1、2にも、パリサイ人やその派の律法学者の同じようなつぶやきが見受けられる(参照19・7)。イエスの弟子たち これは本福音書で最初の「弟子」という語の使用箇所。取税人 税金の徴収をローマ帝国とその權威から請け負い、不正な取立てをする仕事人は、当時のユダヤ社会からは軽蔑され排除された。飲食を共にする 誰かと食事を共にすることは社会的な重要さを持つていた。

31 イエスは答えて言われた 弟子につぶやいた人々に答えたのは、イエスであつた。イエスは、「医者が必要とするのは病人だ」という、反論できない論理を用いて指摘している。

32 わたしがきたのは イエスは罪人を招いて救うために地上に来られた(参照19・10)。ルカは悔い改めというテーマに大きな関心を持つている(参照3・3、8、10・13、11・32、13・3、5、15、7、10、16・30、17・3、4、24・47)。

聖書 ルカ5：27-32
タイトル 魂のお医者さん
中心聖句 わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。ルカ5：32
目標 主は、罪人を招いて悔い改めさせるために来られたことを発見する。

導入

しばらく、イエス様が何のために天から下ってこられたかを学んでいます。今日は、イエス様が、魂のお医者さんとなるために地上に来られたという話です。どんなお医者さんなのでしょう。

(起) ストーリーを語る

皆さんは、聖書の中のマタイによる福音書を知っていますね。その福音書を書いたマタイさんは、イエス様に会ったときは、レビという名でした。ある日イエス様が出かけられると、収税所で税金を集めているレビに会われました。そう、彼は収税人だったのです。その頃のユダヤの国は、ローマ帝国に支配されていたため、ローマの国に税金を納めていました。そこで収税人は、ローマ帝国から税金を集める仕事をまかされて、ユダヤ人から税金を取っていました。でも収税人たちは、定められた税金の額に上乗せした金額を取って、自分のものにしていたのです。だから収税人は金持ちでしたが、ユダヤ人たちからは大変嫌われて

いました。イエス様は、そのひとりであるマタイに目をとめて、「わたしに従ってきなさい」と声をかけられました。すると、マタイは何もかも捨てて、イエス様に従っていったのです。

その日、マタイは自分の家で、イエス様のために大きな宴会を開きました。送別会だったのでしょうか。収税人の友だちやその他の友だちも、たくさん集まってきました。マタイに友だちが多かったことがわかります。イエス様の弟子たちも、その食卓についていました。すると、外からようすをうかがっていたパリサイ人や律法学者たちは、弟子たちに、「どうしてあなたがたは、収税人や罪人などと一緒に食事をするのですか」と文句を言ったのです。彼らがそう言ったのは、正しい生活をしている人でも、罪を犯している人たちと一緒にいると汚れてしまうと考えていたからです。彼らは、自分たちは清くて、神様に赦していただかなければならないような罪はないと考えていました。そこでイエス様は彼らに対して、「健康な人には医者はいらない。いるのは病人である。わたしが来たのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」と、お答えになったのです。

(承) 学ぶべき真理

イエス様がこの地上に来られたのは、罪人を招いて悔い改めさせるためでした。イエス様は、それを医者にとえておられます。

皆さんは、病気が治ってから病院に行きますか。そんな人いませんか。病気のままお医者さんのところに行くと、病気を治してもらいます。イエス

様は、魂のお医者さんです。罪人に、「罪をきよめてから来なさい」とはおっしゃいません。「罪あるままで来なさい」と招かれます。イエス様は、罪あるままで罪人を受け入れられるのです。

お医者さんは、病気のままの病人を受け入れ、手術をしたり薬を与えたりして、病気を取り除いてゆきます。イエス様も、罪人を罪あるまま受け入れて、そこから罪を取り除いてゆかれます。それが「悔い改めさせる」ということです。罪に気づかせ、「ごめんなさい」と告白させ、イエス様が十字架で刑罰と弁償を代わりにはらって、罪を取り除いてくださるのです。

(転) 生活への適用

皆さんは赤ちゃんに、「自分でトイレができるようになったらミルクあげよう」と言いますか。そんなことできません。赤ちゃんが自分でトイレできるようになるのは、相当先のことです。赤ちゃんが、今トイレできないのはしかたありません。私たちは、赤ちゃんをありのまま受け入れて、できるようになるのを待ちます。

結論

それと同じことです。私たちが、今、罪人なのはしかたありません。事実です。イエス様は、罪人をそのまま受け入れて、そこから罪を取り除いてくださるのです。私たちの中には、罪のない人なんかいません。あなたもイエス様の招きに呼ばれて、ありのままイエス様の前に出て、罪を正直に悔い改め、赦していただき、きよめていただきますように。

ワーク A

導入のヒント

皆さんは、自分は天国行けると思っていますか。「私は大丈夫だ」といって、よく心の中を見ないなら、大変なことになってしまいます。でも、「私には罪があります」と、イエス様の前に行くとき、イエス様は十字架でその罪を赦してください。イエス様は、決して私たちを捨てたり、裏切ったりされません。素直に信じて従って行こうね。

ワークについて

教会に色を塗って切りぬき、入口の戸が開くように切りこみを入れます。みことばの書いてある部分を切り抜き、教会入口の裏にはりましょう。塔の頂上に十字架もはりつけましょう。

ワーク B

- 質問1 みことばを思い出して答えましょう。
- 質問2 子どもたちに、自分のなかにも罪があり、自分も罪人であることを話してください。
- 質問3 自分の中の具体的な罪をイエス様に祈り、赦していただきましょう。イエス様は罪人が悔い改めることを何よりも喜ばれます。
- 讃美歌 「すくいぬしにきたれ」
- (ふくいん子どもさんびか18番)
- 今日のお祈り 「神様、罪人の私を招き、悔い改めさせるためにイエス様を地上に送ってください。ありがとうございます。私の罪を赦してください。」

ワーク C

第2問 イエス様は罪人を招き、悔い改めに導いて、救いを与えようとしておられます。まず、自分に罪があると思えますか」と子どもたちに質問します。「ない」と答えるとそのまま炎の中ですが、ローマ3：23を開いたりして、「どうして「ない」といえるのか、祈りつつ、その子の心を探ります。多くの子どもは、「ある」と答えるので右側のラインの質問に答えていきます。「いじわるをしたことがありませんか」とか、「うそやごまかしがありませんか」とか聞かれるたびに、「ごめんなさい」と言い表して、イエス様のおられる道に進んで天国まで行きます。悔い改めた質問には、色を塗っても良いでしょう。

ワーク D

- 実生活での具体的な失敗例を挙げ、経験があるかどうかを話し合ってみましょう。
- たとえ失敗して、悪いと思うことがあっても、それを正当化したり、他者のせいにしたりするのは本当の解決にならないことを示してください。そんな時こそ、イエス様が招いておられるのですから、イエス様のもとに行くことが本当の解決になることを知り、そうできるように導けたらと思います。

中高校へのヒント

●考えてみよう

- 1 「収税人」とはどのような職業ですか。人々からどのように見られていましたか。
 - 2 どうしてレビは、「いっさいを捨てて立ち上がり、イエスに従って」いったのでしょうか。それは容易に決断できるようなことだったでしょうか。
 - 3 どうしてレビは主イエスと共に収税人や罪人を招いて宴会を催したのでしょうか。
- 自分にあてはめてみよう
 - 1 あなたは主イエスの招きに対してどのような態度を取っていますか。
 - 2 あなたは主イエスによる救いを必要とする罪人であることを認めますか。「罪人を招いて悔い改めさせるため」に来られた主イエスを信じますか。
 - 3 あなたの周囲にも主イエスを知らなければならぬ人がいませんか。
 - 話し合ってみよう
 - 1 主イエスが収税人のレビを12弟子のひとりとして選ばれたのはなぜでしょうか。
 - 2 主イエスに出会う前のレビはどのような生き方をしていたでしょうか。主イエスに出会った後はどうでしょうか。
 - 3 自分が病気であることを知らないで、どうなりますか。同様に、自分が罪人であることを知らないで、どうなりますか。

聖書 マタイ5・17～20 テーマ 律法を成就するため

序論

先週登場した律法学者やパリサイ人たちは、主イエスが罪人たちと食事をともにすることを激しく非難した。彼らは、律法を守ることを絶対的善として、常に人々を監視していた。そんな彼らには、主イエスが公然と律法を破っているように見えた。しかし、主は決して律法を無視されたのではない。むしろ尊重し、完成されたのだ。

一、律法学者の要求

当時の「律法学者」は、旧約聖書に記されている様々な戒めを解釈し、民衆に教えていた。しかし、自分たちが勝手に拡大もしくは縮小した解釈によって、律法本来の意義を失わせていることが多々あった。たとえば、祭司たちが犠牲をささげる前に身体を水で洗うという規定（レビ8・6）が拡大解釈されて、一般の人でも市場から帰ると、食事の前に体を洗わないといけないという「言伝え」が生まれた（マルコ7・1～13）。また、親と仲たがいがいた人が、親を扶養する費用をコルバン（神への供え物）にすると宣言するなら、もう親の面倒をみなくてもよいというひどい解釈もあった。「父と母とを敬え」という律法が、彼らの言伝えによって、無意味にされていたのである。

もっと大きな問題は、彼らはそんな自分勝手な解釈で民衆をさばき、守れない人々を排斥していたことだった。彼らは神の立場に立って、人々を

裁いていたのである。律法学者たちは、律法を遵守しているように見せながら、その実、律法を空洞化させていた。

二、主イエスの要求

では、主イエスは、律法をどのように見ておられたのだろうか。18節によると、律法の有効性が時代によって変わるものではなく、天地が滅びるまでつづくことを教えておられる。

また主は、律法をほんの少しも違えてはならないことも教えておられる。△律法の一点△とはヘブル語の最小文字のことであり、△一画△とはヘブル文字の角を意味する。それが鋭いか丸いかで違った文字になるのだ。そんな小さな違いも有効なのだから、慎重に解釈しないとけない。

また主は、最も小さい戒めの一つでも、これを行うように教えられた。人間の目からは小さく見えても、それは、その人にまだ律法の意味するところが残っているからであって、律法は何一つ軽んじてはならないのである。

しかし主イエスは、人間の「言伝え」ではなく、律法の真意を大切にされた。主は、律法を廃棄するためではなく、成就するために来られたのだ。それゆえに主イエスは、パリサイ人や律法学者たちにまさる義を要求された。それは、21節以降に6つ示されており、正しい行動だけではなく、正しい動機をも要求している。①悪意②情欲③不貞以外の理由④誓い⑤復讐心⑥敵を愛さないこと、以上すべてが律法に違反することだと、主は宣言された。主は外面的行為だけでなく、内面にまで

及び律法遵守を要求されたのである。

三、律法を成就するために

では、どのようにすれば、このような高い要求を実行することができるのだろうか。それは、主イエスによって完成するのである。律法は、神の目で見えた善悪を教え、罪に気づかせる。律法は、ガラテヤ3・24に記されているとおり、△わたしたちをキリストに連れて行く養育掛△にほかならない。律法は人に善悪を学ばせ、罪人であることに気づかせ、悔い改めに導く。だから、主イエスによって律法は完成する。悔い改めて、主を信じ受け入れて、罪が贖われるのだ。

しかし、犯した罪が赦されても、内面まで清くあることができるだろうか。これもまた主によって完成する。洗足のときに学んだように、どうしても汚れ、自分では清くできないところを、主はきよめてくださる。それは、私たちが足を差し出すことによってなされる。主を信じて自分を明け渡し、主に導かれていく信仰生活によって、律法は私たちの内面においても完成していくのだ。

結論

律法を守ることによって、永遠のいのちを得ることはできない。律法は主イエスによって完成するのだ。律法によって悔い改めに導かれ、主を信じて罪赦され、主によって罪がきよめられるとき、私たちはパリサイ人にまさる、信仰による義を得ることができる。このように主イエスは、律法を成就するために地上に来られたのである。

研究資料

（長田）

律法の成就

信仰義認の教えは、中世の霊的暗黒時代には見失われていたが、宗教改革者たちによって回復され、神の恵みの光を明らかにした。私たちは、行いによらず、ただ神の恵みにより、信仰により救われる。行いによって義とされようとして絶望に陥っていた人々は、この教えによって、喜びに満ちた救いへと導かれた。

しかし、このことは、神の律法を無にするものでもなければ、救われた者がどのような歩みをして構わないということでもない。救い主キリストは、私たちを罪の刑罰から救って下さると共に、罪の力からも救い、神の前での聖く正しい生活をもたらし下さるお方である。

信仰義認の教えを明確にしたパウロも、恵みによって救われた者が罪の生活を続けようとする考え方を断固否定する。「…なんと言おうか。恵みが増し加わるために、罪にとどまるべきであらうか。断じてそうではない。罪に対して死んだわたしたちが、どうして、なお、その中に生きておられるだろうか」（ローマ6・1、2）。

ジョン・ウェスレーは、きよめられた人々に対するいくつかの忠告の内に、「律法無用主義（アンティノミアニズム）」を警戒せよ」と述べている。すなわち、『律法』やその一部を『信仰によって空しくする』ことを警戒せよ」と（日本ウェスレ

ー出版協会『キリスト者の完全』17頁）。

主イエスご自身、弟子たちに対する山上の説教の最初の部分で、律法の廃棄者としてでなく、律法の成就者として、ご自身を現しておられるのである。

テキスト

17 律法や預言者 旧約聖書全体を表す表現（ルカ24・27）。

廃するためにきた、と思ってはならない キリストの教えは、人々から「新しい教え」として受けとめられていた（マルコ1・27）。それゆえ、聖書の律法を覆し、無にする者と受けとめられる可能性もあった。主は、ご自身に対するこのような受けとめ方を否定される。

廃するためではなく、成就するためにきた キリストの公生涯、十字架と復活、昇天と聖霊の附与は、すべて、私たちが罪と放縦の生活から潔め、真に律法を成就する者となすためのものである。

18 天地が滅び行くまでは、律法の一点、一画もするどくなく、ことごとく全うされるのである 神のみ言葉は、永遠の普遍性を持っている（イザヤ40・8）。神が語られた律法のすべての部分も、廃棄されるべきものではない。ここでは、おもに道徳的律法のこと言われているが、祭儀的律法においても、キリストは、雛型に対する本体として、祭儀的律法をも成就するお方である（ヘブル8・5、9・23、24）。

19 これらの最も小さいいしめの一つでも破り、

またそうするように人に教えたりする者は、天国で最も小さい者と呼ばれるであろう 信仰義認の恵みに立ちながら、神から与えられた戒めを守ることを軽んじるような考え方に陥るクリスチャンもいるであろう。彼らは、天国に入れないわけではないが、天国で最も小さい者と呼ばれる。

20 あなたがたの義が律法学者やパリサイ人の義にまさっていないければ、決して天国にはいることはできない 律法学者やパリサイ人の義は、外面的、形式的、人間的な義であった（マタイ23・5、23、25～28、マルコ7・8、9）。神の光が内に入り、内面の罪が示され、キリストの恵みにより、真に回心した者は、より内面的な義を求め、神の戒めをそのまま守ろうとする。そこに成就されていく義は、当然、律法学者、パリサイ人の義にまさったものとなるはずである。

以下、5・21～7・27においては、具体的に、天の父がキリストの弟子たちにどのような義を求められるのかを語っておられる。すなわち、人格を否定するような怒りや言葉（5・21～26）、情欲を抱いて異性を見ること（5・28）、安易な離婚（5・32）、高慢で誇大な言葉（5・33～37）、敵に対する復讐心に満ちた憎しみの心（5・38～48）、偽善的な施し、祈り、断食（6・1～18）、富に対する執着（6・19～24）、思い煩い（6・25～34）、人を裁く思い（7・1～5）等を取り除くべきことと、また聖別されて、全き愛の中に生きるべきこと（5・44～48、7・12）を教えておられる。

聖書 マタイ5・17・20
タイトル 律法が完成する
中心聖句 わたしが律法や預言者を廃止する
ためにきた、と思つてはならない。
廃するためではなく、成就するた
めにきたのである。マタイ5・17
目標 律法は、養育掛として罪の悔い改
めを促し、キリストに対する信仰
によって完成することを発見する。

導入

ここ数週間、なぜイエス様がこの世にくだつて
こられたのかを学んでいます。イエス様は、律法
を完成するために来たとおっしゃいます。どうい
うふうにして、律法を完成されるのでしょうか。

(起) ストーリーを語る

律法というのは、神様が人類に「これはして善
い事だからしなさい、これは悪い事だからしては
いけません」と教えてくださった規則です。当時
のユダヤの国には、パリサイ人や律法学者といっ
たユダヤ教に熱心な人々がいました。彼らは、イ
エス様の行動を見て、強い反感を抱いていました。
イエス様が律法を破っていると思つたからです。
たとえば、イエス様の弟子たちが旅の途中に麦
を摘んで食べたことがありました。パリサイ人た
ちはそれを見つけて、「安息日に仕事をしたとい
つて裁いたのです。でもイエス様は、神様の御用
をしている人は、安息日にも仕事をしますのですよ。」

と教えられました。

またある時、パリサイ人たちは、弟子たちが特
別な手の洗い方をせずに食事をしているのを、「先
祖の言い伝えを守っていない」と裁きました。確
かに、祭司が神様にささげられた物を食べる前
に、体を水で洗うように定めた律法があります。
しかしそれは、神様からの恵みを受け取るには、
聖くないといけないという意味であり、手を洗わ
ないで食べたらいけないという意味ではありません。
それを勝手に拡大して、普通の人が食事をす
る時にも、特別な手の洗い方をしないとだめだ
というのは大まかいです。イエス様は、「あなたが
たは律法の本当の意味をはきちがえて、かえって
内容のないものになっています」と教えられました。
イエス様は、律法を軽く見てはられません。「律
法は、天地が滅びるまで有効です。一点一画も変
えてはいけません。小さいと感じる律法でも破つ
てはいけません」とおっしゃっています。誰かに
腹を立てるのは殺人です。仲直りをせずにいるの
も殺人です。情欲、誓い、仕返し、敵を愛さない
ことなど、心の中の悪意でも律法に違反すると教
えられました。イエス様は、心の中においても律
法を守っているかを問われるのです。心の底まで
点検されて、罪がないと言える人はいません。し
かし、イエス様は「わたしは律法を完成させるた
めに地上にきた」とおっしゃいます。

(承) 学ぶべき真理

では、どうしたらイエス様の言われるように、
律法は完成するのでしょうか。

まず、律法は罪に気づかせるためにあるのです。
神様は心の中まで見ておられます。律法を学んで、
何が善い事か悪い事かを知って、自分の罪に気づ
きましょう。

次に、罪に気づいたら、「ごめんなさい」と悔い
改めましょう。小さいと思うことでも、罪である
ことに気づいたら、神様と人に謝りましょう。
そして、イエス様を信じ受け入れるのです。す
ると、あなたが自分の罪のために払わないといけ
ない弁償と、受けなければならぬ罰を、イエス
様が代わりに引き受けてくださいます。イエス様
が十字架であなたの身代わりに死なれたゆえ、あ
なたは赦されるのです。そうして罪が赦され、律
法は完成します。イエス様の十字架がなかったら、
律法は完成しません。主は、律法を完成するた
めに、この世に來られたのです。

(転) 生活への適用

あなたは、人に向かって腹を立て、「ばか」とか
「能無し」と言つたことありませんか。「それは
人殺しと同じだ」とイエス様はおっしゃっていま
すよ。あるいは、けんかをしたまままだ仲直り
してない人はいませんか。

結論

「ちょっとぐらいいいや」とか、「心の中だから
いいや」などと、勝手に律法を変えてはいけませ
ん。自分の罪に気づいたら、すぐ悔い改めましょ
う。そしてイエス様の十字架によって、その罪を
赦していただきましょう。イエス様は、律法を完
成するために來られたのです。

ワーク A

導入のヒント

嘘をつかない、わがままを言わない、意地悪を
しない。いつも全部守れたら、どんなによいでし
ょう。でも、なかなかできないね。けれどイエス
様を信じて、罪を赦していただき、そして罪の元
を始末してもらい、本当にイエス様に心の中に住
んでいただいたら、私たちは生まれ変わってイエ
ス様に喜ばれるように生きることが出来ます。う
れしいね。信じていこうね。

ワークについて

犬に色を塗って切り取り、ピンを付けて動かそ
う。

ワーク B

質問1 お話を思い出して答えましょう。

●質問2 イエス様は、人に見られるためでなく、
神様に喜ばれるようにと、心から喜んで律法に従
う人を喜ばれます。

●質問3 人間はどんなに努力しても罪を犯して
しまいます。私たちがいつも神様に喜ばれる者と
して歩めるようにと、聖霊によって一緒に歩み、
罪から守ってくださるのです。

讃美歌 「わたしはしゅのことばです」

(こどもさんびか 51番)

●今日のお祈り 「神様、罪が示され、赦され、
神の子とされ、イエス様と共に歩めることを感謝
します。」

ワーク C

第1問 イエス様は「律法を成就するため」に
來られました。

第2問 「律法を成就する」ことの意味を質問
しています。

●第3問 私たちは自分の力で律法を守ることは
できません。守る者と変えられるために、私たち
の罪を赦してください。イエス様に目を向けるよう
に、①②③のステップで導きます。イエス様を、
救い主と信じることの大切さを強調してください。
●最後のお祈りは、子どもたちの霊的狀態によっ
て、変えてください。

ワーク D

●私たちは、パリサイ人と同じように、自分勝手
な解釈で他人をさばき、「律法主義」におちいる弱
さを持っています。その律法主義という罪の弱さ
から解放されて、子どもたちと接したいと思いま
す。

●神のことはそのものを大切にされたイエス様に
ならい、神のことはである聖書の光の中に生きる
者としていただきましょう。自分の義ではなく、
主ご自身が私たちの義であり、聖なるお方である
ことから目をそらさないようにしたいと思います。

中高校へのヒント

考えてみよう

- 1 「律法や預言者」は何を指していますか。
- 2 「あなたがたの義」「律法学者やパリサイ人の
義」は、それぞれ何を意味していますか。
- 3 律法が与えられた目的は何ですか。
- 4 主イエスは、律法や預言者を成就するために
何をして下さいましたか。
- 5 20節は、「律法学者やパリサイ人以上に律法主
義的な生き方をせよ」と言っているのでしょうか
(マタイ18・3、21・28、ルカ18・9、
14他参照)。

自分にあてはめてみよう

- 1 あなたの義は、律法学者やパリサイ人の義に
まさっていますか。では、あなたは天国に入る
ことができないのでしょうか。
- 2 どうしたらあなたの義が律法学者やパリサイ
人の義にまさるものと認められるでしょうか。
- 話し合ってみよう
- 1 律法学者やパリサイ人は、主イエスのふるま
いについてどう考えていましたか。逆に、主イ
エスは彼らのふるまいについてどう考えておら
れましたか。
- 2 律法を熱心に守っていながら、律法を精神を
ないがしろにしている部分はないでしょうか。
逆に、主イエスによって律法が成就されたのを
よいことに、律法を軽視している部分はないで
しょうか。

聖書 マタイ10・34～39

テーマ つるぎを投げ込むため

序論

主イエスはここで、△つるぎを投げ込むためにきた△とおっしゃっている。でも、主は平和の君ではなかったのか。その疑問は、10章全体が12弟子に対して語られたことがわかると解決する。主は、直前の28節で、△からだを殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな△と、迫害について語られている。この箇所△つるぎ△とは、それで人を傷つけ、自分が傷つけられるものというより、迫害を引き起こすものを意味している。迫害を引き起こすつるぎとは、いったい何か。

一、主を愛すること

主は、△わたしよりも父または母を愛する者は、わたしに△さわしくない△と言われる。「主を愛すること」が、家庭に「つるぎ」をもたらす場合が確かにある。家族の和を乱す状況は、決してほめられたことではない。しかし、主に従うことは、家族の和よりもはるかに重要なものだ。

主の弟子になることによって、息子が父親と、娘が母親と、嫁がしゅうとめと仲たがいでいざるをえない状況は起こりうる(35節)。12弟子はみんな、家族と別れ、主イエスと生活をともにするようになった。ヤコブとヨハネは、主から招かれたとき△すぐ舟と父をおいて、イエスに従って行った△(4・22)。彼らの父は、働き手を失って気落ちしたかもしれない。他の10人も、大なり小なり、家

族から反対されたに違いない。主ご自身でさえ、母親や兄弟たちから早く思われていなかった(12・46～50)。

イスラム教徒の青年がクリスチャンになるとする時には、父親に命を狙われることも覚悟している。現代日本でも、親の反対をおしきつて、教会に来ている人はいる。教会学校にも、そういう子がいるかもしれない。しかしそれは、神の御心になったことなのだ。

二、負うべき十字架

ここで主は、△自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしに△さわしくない△と仰せられ、弟子としての覚悟を求められた。自分の十字架とは何か。自分の病氣やハンディキャップを「自分の十字架」と考える人が多い。しかし、主のおっしゃる十字架とは、そういう意味ではない。主の負われた十字架は、自分のためではなかった。罪を犯した全人類のためだった。つまり、弟子たる者の負うべき十字架は、他の人のために、自ら進んで犠牲を払うことである。たとい、迫害されたとしても、△天にいますわたしの父のみこころを行う△(12・50)のために生きることが、十字架を負うことなのだ。

自分を犠牲にして他者のために仕えていても、それが理解されず、かえって反対や妨害にあうこともある。主イエスが、何ゆえ十字架につけられたか思い出してほしい。まさに罪人や病人、遊女、取税人など、当時の社会で疎外されていた人々に仕えたからにはかならない。自分の十字架を負っ

て主に従っていくことが、つるぎをもたらすことは多々あるのだ。

三、十字架を負う報い

△自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の命を失っている者は、それを得るであろう△と、主は言われた。主はここで、何を第一にすべきかを弟子たちに教えられたのだ。自分の命や自分の家族を第一にすることは、父なる神のみこころではない。たとい命や家族を犠牲にしても、主を第一にし、自分の十字架を負っていくことが、父のみこころなのだ。家族で平和に暮らしていることは決して悪くない。けれど、自分たちが平和であればよしとして、苦しんでいる人々のことを考えないなら、本当の命を失っているのだ。たとい家族や社会から迫害されても、主に従って他の人々を救うために働くなら、本当の命を得る。肉体の命を失うことがあっても、永遠の命を得ることができるのである。

結論

主は、この世に、つるぎをもたらすために来られた。それは、何より主を愛すること、自分のためではなく他者のために犠牲をはらっていくことを意味している。主のために生きようと思つたら、必ず迫害はある。そういう生き方は、すぐに理解されるわけではないが、その人に永遠の命を得させ、さらには、迫害する家族や社会にも祝福をもたらしていく。私たちもまた、迫害にあっても、何より主を愛し、自分を捨て、自分の十字架を負って、主に従ってゆく者でありたい。

研究資料

(長田)

情の聖別

主キリストに従う生涯においては、人間的な情の聖別が必要とされる。家族愛や友情、周囲の人々との調和、和合ということは、クリスチャンとしても尊重していくべきことではあるが(エペソ6・1、1テモテ5・8、ローマ12・18)、こと神とキリストとに従うことにおいては、これらが妥協の理由となることを許してはならない。

祭司エリは、その子らの悪事を止めなかったことへの故に、裁きを受けざるを得なかった(サムエル上3・13)。偉大なイスラエルの王ソロモンも、異邦人の女を愛して離れなかったことへの故に、晩年、偶像礼拝の道に迷わされてしまった。そのため、イスラエルの国は分裂を余儀なくされた(列王上11・1～13)。夫婦の一致は喜ばしいことではあるが、アナニヤとサツピラのように、夫婦が一致して神を試みるならば、峻厳な裁きを免れない(使徒5・1～11)。

主キリストに従うことにおいては、どのような競争相手もあつてはならない。家族や人々との和を保つために、キリストに背くことしか方法がないのであれば、私たちは、あえて和を保とうとすることよりも、キリストに従うことを選ばなければならない。その意味では、キリストは、私たちの家族関係や周囲の人々との関係に波紋をもたらすし、そこにある人間的な和を破壊することさえな

さる。

すべてのことに優先して神に従うことの祝福を、私たちはアブラハムの生涯に見ることが出来る。彼は、神の約束によって与えられた最愛のひとり子イサクを献げるよう求められた時、神の言葉に従った。それゆえ、神は、アブラハムの子孫に対する祝福の約束を更新し、拡大された(創世記22・15～18)。そればかりか、アブラハムが手離したイサクを、彼の手に返された(創世記22・12)。

どんな親しい人々でもそれ以上に主を愛し、主に従うことを選び取って行くときに、主は私たちを祝福下さり、私たちは真の意味でそれらの人々を得るようになるのである(ルカ18・29、30)。

テキスト

34 地上に平和をもたらすために、わたしがきたと思うな。平和ではなく、つるぎを投げ込むためにきたのである。「平和をつくり出す人たちは、さいわいである」(マタイ5・9)。「剣をとる者はみな、剣で滅びる」(マタイ26・52)と言われ、ご自身、「平和の君」(イザヤ9・6)と呼ばれるお方は、私たちに真の意味での平和を与えて下さるお方である。しかし、神に敵対する人間的な平和に対しては、むしろ、これを破壊されるお方である。

35 人をその父と、娘をその母と、嫁をそのしゅうとめと仲たがいさせるためである。家族の中で自分だけキリストを信じようとするとき、そこには、大きな反対が起ることも覚悟しなければなら

ない。

37 わたしよりも父または母を愛する者…むしろ娘を愛する者は、わたしに△さわしくない△キリストは、私たちの第一の愛を獲得するべきお方である。

38 自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしに△さわしくない△キリストに従う道は、十字架の道である。そのためには、多くのものを犠牲にし、後ろに捨てて進むことが求められる。キリストは、それ以下の従い方で従われるべきお方ではない。

39 自分の命を得ている者はそれを失い、わたしのために自分の命を失っている者は、それを得るであろう。私たちは、真の命の道がどこにあるかを注意深く考えなければならない。自分の身を守ろうとして、キリストに従うことをやめてしまふならば、結果として、永遠の命を失ってしまふ。命をも犠牲にする覚悟でキリストに従う時、主は、私たちに永遠の命を与えて下さる(マルコ8・35、37)。このような逆説的關係は、人々との関係についても当てはまる。親しい人々との関係を保つとして、キリストに従うことをやめるならば、自分の永遠の命を失うばかりか、彼らを救いに導くことにも失敗するであろう。人々との関係を保つことよりも、キリストに従うことを優先して生きる時、彼らもまたキリストに従うことの価値を見出すことができ、私たちは、真の意味で彼らを得ることができるのである(マルコ10・29、30)。

聖書 マタイ10・34～39
タイトル 問題に立ち向かう
中心聖句 地上に平和をもたらすために、わたしがきたと思ふな。平和ではなく、つるぎを投げ込むためにきたのである。 マタイ10・34
目標 イエス様は、弟子になった者が、迫害されても主を愛し、犠牲払っていくために来られたことを発見する。

導入

イエス様は、平和の君と預言されているのに、「地上につるぎを投げ込む」と言われています。少し変ですね。イエス様の投げ込む「つるぎ」とは、いったいなんのことなのでしょう。

(起) ストーリーを語る

イエス様に反対して、悪口を言い、妨害し、命までねらう人たちがいました。そういうことを迫害と言います。弟子たちも、やがてそういう目にあつたことがあるので、イエス様は前もって、「からだを殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな」と、心構えを教えられました。その後、イエス様は、「わたしがこの世に来たのは、つるぎをもたらすためだ」とおっしゃったのです。つるぎとは何でしょう。人を傷つけ、殺すものでしょうか。いいえ、ここでは、反対や妨害、迫害を引き起こすもののことです。

迫害を引き起こす原因の一つは、家族よりもイエス様を愛することです。イエス様を、父や母、息子や娘より愛することは、家族との間にもめごとや迫害を生むことがあります。しかしイエス様は、「わたしよりも家族を愛する者は、わたしにふさわしくない」とおっしゃいます。そう、イエス様を愛することから始まって、私たちは愛とは何かを知り、家族や友だち、そして全ての人を愛することができるようになるのです。ですから、イエス様を愛することが第一なのです。弟子たちは、イエス様に従うように召されたとき、すぐに家族をおいて従いました。家を出るときには、親から反対された弟子もいたことでしょう。でも、まずイエス様を第一に愛するなら、家族も愛することができるのです。

またイエス様は、「自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしにふさわしくない」とも言われました。イエス様の十字架は、全ての人の罪を背負うものでした。「十字架を負う」とは、他の人のために犠牲を払うことです。十字架を負うことが、迫害を引き起こすこともあります。イエス様は、異邦人、取税人、罪人、病人、遊女、悪霊につかれた人といった、当時の社会でのけ者にされていた人のために、多くの犠牲を払われました。しかし、パリサイ人や律法学者は、イエス様を迫害しました。人のために犠牲を払って善いことをしているのに迫害されるっておかしいですね。でも現代でも同じことがあります。たとえば、いじめられている友だちを助けたら、自分もいじめられるようになったということ、一例です。のけ者になっている人は、そうする

ことで自分が偉くなったような気になっていきます。それなのに、のけ者になっている人を助けて、のけ者になっている理由をなくされてしまったら、自分が偉くなった気になれなくなってしまいます。ですから、その助けた人をうつらむのです。

(転) 生活への適用

あなたは、迫害されるのいやだから、十字架を負いたくないですか。自分がいじめられたら困るから、いじめられている子を助けませんか。そうなら、一緒にいじているのと同じことです。

(承) 学ぶべき真理

イエス様は、「つるぎを投げ込むために来た」とおっしゃいました。もめごとがないことがいいのではありません。どんなにめめても、反対や妨害や迫害があっても、いじめがなくなら、差別がなくなら、問題が解決する方がいいのです。そのためには、第一にイエス様を愛すること、弱い者のために犠牲を払うことが必要です。それは、あなたが迫害を恐れずに、一歩踏み出すことから始まります。主の弟子は、迫害を恐れず、主を第一に愛し、自分の十字架を負っていく人なのです。

結論

イエス様の投げ込むつるぎとは、反対や妨害を引き起こすけれど、問題を解決させるものでした。それは、イエス様を第一に愛し、人のために犠牲を払って問題に取り組むことです。私たちも弟子たちと同じく、反対や妨害にあっても、イエス様とともに問題に立ち向かってゆきましょう。

ワーク A

●導入のヒント

「神様を信じている」と、「教会学校にも休まず行く」と決心しても、反対する人が出てくることがあります。でも、そのような戦いは、起こって当然だと、イエス様はおっしゃいました。だから、イエス様を信じましょう。今はわかってくれない人も、いつか必ずわかってくれます。そして何よりも、神様は戦っている私たちのことをよく知っていてくださいます。

●ワークについて

十字架に色を塗りましょう。また、みこはもはりつけましょう。

ワーク B

●質問1 イエス様は、ご自分に従う者は迫害を受けることを話されました。

●質問2 迫害を受けたことのある子どもには、イエス様を大切にしているから迫害されたのだから、イエス様はそのことを覚えていてくださり、報いてくださることを話してあげてください。

●質問3 目に見えない永遠の命は、子どもたちにピンとこないかもしれませんが、何よりもすばらしいプレゼントであることを伝えてください。

●讃美歌 「イエス様が一番」

(友よ歌おう 2番)

●今日のお祈り 「神様、どんな迫害にあっても、イエス様に従います。私を助け、豊かに報いてください。」

ワーク C

●第1問 聖言を書きます。マタイ10・34の中の「つるぎをなげこむ」を書き入れます。

●第2問 「つるぎをなげこむ」の意味について考えます。イエス様を信じていることとすると、迫害があるということですか。

●第3問 迫害があったとき、私たちはどうすればよいのでしょうか。イエス様は、迫害の中を十字架に向かって歩きました。私たちも、イエス様を見上げつつ従って行きたいものです。具体的な迫害や苦しみの例に挙げましたので、どうするかを具体的に話し合ってください。苦しさばかり強調しないで、迫害があっても、良い結果に変えられた証しがあれば、ぜひ話してあげてください。

ワーク D

●信仰のゆえに迫害されること、自分自身の罪によって苦しむことは違います。自分の罪による迫害の場合には、悔い改めることが必要です。

●信仰ゆえの迫害を、子どもたちが体験している場合があります。そのことを頭におきながら分級をすすめてください。そのような子どもを励ましてあげる機会、また共に祈ってあげる機会となりますように。

中高科へのヒント

●考えてみよう

- 1 「平和の君」として来られた主イエスを信じることによって、どうして逆の迫害や仲たがいが生まれることがあるのでしょうか。
- 2 自分の十字架を負うとはどういうことですか。
- 3 「わたしのために自分の命を失っている者は、それを得る」とはどういうことですか。

●自分にあてはめてみよう

- 1 あなたは家族や同級生等から迫害を受けたことがありますか。
- 2 あなたは、どんな場合でも主イエスを第一に愛し、自分の十字架をとって主イエスに従う決意ができていますか。
- 3 十戒に「あなたの父と母を敬え」とありますが、両親があなたに聖言に反することを強制した場合、どうしたらよいでしょうか。

●話し合ってみよう

- 1 迫害を受けたとき、どう対処したらよいでしょうか (16～33節他参照)。
- 2 現在でも、主イエスを信じたら投獄される国や、宣教師を受け入れない国がいくつかあります。どこにあるか、調べてみましょう。
- 3 家族の意見よりも主イエスの御心を優先した体験や、それによって祝福された体験があれば、分かち合いましょう。
- 4 迫害を受けた体験や、迫害を乗り越えた体験があれば、分かち合いましょう。

聖書 マタイ20・20～28
テーマ 人々に仕えるため

序論

今週学ぶ出来事は、受難週の直前におこったこととして描かれている。17～19節で、主はこの福音書における第3回目の受難の予告をされた。しかし、弟子たちは主の御心を理解せず、誰が一番偉いのかと争っていた。そこで主は、今日学ぶ出来事を通して、「人に仕える」ということを弟子たちに教えられたのである。

一、何を求めているかわからない者

△ゼベダイの子ら▽とは、ヤコブとヨハネである。彼らの母が、子らと一緒に主のもとに来て、△ふたりのむすこが、あなたの御国で、ひとりはおなたの右に、ひとりは左にすわるように▽と願った。この兄弟は、舟と父をおいて主に従っていた。母親は、主の名声が高くなるにつれ、彼らの生き方を認め、出世してほしいと願うようになったのだらう。あるいは、マルコ10・35はふたりが直接主に願ったと記しているの、母親が彼らの気持ち代弁したのかもしれない。

いずれにせよこの求めは、的はずれであった。主は彼らに、△わたしの飲もうとしている杯を飲むことができるか▽と問われた。主は、罪に対する神の憤りの杯（イザヤ51・17）を、罪人の身代わりになって飲もうとしておられた。主は、その栄光の座につく（19・28）前に、十字架の苦難を受けねばならなかった。しかし、2人の答えは、

研究資料

(長田)

仕える生き方

聖書は私たちに、仕えられるよりも仕える生き方、受けるよりも与える生き方を選ぶよう教えている。まず第一に、神に仕えること（マタイ4・10）、そして、すべての人々に仕えること（エペソ5・21）、具体的に、与えられている賜物をもって（1ペテロ4・9～11）、また、委ねられている財や物質的なものをもって（使徒20・35）、仕えるべきことを教えている。

主キリストは、弟子たちに、仕える生き方を、言葉だけでなく身をもって、ご自身の生き方をもって教えられた。町々村々を巡り歩いての宣教と癒しのみわざは、休む暇のないものであった（マルコ1・32～34、37～39、45、3・20、4・1、6・31～34）。弟子としてご自身に従おうとする者は、「まぐらする所がない」（ルカ9・58）生活をする覚悟を求められた。十字架前夜、主は弟子たちの足を洗い、弟子たちに仕える生き方の尊さを教えられた。そして、仕える生涯のクライマックスとして、全人類の身代わりとして十字架にかかり、死なれた。与え尽くすその生涯に対して、人々から受けた報いは、離反、裏切り、中傷、あざけり、そして、十字架の苦しみと死。しかし、主は、神の御心に従って、仕える生涯を全うされた（ピリピ2・6～8）。

肉の思いは、仕えることよりも、仕えられるこ

△できます▽だった。この2人の弟子も、後には確かに苦難を受ける。ヤコブは、初代教会最初の殉教者となり（使徒12・2）、ヨハネはパトモス島へ流刑になる（黙示録1・9）。そこで、主は、△あなたがたはわたしの杯を飲むことにならう▽と言われた。しかし、主の右と左にすわる者は、父なる神が決められる。特に主の左には、父なる神がおられるのだ。彼らは、苦難の意味も、御国での主イエスの右と左の座の意味も、自分で何を求めているかもわかっていなかった。

二、求めに應える者

ヤコブとヨハネの勝手な行動を聞いた他の10人の弟子たちは憤慨した。そこで主は、12人みなを呼び寄せて、△あなたがたの間でかしらになりたと思う者は、僕とならねばならない▽と諭された。主は、これと同じことを、最後の晩餐を描くルカ22章と、洗足を描くヨハネ13章で語っておられる。事実、主は、全ての人に仕えてこられた。神のひとり子であるにもかかわらず、この地上に人として生まれ、癒しを求める病人を癒し、悪霊に苦しめられていた人から悪霊を追い出し、羊飼いを求める羊のような群衆を教え、罪人たちの友となり、弟子の足を洗われた。

人の本当の求めに應えることが、仕えることだ。主は人となって、人類に仕えられた。弟子たちは、何を求めているのかわからない者から、かえって人々の求めに應える者になるべきであった。

三、自分の命を与えること

さらに主イエスは、△人の子がきたのも、…多

とを好む。しかし、主の十字架には、私たちがそのような肉の思いからきよめ、仕えられる者から仕える者へと造り変える力がある。

テキスト

20 ゼベダイの子ら ヤコブとヨハネ（マタイ4・21）。

21 あなたの御国で、ひとりはあなたの右に、ひとりは左にすわるように キリストの十字架の死の予告直後に行われたこの申し出は、十字架に向かわれるキリストの心が弟子たちによって全く理解されていなかったことを示す。彼らは、十字架抜きでのキリストの王国の成就を期待し、そこでの自分たちの地位に関心を持っていた。

22 あなたがたは、自分が何を求めているのか、わかっていない 彼らは、御国の成就が苦難を伴うものであることを見逃していた（マタイ10・22、コロサイ1・24、IIテサロニケ1・4、5）。

わたしの飲もうとしている杯を飲むことができるか 厳密な意味で、十字架の死という苦き杯を飲むことができるのは、キリストのみである（マタイ26・39）。しかし、「自分の十字架を負って」（マタイ16・24）と言われたのと同じ意味をも込めて問われたのであろう。

「できます」と答えた おそらく、問われたことの真意を受け取って返答したのではないだろう。

23 確かに、あなたがたはわたしの杯を飲むことになる 今、そのことへの理解も覚悟もない弟子たちであるが、やがて彼らも苦難と迫害の道、

くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである▽とおっしゃる。これこそ、最大の仕えることである。△あがない▽とは、奴隷を解放するための身代金のことである。主は、罪の奴隷となっている者を解放するために、自ら奴隷となり、「ご自身の命を差し出されたのだ。△多くの人の△という句は、「すべての人のための」という意味である（新聖書注解）。主は、神に逆らう人々も含め、全人類のために自分の命を与えてくださった。自分の命を与えること、これ以上に貴い「仕えること」はない。主は全人類のために十字架にかかり、その命を与えて仕えられたのだ。

結論

主イエスは、仕えられるためではなく、かえって仕えるために、この世に來られた。主は、苦難を受け、自分の命を与え、私たちに仕えてくださった。それを知った私たちが、偉そうに生きていてよいだろうか。△人々ではなく主に仕えるように、快く仕えなさい▽と、エペソ6・7に記されているように、私たちが人に仕えていこう。人の必要に應え、人のために喜んで犠牲をばらおう。そういう人が、神に喜ばれ、神の国で最も偉大な者とされるのだ。

殉教の道へと進むことを、主はご存知だった。しかし、わたしの右、左にすわらせることは…彼らの申し出が、神の主権を犯す種類のものであることに注意を与えられる。

24 十人の者はこれを聞いて、このふたりの兄弟のことで憤慨した 残り10人の弟子たちのこのような反応は、ゼベダイの子らの中にあったのと同様のものが、彼らの中にもあることを示す。

25 異邦人の支配者たちは…、また偉い人たちは… キリストの弟子としての生き方は、この世の権力者たちが求めるものとは、全く別の方向を向いているべきことを教えられる。

26、27 かえって、あなたがたの間で偉くなりたと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたいと思う者は、僕とならねばならない キリストの弟子としての最も優れた生き方は、仕える生き方、僕としての生き方である。

28 人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり 神の御子として、すべての人に仕えられるべきお方であるのに、この方が地上に来て下さった目的は、仕えることにある。

多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためである 御子がこの世に來られた第一の目的は、私たちの罪の身代わりに死ぬこと、十字架に命を捨てることであった。まさに、主の十字架は、主の仕える生涯のクライマックスである。ちょうど同じである キリストの弟子として生きようとする者の生き方は、キリストの生き方と同じでなくてはならない。

聖書 マタイ20・20・28

タイトル 仕える人が偉いんだ！

中心聖句 それは、人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人のあがないとして、自分の命を与えるためであるのと、ちょうど同じである。

マタイ20・28

目標 イエス様が仕えられたように仕えることこそ偉いことを発見する。

導入

皆さんは、どんな人が偉いと思いますか。命令して、いろんなことをしてもらっている人でしょうか。それとも、してあげている人でしょうか。

(起) ストーリーを語る

イエス様が、十字架にかかれる少し前のことです。イエス様は、12弟子を呼び寄せて、自分はこれからエルサレムに上り、苦しみを受けた後に十字架につけられ、三日目によみがえることを打ち明けられました。しかし、このときの弟子たちは、このイエス様の言葉を聞いても何のことも、ちっともわかりませんでした。

このとき、ヤコブとヨハネのお母さんが、2人を連れて、イエス様の前に来ました。そして、自分の息子たちがイエス様の右と左の位につくことができるようにお願いし始めたのです。きくと、イエス様が近いうちにイスラエルの指導者になる

と考えていたからでしょう。すると、イエス様は

「あなたがたは、自分が何を求めているかわかっていません」と、おっしゃいました。そして、「あなたがたは、わたしと同じ犠牲を払うことができますか」と、質問されました。彼らは「できます」と、答えます。誰も、イエス様と全く同じ犠牲を払うことはできませんが、確かに彼らも迫害にあいました。しかし、天でどのような地位につくかは、父なる神様が決められることです。特にイエス様の左には、父なる神様がおられるのですから、その座に着くのは無理な話ですね。何を求めているのか、ヨハネもヤコブもわかっていませんでした。イエス様に次ぐ地位につくには、イエス様と同じほどの犠牲を払わないといけないのです。

こんなことがあったと知った他の弟子たちは、ヤコブとヨハネに対して非常に腹をたてました。それは、どの弟子たちも同じことを考えていたからです。彼らはみんな、他の人よりも偉くなって、命令できる地位を得たいと願っていたのです。

弟子たちの姿をご覧になったイエス様は、彼らを呼び寄せて話されました。「あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、みんなに仕える人となり、あなたがたの間で、リーダーになりたいと思う者は、僕となりなさい」と。弟子たちは本当にびっくりしました。そんなことは、考えたこともなかったからです。さらにイエス様は、「わたしは、人に仕えてもらうためではなく、かえって多くの人に仕えるために来たのです。多くの人を罪から解放するために、自分の命を捨てるのです」と、お話しになりました。

(承) 学ぶべき真理

皆さんは、「人に命令して何かをさせる人が偉い」と思っていますか。ところが、本当に偉いのは、人の求めに應えて、何でもしてあげる人なのです。「かえって仕える」というのは、人が必要としていかに応えてあげることです。イエス様は、神であるのに人となられました。そして、病気の人が癒しを求めてくると、癒してあげました。悪霊につかれていた人が、悪霊の追い出しを求めてくると、追い出してあげました。人々が、羊飼いのない羊のようにさまよっていると、進むべき道を教えてあげました。弟子たちが足を洗いあえないと、洗ってあげました。そして最も貴い仕えられた姿は、全ての人の罪を取り除くために、十字架にかかって、罪の代償を代わりに払われたところにあらわれています。

(転) 生活への適用

皆さんは、どんな要求に應えて、仕えたことがありますか。お風呂掃除？お買い物？例えば、お母さんに「お弁当を作って」と求めるあなたと、あなたの求めに應えて、お弁当を作ってくれるお母さんと、どっちが偉いのでしょうか。

結論

イエス様が十字架につかれたように、友のために命を捨てることはめったにありませんが、小さな犠牲を払う場面は、毎日あります。弱い人、困っている人の求めに應えて、彼らの必要を満たしてあげましょう。そのようにして、かえって仕える人が、天では偉い人なのです。

ワーク A

●導入のヒント

皆さんは、「人よりよく思われたい」とか、「あの人には負けたくない」という心を持っていませんか。イエス様は、神の御子だったのに、私たち人間を愛して受け入れて、仕えてくださいました。そして私たちの罪の為に十字架にかかってくださいました。私たちが一番求めるべきことは、人にも思われるのではなく、神様の前にどうかということだと思います。いつもイエス様を信じて従っていきましょう。

●ワークについて

冠に色を塗ります。「オタスケマン」になって、おうちの人や、友だちを助けてあげましょう。

ワーク B

●質問1 今の子どもたちは、僕や奴隷がどんな仕事をするのかわかりません。少し話してあげてください。

●質問2 イエス様は一番偉い神様ですが、あえて僕の姿をとってくださいました。そのことによって私たちに救いの道が開かれました。

●質問3 イエス様を信じる人にはイエス様が共にいて、なすべきことを教えてください。

●讃美歌 「わたしはしめのこどもです」

(こどもさんびか 51番)

●今日のお祈り 「神様、イエス様の十字架によって、神様の子どもになりました。イエス様のようになりしめとして歩めるように助けてください。」

ワーク C

●第1問 空欄には「つかえる」と「いのちをあたえる」と書きます。イエス様は、「自分の命を与えるほどに私たちに仕えてくださった」という事実を目をとめます。

●第2問 イエス様が仕えられた人を○でかこみます。すべての人のために仕えてくださった事を知ってほしいです。なによりも、私自身のために、イエス様は自分の命を与え、仕えてくださったことを受け入れられるなら幸いです。

●第3問 そのうえでイエス様は、子どもたちの生活の中で、「誰かに仕えるように」と語っておられます。具体的に書きましょう。

ワーク D

●仕えるというテーマは、子どもたちにとって日常的ではなく、程遠いテーマであるかも知れませんが、普段は、お母さんに身の回りのことをしてもらい、食事を用意してもらっている、仕えられている立場にあるからだと思います。

●「ザ・仕える度チェック」をしながら、自分にも仕えるチャンスがあることを知しましょう。その中で、イエス様がどのように仕えられたお方であるかを知ることができますように。

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 主イエスは、十字架刑を前にして、どのような思いでこれらのことをお話しになったのでしょうか。

2 ヤコブとヨハネが飲んだ苦難の杯はどのようなものでしたか。

3 「十人の者はこれを聞いて、このふたりの兄弟たちのことで憤慨した」のはどうしてですか。

4 主イエスが人々にお仕えになった具体例をいくつか挙げてみましょう。

●自分にあてはめてみよう

1 あなたは人に仕える僕ですか。それとも人の上に権力を振るう支配者ですか。あなたはどちらになりたいですか。

2 あなたが人に仕える僕となることができないのはどうしてでしょうか。

3 主イエスは、あなたが教会や家庭、学校で具体的にどのようなように人に仕えていくことを期待しておられるでしょうか。悔い改めるよう示されたことはありますか。

●話し合ってみよう

1 どうしたら権力欲や名譽欲から解放されて、人に仕える僕となることができるでしょうか。

2 自分の権利を主張して失敗した体験や、力で人を支配しようとして失敗した体験、逆に人に仕えることによって祝福された体験があれば、分かち合いましょう。

編集後記



編集にあたっての者にとっては、二〇〇二年度がもう終わったような気がします。「何とかここまでこぎつづけた」というのが、正直な気持ちです。忙しい中で、原稿を書いてくださった先生方に、心から感謝します。特に最終締切の8月には、キャンプなどの行事をぬって執筆してくださり、本当にありがとうございました。

この半年間も、どうしたらより良い内容の『牧羊者』を作製できるかをずっと考え続けていました。現代の子どもの心に届くものにするのはもちろんのこと、霊的にも深い内容をおこみしたい、楽しく学べるようにしたいと、気持ちばかりが先走りしてしまいます。理想に向かって少しでも近づこうと思うのですが、どこまでできたかについては、いつも不安です。ただ、主の御手に委ねて、お送りします。

私たちの教会では、『牧羊者』の力リキヨラムに従って、礼拝メッセージをしています。信徒の皆さんにも本書を

買っていただいて、予習や復習のために用いていただいています。「礼拝メッセージがさらに良くなる」と、なかなか好評です（ちなみに、私たちの教会では月に一度、大人と子どもと一緒に礼拝をもっています）。

先日、仕事で外国に住んでおられる方から下巻の申し込みがありました。近くに日本人教会がないため、夫婦ふたりで、『牧羊者』を読みながら主日礼拝を守っておられるそうです。こんな用い方もあるのだなと思いました。祈禱会や家庭集会で輪読しているという教会もあるようです。

『牧羊者』の主要な対象は確かに子どもたちですが、大人のためにも用いることができます。「大人の学びのために、何か良いテキストがないか」と捜しておられるなら、一度検討してみてください。このような形で本書が広がっていくことも幸いです。

今回は、以下の者たちで執筆やイラストの作成をしました。

聖書講解	鎌野 善三
研究資料	森沢 尚生
	長田 栄一
	足立 宏
メッセージ例	森沢 尚生
	光田 隆代
ワークA	小山 千晶
ワークB	鎌野 幸
ワークC	長尾 秀紀
ワークD	上森 泰造
中高科	木村 勝志
フラッシュカード	竹崎 光則

また、信徒の陰山恭子姉のイラストも用いさせていただきました。ありがとうございます。さらに編集の援助をしていただいた、森明子師と光田隆代師、また発送とワーク印刷の仕事をしてくださった、本部事務所の岡本羊一兄、そしてあくとの本田慈郎兄に、心からの感謝を申し上げます。

鎌野 善三

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇〇二年九月十五日発行

発行者

岩田扶美二

滋賀県近江八幡市多賀町五〇六の一

日本イエス・キリスト教団出版局

電話(〇七四八)三三二五五一一

FAX(〇七四八)三一一二二五一一

編集者

日本イエス・キリスト教団 教会学校局

印刷所

有限会社 あくと

電話(〇二九七)七八一五九三五

*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み